

京都府埋蔵文化財情報

第148号

京丹後市松田古墳群B支群(松田墳墓群)の調査	菅 博絵	1
京丹後市幾坂 40 号墳の調査	名村威彦	9
京都府福知山市和久寺廃寺出土平瓦の再整理	佐々木憲一	15
研究ノート 日本海沿岸地域の琴形木製品の共通性	長谷川 愛	25
浅後谷南遺跡出土の木製把・武器形木製品	新美祥人夢	33
左坂古墳群とその周辺	肥後弘幸	45
副葬された京都の土人形	加藤雄太	57
令和6年度発掘調査略報		63
1. カンジョガキ遺跡第5次(C地区)	2. 東風ヶ奥遺跡第2次	
3. 小中田遺跡第2次	4. 松田古墳群(墳墓群)第2次	
5. 上安久城跡第4次・上安久古墳群第2次		
6. 稚児野遺跡第6次	7. 宮ノ口遺跡第6次	
8. 余部遺跡第21次	9. 法貴古墳群第3次	
10. 栢ノ木遺跡第18次		
長岡京跡調査だより・144		75
現地公開・普及啓発事業(令和6年8月～令和7年1月)		77
センターの動向(令和6年8月～令和7年1月)		85

2025 年 3 月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

京丹後市松田古墳群B支群(松田墳墓群)の調査



調査地遠景(北から)

京丹後市幾坂40号墳の調査



漆塗革製盾出土状況

京丹後市松田古墳群B支群(松田墳墓群)の調査

－複数埋葬から単数埋葬へ－

菅 博 絵

1. はじめに

松田古墳群(松田墳墓群)は、丹後半島最長の河川である竹野川の支流であり、大宮町河辺を西に流れる大谷川左岸の丘陵上に位置する。

同一丘陵上には、中世の山城である松田城跡が所在し、大谷川左岸の河岸段丘上には遺物散布地である東風ヶ奥^(注1)遺跡、大谷川右岸域には、調査履歴がなく遺跡の詳細は不明ではあるが滝ノ谷古墳群や元林古墳群が存在する(第1図)。

今回の発掘調査は、一般国道312号大宮峰山道路事業に伴い、国土交通省福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施したものである。松田古墳群(松田墳墓群)は、従前の調査履歴はなく、令和5年度に実施した調査がはじめての調査となる。第1次調査は、令和5年5月8日から令和5年11月2日まで、第2次調査を令和6年5月1日から令和6年11月14日まで行なった。

2. 遺跡概要

松田古墳群(松田墳墓群)は、57基の台状墓や方墳・円墳からなる古墳群として知られ、立地によりAからEの5つの支群に分かれる^(注2)。B支群は、南から北に向かって伸びる尾根上に分布する

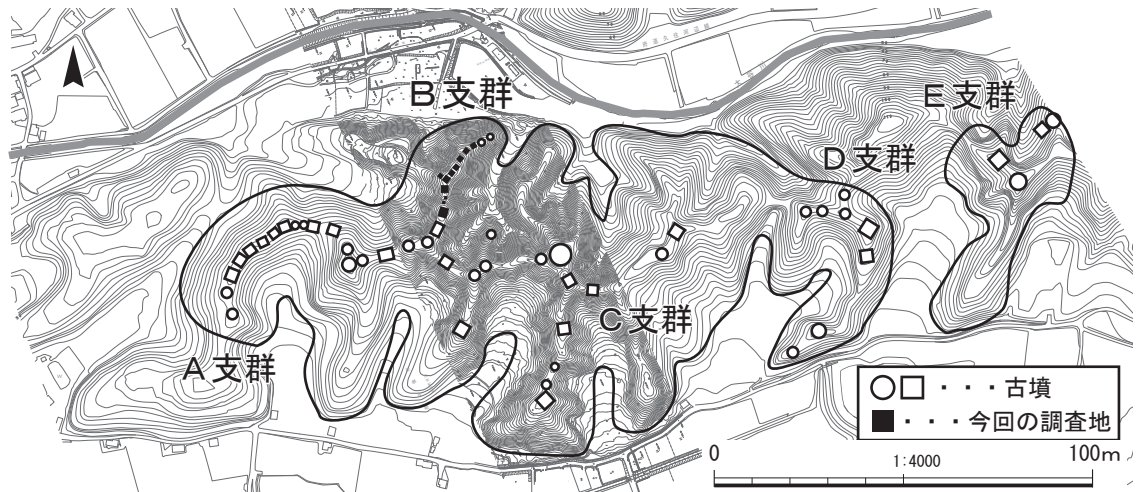
18基からなる古墳群(墳墓群)として周知されていたが、調査前踏査の結果、丘陵先端部に新たに1基の古墳(B支群19号墳)が確認され、加えて調査の結果新たに20・21号墓の存在が明らかになった。今回は、9号墳から17号墓・20・21号墓の11基の台状墓と古墳の発掘調査を実施した。

令和5年度は尾根下方の15号墓から17号墓の発掘調査を実施し、13・14・20・21号墓については表土除去と遺構の確認を行なった。

令和6年度の調査では、前



第1図 遺跡位置図(国土地理院 1/25,000 峰山)



第2図 松田古墳群墳墓・古墳分布図

年度に遺構確認を行なった13・14・20・21号墓と尾根上方の9～12号墳の発掘調査を行なった。発掘調査の結果、弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての台状墓と古墳で構成される墳墓群と古墳群であり、新たに2基の台状墓を検出したことから、B支群は21基以上からなる支群であることが明らかとなった。^(注3)

なお、本文では、弥生時代に属するものを台状墓と呼称しB支群○号墓、古墳時代に属するものを方墳と呼称しB支群○号墳、埋葬施設の遺構記号をS Tと表記する。

3. 検出遺構

今回の調査で、弥生時代後期後葉から末期の台状墓7基と古墳時代の方墳4基、49基の埋葬施設を確認した。^(注4)

B支群9号墳 調査区南側、尾根上方にある今回調査した古墳・墳墓の中で最も高い標高に位置する方墳である。墳丘規模は、長軸約12.0m・短軸約7.2mを測り、丘陵を削り出して成形したと考えられる。墳丘と埋葬施設の東側は土砂崩れにより一部失われている。

墳丘南側には丘陵尾根を切断する溝を検出し、底部から古墳時代初頭の器台が1点が出土した。

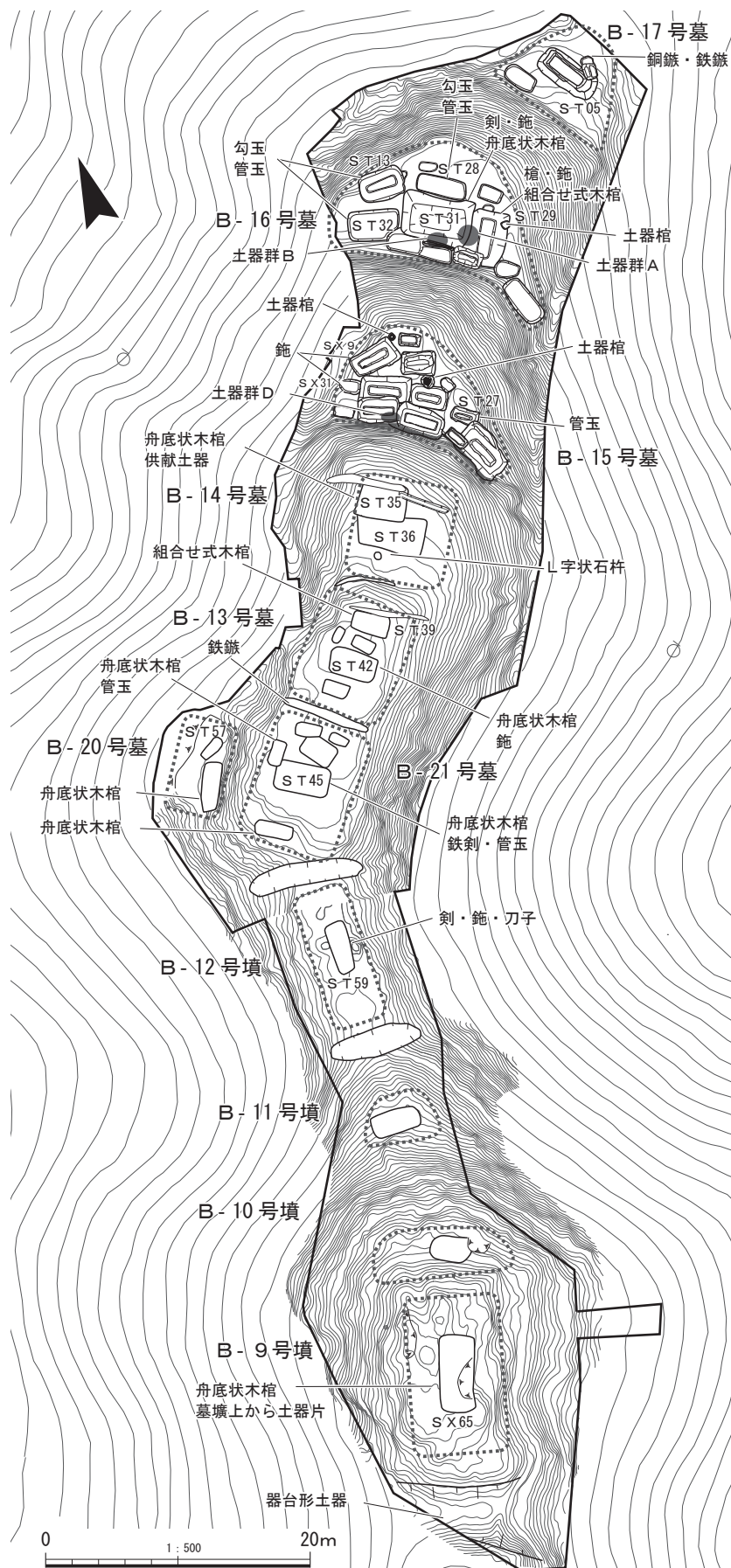
墳丘のほぼ中央から墓壙規模長軸約5.2m・短軸約2.2mを測る埋葬施設を検出した。墓壙内から長軸約2.1m・短軸約0.6mの舟底状木棺1基を検出した。木棺内から遺物は出土しなかった。

B支群10号墳 B支群9号墓の北側に位置する方墳である。墳丘規模は、長軸約10.2m・短軸約3.8mを測り丘陵斜面を削り出して平坦面を成形する。平坦面から埋葬施設1基を検出した。墓壙規模は長軸約2.4m・短軸約1.4mを測る。木棺痕跡は確認できなかったが、墓壙底面が平坦のため、組合せ式木棺が配置されていた可能性がある。墓壙内から遺物は出土しなかった。

B支群11号墳 B支群10号墓の北側に位置する方墳である。10号墳との比高は3mである。墳丘規模は、長軸5.2m・短軸3.8mを測る。10号墳同様丘陵斜面を削り出して平坦面を成形する。平坦面中央から埋葬施設1基を検出した。墓壙規模は長軸約3.4m・短軸約1.8mを測る。墓壙中央で長軸約1.8m・短軸約0.5mの舟底状木棺を検出した。墓壙内から遺物は出土しなかった。

B 支群12号墳 B 支群11号墳北側のやや狭まった鞍部に位置する方墳である。墳丘規模は、長軸約11.5m・短軸約4.5mを測る。墳丘の南北に尾根と直交する溝によって墓域が区画され、墳長平坦面から埋葬施設1基を検出した。墓域規模は長軸約2.3m・短軸約0.9mを測る。墓域の中央で長軸約1.8m・短軸約0.5mの舟底状木棺跡を検出した。木棺内東側面から全長約78cmの鉄剣1振、北側小口から刀子・鏝各1点が出土した。墓域の深さが約0.2～0.3mと浅いことから墳丘上部は消失し、墓域底部のみが残存したと考えられる。

B 支群13号墓 調査区中央の平坦面北側に位置する墳丘をテラス上に削り出した台状墓である。平坦面規模は、長軸約8.8m・短軸約7.5mを測る。平坦面から埋葬施設6基と隣接する21号墓との墓域を区画する溝1条を検出した。溝の埋土上層から鉄鏃1点が出土した。埋葬施設は尾根に対して主軸を平行または直交し



第3図 松田墳墓群遺構配置図

付表1 各墳墓の概要

墳墓名	規模 (m)	埋葬施設	出土遺物	備考
B-9	12.0 × 7.2	1基	土器片	溝から土器
B-10	10.2 × 3.8	1基	—	墓壇付近に土器
B-11	5.2 × 3.8	1基	—	墓壇付近に土器
B-12	11.5 × 4.5	1基	鉄剣・鏝・刀子	—
B-13	8.8 × 7.5	6基	鈿・土器	—
B-14	7.9 × 7.5	2基	土器	墓壇付近にL字状石柁
B-15	11.9 × 6.6	15基	鈿・管玉	墓壇上に土器
B-16	13.2 × 7.5	13基	鉄剣・鉄槍・鈿・勾玉・管玉	墓壇上に土器
B-17	7.7 × 5.7	2基	鉄鏃・銅鏃	墓壇付近に土器
B-20	7.3 × 4.2	2基	—	墓壇付近に土器
B-21	10.3 × 7.7	6基	鉄剣・管玉	地震による墓壇のズレ

て造られる。平坦面北側に位置する埋葬施設 S T39は、墓壇規模長軸約2.3m・短軸約1.2mを測る。墓壇から長軸約1.8m・短軸約0.5mの組合せ式木棺を検出した。棺内から遺物は出土しなかった。平坦面中央に位置する埋葬施設 S T42は、墓壇規模約2.9m・短軸約1.7mを測る。墓壇から長軸約1.9m・短軸0.5mの舟底状木棺を検出した。木棺内から鈿1点が出土した。埋葬施設 S T42を切り込む古墳時代初頭の土器棺墓を1基検出した。

B支群14号墓 B支群13号墳北側に位置する墳丘を階段状に削り出した台状墓である。13号墓との比高は0.5mである。平坦面規模は、長軸約7.9m・短軸約7.5mを測る。埋葬施設 S T36の検出面より0.38m上の表土直下でL字状石柁1点が出土した。平坦面から2基の埋葬施設と南側斜面裾部で墓域を区画する溝1条を検出した。

北側に位置する埋葬施設 S T35は、墓壇規模長軸約3.2m・短軸約2.2mを測る。墓壇のほぼ中央から長軸約1.9m・短軸約0.6mの舟底状木棺1基を検出した。棺の内外から土器片が出土した。出土した土器は同一個体であり、棺をある程度埋めた段階で破碎土器供献が行われたものと考えられる。南側埋葬施設 S T36は、断面観察から埋葬施設 S T35より先行して造られたものと考えられる。墓壇規模長軸4.1m・短軸1.8mを測る。墓壇のほぼ中央に長軸約2.4m・短軸約0.8mの舟底状木棺を検出した。棺内外から土器片が出土した。埋葬施設 S T35同様に棺をある程度埋めた段階で破碎土器供献が行われたと考えられる。

B支群15号墓 B支群14号墳北側約2.7m下に位置する墳丘を階段状に削り出した台状墓である。平坦面は、長軸約11.9m・短軸約6.6mを測る。平坦面から土器棺2基を含む15基の埋葬施設を検出した。斜面裾部付近から墓壇上祭祀に伴う弥生時代末期の土器がほぼ完形で出土した(第4図土器群D)。15号墓で検出した埋葬施設には、4m以上の大きな埋葬施設や中心埋葬施設は存在せず、長軸が2～3mの中規模な埋葬施設と長軸が1～2m未満の小規模な埋葬施設で構成される。各埋葬施設は、先行する埋葬施設の一部を重複して造られる。墓壇規模は長軸約2.8m・短軸約1.6mを測る埋葬施設 S T09のほぼ中央の長軸約1.9m・短軸約0.5mの舟底状木棺棺内から鈿が1点出土した。埋葬施設 S T31から鈿1点、埋葬施設 S T27から管玉7点が出土した。

B支群16号墓 B支群15号墓北側に位置する墳丘を階段状に削り出した台状墓である。15号墓との比高は0.5mである。平坦面規模は、長軸約13.2m・短軸約7.5mを測る。平坦面から13基



写真 B 支群16号墓土器群A (左)と土器群B (右)の出土状況

の埋葬施設を検出した。斜面裾部付近から墓壙上祭祀と考えられる弥生時代末期の土器が当時の現状を維持した状態(写真右)と、破碎した状態(写真左)で出土した。最大の埋葬施設である埋葬施設 S T31の周辺の埋葬施設は先行して造られた埋葬施設 S T31に重複して造られている。

平坦面中心の埋葬施設 S T31の墓壙規模は、長軸約4.5m・短軸約3.1mを測る。墓壙のほぼ中央に長軸約3.0m・短軸約0.8mの舟底状木棺跡を検出した。棺内から鉄剣と鉈各1点が出土した。

埋葬施設 S T31の東側に位置する埋葬施設 S T29の墓壙規模は、長軸約3.3m・短軸約2.2mを測る。墓壙中央から長軸約2.0m・短軸約0.5mの組み合せ式木棺を検出した。棺内から槍と鉈各1点が出土した。また舟底状木棺を有する埋葬施設 S T13、28、32から数点の管玉と勾玉が出土した。そのほか埋葬施設 S T29に重複する土器棺1基を検出した。

B 支群17号墓 北側尾根先端に位置する墳丘を階段状に削り出した台状墓で、長軸約7.7m・短軸約5.7mを測る。2基の埋葬施設を検出した。平坦面の中央の埋葬施設 S T05に重複する長軸約1.3m・短軸約0.8m、深さ約0.1～0.25mの浅い土坑から銅鏃6点と鉄鏃1点が出土した。

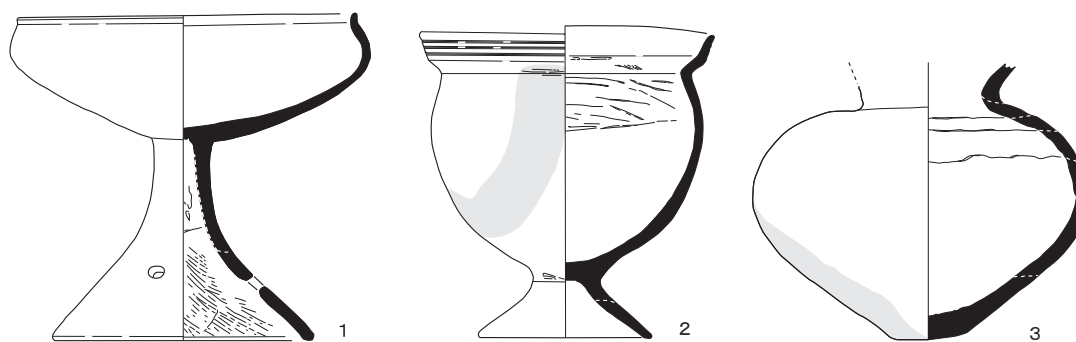
B 支群20号墓 21号墓の西側に位置する墳丘を階段状に削り出した台状墓である。比高は約2mで、墳丘は長軸約7.3m・短軸約4.2mを測る。2基の埋葬施設を検出した。木根等の攪乱が著しく、平坦面北側に位置する埋葬施設 S T57は上面が攪乱で消失し、墓壙底部のみを確認した。

B 支群21号墓 13号墓南側に位置する墳丘をテラス上に削り出した台状墓である。平坦面規模は、長軸約10.3m・短軸約7.7mを測る。埋葬施設は先行する埋葬施設の一部を重複して造られる。平坦面中央に位置する墓壙規模長軸約3.1m・短軸約1.8mを測る埋葬施設 S T45では、長軸約2.2m・短軸約0.6mの舟底状木棺を検出した。棺内から鉄剣1振りと管玉6点が出土し、木棺西側小口付近からは赤色顔料を検出した。埋葬施設 S T45は地震によって地層が切断され西側が約10～20cm落ち込む。埋葬施設 S T45の西側にある埋葬施設 S T52も地震によって一段低い位置にずれた可能性がある。

4. 15・16号墓出土土器

15・16号墓の墓壙上で出土した土器群A・B・Dについて紹介する(第4・5図)。出土した土

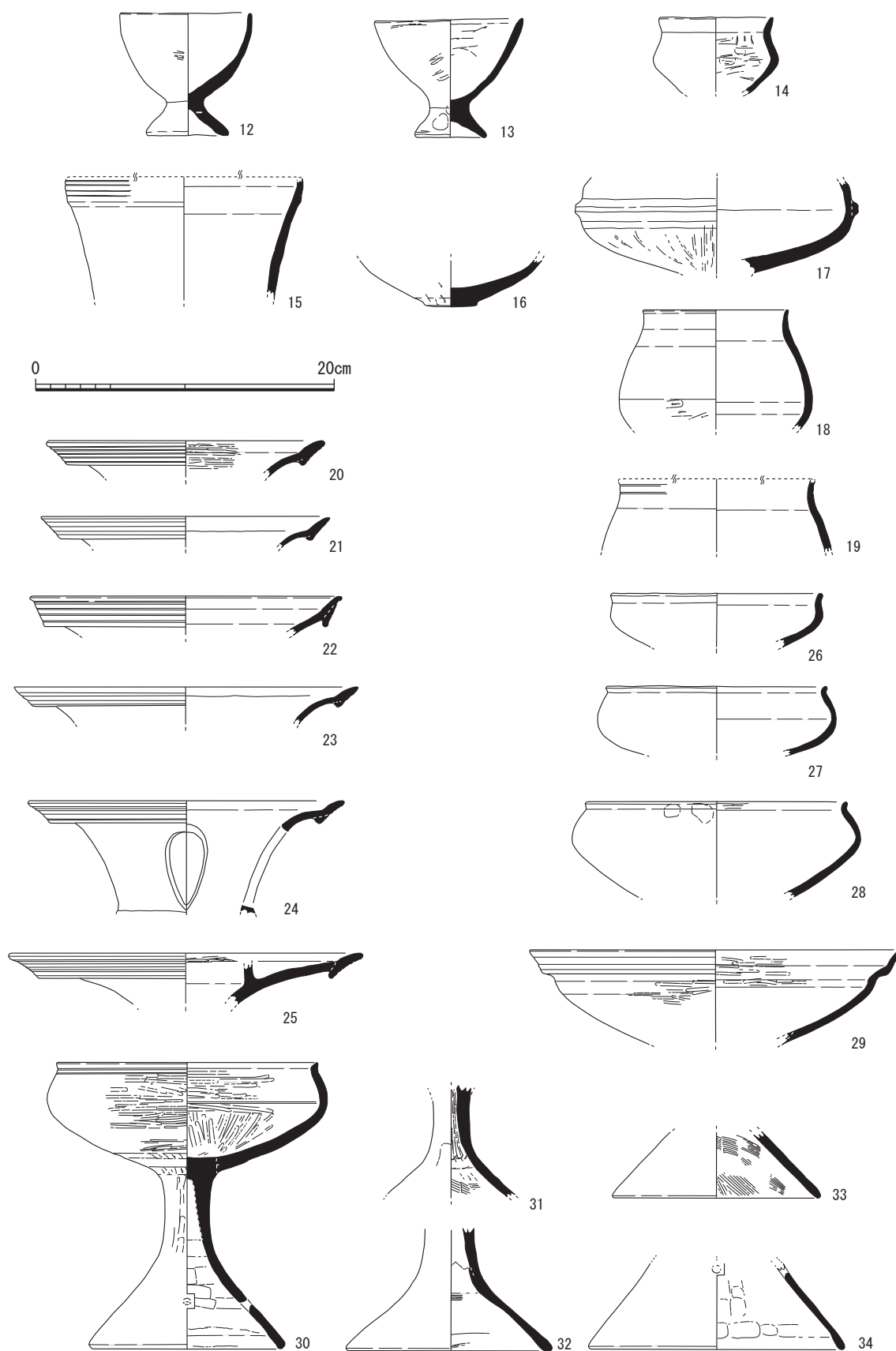
土器群D



土器群B



第4図 15号墓・16号墓出土土器(土器群D、土器群B)実測図



第5図 16号墓西側出土土器(土器群A)実測図

器は擬凹線文を施す高杯や器台、台付壺を含む。摩滅が激しく調整が不明瞭なものが多い。高野編年の西谷2式に位置すると考えられる。^(注5)

1～3は15号墓から出土した土器群Dである。1は脚部三方に透かしのある高杯である。外面は摩滅が激しいため調整は不明である。2は台付鉢である。外面は摩滅が激しいが、ミガキが見られる。3は壺である。

4～10は16号墓西側から出土した土器群Bである。4～6は擬凹線を持つ器台で、7は装飾器台である。5・6が同一個体の可能性がある。8は鉢である。9～11は高杯である。

12～34は16号墓西側から出土した土器群Aである。12～14は台付鉢である。12は外面に磨きが見られる。15は長頸壺の口縁である。16は壺の底部である。17は台付壺である。18・19はワイングラス形の台付壺である。20～23は器台の口縁部で、24・25は装飾器台である。26～32は高杯である。33・34は高杯または器台の脚部である。

5. おわりに

今回、松田古墳群B支群(松田墳墓群)の調査では、地山を成形して造り出された11基の墳墓を調査した。出土した土器から、造墓活動は、弥生時代後期後葉に尾根の先端あたりからはじまり、尾根の上方の9～12号墳は古墳時代初頭に造られていたことがわかった。

弥生時代の台状墓(13～17・21・20号墓)は一つの平坦面に複数の埋葬施設を造り、古墳時代の方墳(9～12号墳)は一つの平坦面に単一の埋葬施設を造っていた。

弥生時代の台状墓には、14・16・21号墓のように先行して造られた中心埋葬施設の一部を重複して埋葬施設を造る台状墓と15号墓のように主たる中心埋葬施設がなく先行して造られた埋葬施設に重複して埋葬施設を造る台状墓、13・20号墓のように主軸をそろえるが互いの埋葬施設を重複することなく造る台状墓など埋葬形態の差が認められる。これらの台状墓は出土遺物から弥生時代後期後葉から弥生時代末期にかけての短期間に造られたと考えられる。

弥生時代から古墳時代にかけて、被葬者と葬送儀礼の変化を解明する上で貴重な資料を得ることができた。今回出土した遺物の整理作業や今後の調査成果を含めて被葬者間の関係性や墓制変化の画期を検討していく。

(すが・ひろえ＝当調査研究センター調査課主任)

注1 奥 勇介2022「第2章 東風ヶ奥遺跡第1次発掘調査」『浜詰遺跡・東風ヶ奥遺跡発掘調査報告書』(京都府京丹後市文化財調査報告書第24集) 京丹後市教育委員会

注2 大宮町教育委員会編『大宮町遺跡地図』(京都府大宮町文化財調査報告第17集) 大宮町教育委員会

注3 中里伸明2024「3. 松田墳墓群」『京都府埋蔵文化財情報』第146号 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注4 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2024『松田古墳群(松田墳墓群B支群)現地説明会資料』

注5 高野陽子2006「丹後地域－擬凹線文系土器の様式と変遷－」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター

- 漆塗革製盾について -

1. はじめに

幾坂古墳群は京丹後市大宮町周枳に所在する。高尾山を水源とする丹後半島最長の河川である竹野川の上流域、右岸の丘陵上に位置する(第1図)。幾坂40号墳は、幾坂古墳群の中で最も標高の高い丘陵尾根上の平坦面を占める。古墳群が立地する丘陵は花崗岩を基盤とし、西側には丹後半島で最大規模の盆地が広がる。丘陵では地震による地すべりと考えられる崖が多く認められる。尾根上には人為的と考えられる平坦面や地形隆起がいくつも確認され、墳墓と考えられている。調査は一般国道312号大宮峰山道路事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて、令和3年9月1日から令和4年1月28日まで実施した。

周辺には弥生時代から古墳時代にかけての墳墓・古墳が数多く分布する。三坂神社墳墓群は弥生時代後期の墳墓群で、6基の台状墓が調査された。舶載の素環頭鉄刀や3,000点をこえるガラス玉がみつかった。左坂古墳(墳墓)群は弥生時代後期初頭から造営された、総数200基以上の弥生時代墳墓および古墳からなる丹後地域最大の墳墓群・古墳群である。左坂古墳(墳墓)群における弥生時代の墳墓は、いずれも丘陵上に築かれた台状墓で大小の埋葬施設がつくられており、墓壇内破碎土器供献や鉄製武器、工具、装身具などの副葬品が確認されている。弥生時代後期後半



第1図 調査地と周辺の主な遺跡(1/25,000)

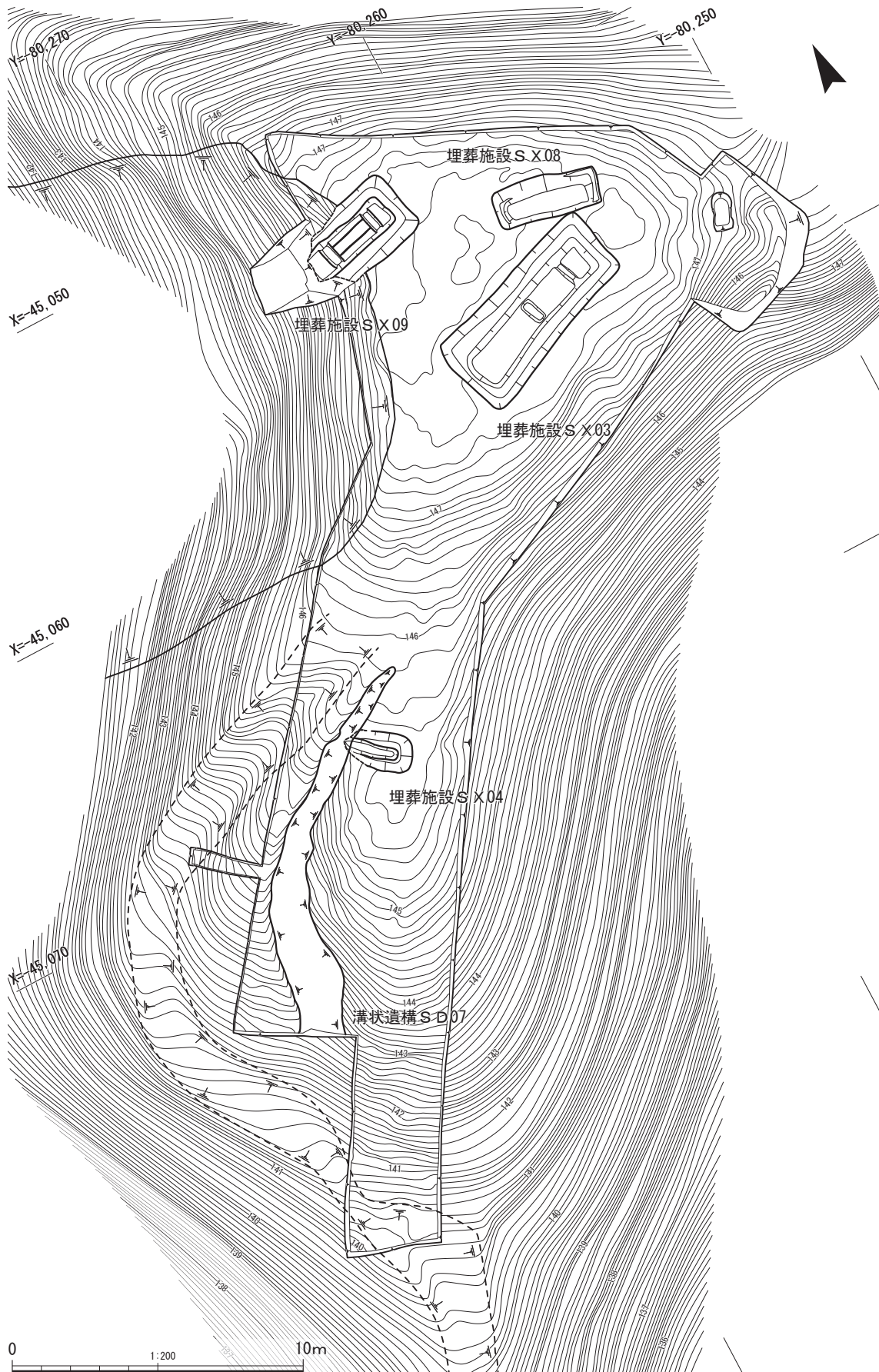


第2図 幾坂40号墳位置図(1/10,000)

から終末期の墳墓としては帯城墳墓群が挙げられる。墳丘は比較的大型であるが、埋葬施設は小さく、副葬品は鉄剣等の鉄製品のみで装身具は出土しなかった。古墳時代前期には竹野川右岸では三坂神社裏古墳群や有明古墳群が、左岸では通り古墳群が形成される。三坂神社裏古墳群では銅鏃や鉄製武器・工具のほか装身具が出土しており、鉄製品には意図的に折り曲げられたものも確認されている。古墳時代前期末から中期前葉の有力墓としては全長32mの帆立貝形の前方後円墳、大谷古墳が挙げられる。花崗岩製の組合せ式石棺から捩文鏡、玉類、鉄剣、鉄斧などが完全な人骨とともに出土した。左坂古墳(墳墓)群は弥生時代後期から古墳時代後期までの墳墓・古墳群で、C支群では中期の古墳群が形成される。その中でもC21号墳は有力墓と捉えられる直径20mの円墳で、内部に2区画をもつ長大な組合せ式木棺が検出された。布巻きの捩文鏡、玉類、鉄斧、鉄鎌、豎櫛が出土している。古墳時代中期後半は竹野川右岸に所在する直径19mの円墳である清漬7号墳が有力墓である。盗掘により埋葬施設が破壊されていたが鉄留甲冑、鉄地金銅張方形金具、三環鈴が出土している。このほか、延喜式内社である大宮賣神社を中心に広がる大宮賣神社遺跡は古墳時代中期後葉には祭祀遺跡として成立していたと考えられる。

2. 遺跡の概要

幾坂40号墳は古墳群が所在する丘陵の最北、最高所に位置する(第2図)。調査前の標高は最高所で148.02m、緩斜面下で140.92mで、最高所における平野部との比高は約100mである。丘陵は東側から伸び、北西側と南西側へと分岐しており、幾坂40号墳はその分岐点に位置する(第3図)。墳丘は西側と南東側は地すべりによって崩落しており、調査前の墳丘平坦面は一辺約12.0mの隅丸三角形を呈していた。調査ではまず、尾根上の平坦面に小規模調査区を設定して調査を進めたところ、土壌状の落ち込みを確認したため、協議を行い、丘陵尾根平坦面および緩斜面にかけてをC地区として面的に調査を行うこととなった。丘陵がのびる南西側については緩傾斜に続く平坦面を確認し、さらに地形の隆起が南西側へと伸びていた。後世の林道による削平や、地すべりによる地形改変の影響はあるものの、平坦面では埋葬施設を1基検出した。



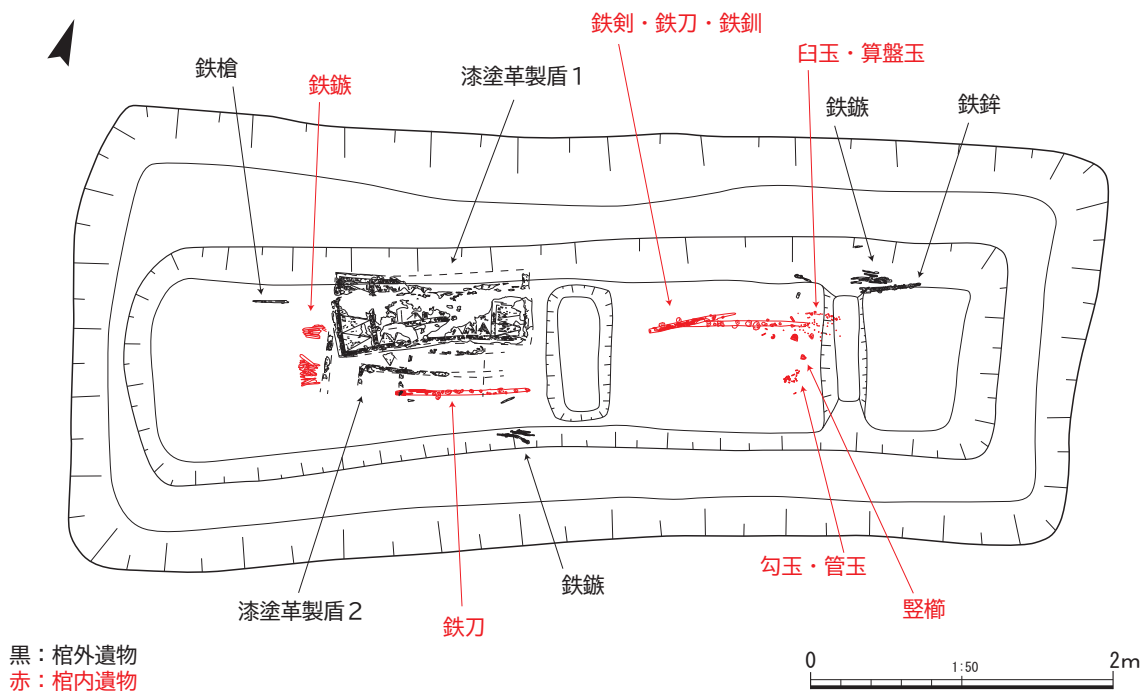
第3図 幾坂古墳群C地区遺構平面図(1/200)

3. 漆塗革製盾の出土状況

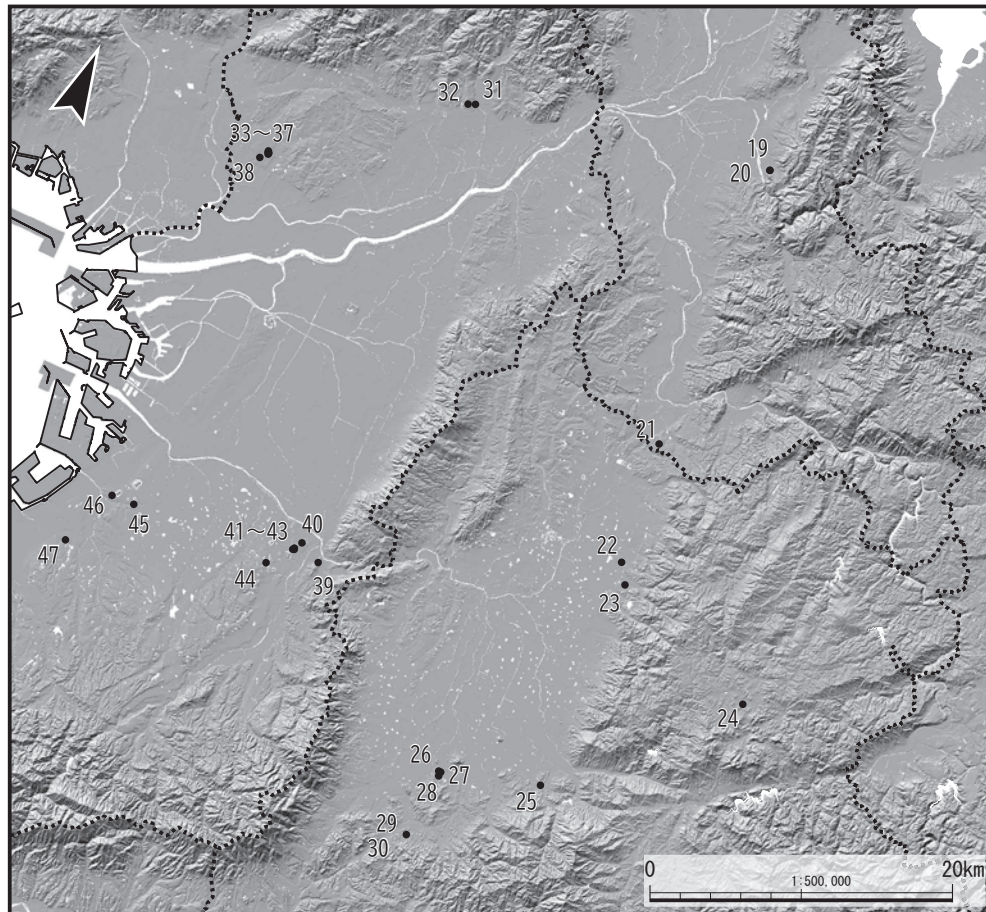
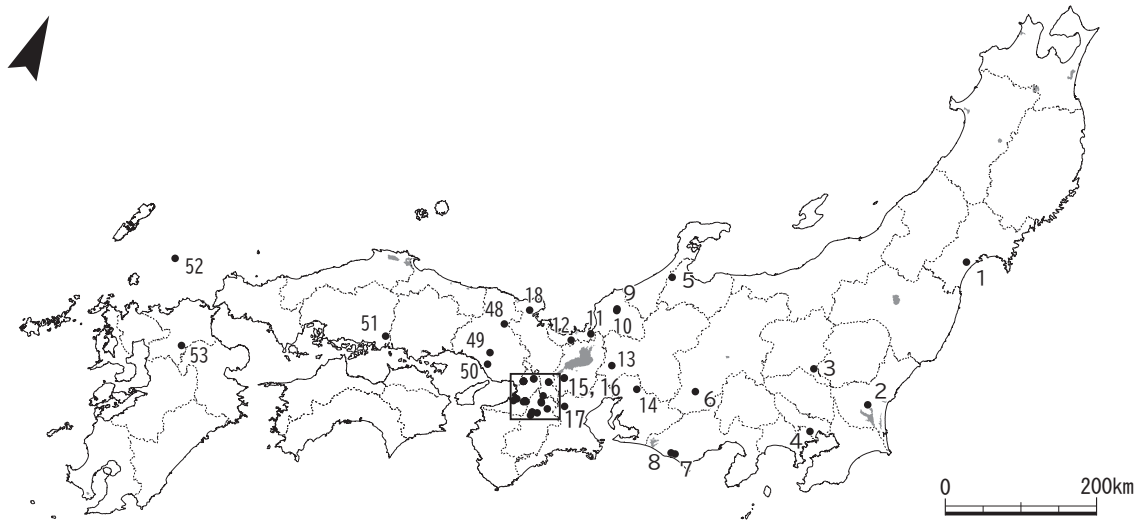
漆塗革製盾が出土したのは、調査区北東側平坦面で検出した埋葬施設S X03である(第4図)。主軸は東西方向を志向しており、N70°Wである。墓壙は検出面で短辺約2.7m、長辺約6.7m、検出面からの深さ約1.3mで、二段墓壙である。墓壙検出面から0.65m掘削した段階で漆塗革製盾が2点出土した。北側の漆塗革製盾1は遺存状態が比較的良好で、下段墓壙を掘削し始めた段階で姿を現しはじめた。壁面に部分的に遺存した漆被膜が確認されたのちに、下段墓壙から0.4mほど下位で面的な漆被膜の広がりが見つかった。漆被膜が出土した高さは一様ではなく、盾は棺蓋上やや北寄りに配置されており、木棺の腐朽とともに棺蓋を覆っていた部分のみが落ち込み、棺側上に位置する部分はそのまま遺存したことがわかる。盾の皮革部分が失われ、遺存した漆被膜が棺蓋に付着した状態で木棺が腐朽し、落ち込んだものと考えられる。盾1の漆被膜遺存範囲は最大幅約55cm、最小幅約45cm、長さ約132cmである。盾外周の文様構成は比較的良好に観察でき、上区と下区の鋸歯文が北東側を向くと考えられる。盾中央部分の漆被膜は木棺腐朽時に落ち込んだ際に引っ張られており、文様構成は不明瞭であるが、盾1および盾2はいずれも上辺が直線状で、側辺が弧を描く型式の盾である。他の遺跡から出土したこの型式の盾はいずれも幅75cm程度、高さ135cm程度の寸法であり、定型化した盾と評価される(青木2003)。このことから幾坂40号墳では、同形同大の盾が2点副葬されたと考えられる。

4. まとめ

幾坂40号墳では、地すべりや削平の影響を受けていたが、多彩な遺物が出土した。鉄製品の出土数は総数で50点を超え、白玉等の玉類は1500点以上出土した。出土した遺物のうち、型式学的



第4図 埋葬施設S X03遺物出土状況(1/50)



- | | | | |
|----------------|---------------|------------------|------------------|
| 1 : 春日社古墳 | 12 : 向山 1 号墳 | 23 : 上殿古墳 | 34 : 御獅子塚古墳 |
| 2 : 舟塚山 17 号墳 | 13 : 遊塚古墳 | 24 : 三陵墓西古墳 | 35 : 狐塚古墳 |
| 3 : 鶴山古墳 | 14 : 志段味大塚古墳 | 25 : メスリ山古墳 | 36 : 北天平塚古墳 |
| 4 : 野毛大塚古墳 | 15 : 椿山古墳 | 26 : 新沢千塚 115 号墳 | 37 : 南天平塚古墳 |
| 5 : 谷内 21 号墳 | 16 : 新開 1 号墳 | 27 : 新沢千塚 139 号墳 | 38 : 女塚古墳 |
| 6 : 溝口の塚古墳 | 17 : 石山古墳 | 28 : 新沢千塚 508 号墳 | 39 : 玉手山 4 号墳 |
| 7 : 五ヶ山 B-2 号墳 | 18 : 幾坂 40 号墳 | 29 : 市尾今田 1 号墳 | 40 : 高塚山古墳 |
| 8 : 堂山 1 号墳 | 19 : 宇治二子山北墳 | 30 : 市尾今田 2 号墳 | 41 : 鞍塚古墳 |
| 9 : 花野谷 2 号墳 | 20 : 宇治二子山南墳 | 31 : 土保山古墳 | 42 : 盾塚古墳 |
| 10 : 天神山 7 号墳 | 21 : 西山塚古墳 | 32 : 岡本山 A-3 号墳 | 43 : 珠金塚古墳 |
| 11 : 向出山 2 号墳 | 22 : ペンシヨ塚古墳 | 33 : 豊中大塚古墳 | 44 : 峯ヶ塚古墳 |
| | | | 45 : 城ノ山古墳 |
| | | | 46 : 百舌鳥大塚山古墳 |
| | | | 47 : 和泉黄金塚古墳 |
| | | | 48 : 茶すり山古墳 |
| | | | 49 : 玉丘クワンス塚古墳 |
| | | | 50 : 行者塚古墳 |
| | | | 51 : 亀山 1 号墳 |
| | | | 52 : 沖ノ島 7 号祭祀遺跡 |
| | | | 53 : 塚堂古墳 |

第 5 図 古墳時代革製盾出土遺跡分布図

検討から編年の進む鉄鏃についてみると、長頸鏃は含まれておらず、いわゆる鳥舌鏃とよばれる柳葉形の鏃を中心とする古墳時代中期前葉の鉄鏃群である。古墳時代の盾は、隅金具等から存在が推定される例も含めて、全国で約50遺跡から出土している(第5図)。古墳時代の盾は丹後地域では初めての出土であり、京都府内では4例目となる。特に漆塗革製盾としては西山塚古墳に次いで2例目となり極めて貴重な資料である。古墳時代中期に新たに政権を掌握した百舌鳥・古市古墳群造営集団によって生み出された漆塗革製盾は、定型化した中期甲冑と同様に新政権の権威の象徴として配布されたものとされており(橋本1999)、古墳時代中期の畿内の政権と関わりが深い副葬品である。

丹後地域では古墳時代前期前半には目立った有力古墳が存在しないが、古墳時代前期後半から中期初頭にかけて白米山古墳、加悦蛭子山古墳、網野銚子山古墳、神明山古墳、黒部銚子山古墳と相次いで大型の前方後円墳が築かれる。網野銚子山古墳が佐紀陵山古墳の類型墳(岸本2024)とされており、丹後の大型前方後円墳の造営と終焉が畿内の佐紀盾列古墳群造営と連動することが指摘されている(肥後2002)。これまでも指摘されてきたように、古墳時代前期後半から中期初頭は、丹後地域の首長層が畿内の政権と強いつながりを持っていた。その背景には日本海を通じた国内外との交易・交通路の存在が挙げられている(三浦1982)。しかし古墳時代中期になると丹後地域では大型の前方後円墳の築造は終息する。畿内地域では百舌鳥・古市古墳群へと古墳群の形成地が移動し、政治的変動も想定されている(白石2006)。幾坂40号墳は、この変動の後、丹後地域で大型の前方後円墳の築造が終息した後の古墳である。漆塗革製盾が古墳時代中期の畿内の政権が生み出した政治性の強い器物であるならば、政権との強固な関係性のもとに入手されたといえる。古墳時代中期初頭の変動を境に丹後では大型前方後円墳はつくらなくなるが、長持形石棺をもち甲冑が副葬された産土山古墳や離湖古墳などの有力古墳は築造されており、古墳時代前期後半とは異なる形でなお丹後地域と畿内の政権の繋がりは維持されている。漆塗革製盾の存在は、畿内を中心とする政治変動に対応していった地域勢力の動向を示しているのだろう。

(なむらたけひこ＝当調査研究センター調査課調査員)

参考文献

- 青木あかね2003「古墳出土革盾の構造とその変遷」『古文化談叢』第49集 九州古文化研究会
- 岸本直文2024「網野銚子山古墳の設計と佐紀陵山古墳との比較」『網野銚子山古墳―整備事業に伴う発掘調査Ⅱ―』(京都府京丹後市文化財調査報告書第26集) 京丹後市教育委員会
- 白石太一郎2006「古市古墳群の成立とヤマト王権」『応神大王の時代『河内政権の幕開け』』(大阪府立近つ飛鳥博物館図録42) 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 橋本達也1999「盾の系譜」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集 大阪大学考古学研究室
- 肥後弘幸2002「第二節 古墳文化の発展」『宮津市史』通史編上巻 宮津市史編さん委員会
- 三浦 到1982「丹後の古墳と古代の港」森浩一編『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ 同志社大学考古学シリーズ刊行会

京都府福知山市和久寺廃寺出土平瓦の再整理

佐々木 憲一

1. はじめに

和久寺廃寺は京都府福知山市字和久寺に所在する奈良時代の寺院跡である(第1図)。付近には横穴式石室を主体部とする102基の円墳と1基の方墳(1号墳)から構成される群集墳である下山古墳群が立地する。下山古墳群は1988年から1994年にかけて、農道の建設工事に先立ち、20基以上の円墳が発掘調査され、古墳の築造が6世紀から7世紀まで継続すること、また追葬は奈良時代(8世紀)まで継続したことが判明した(崎山1989、1993、1994)。下山古墳群は前方後円墳を伴わない後期・終末期群集墳であるが、逆に、それでも8世紀になって在地の有力者たちが古代寺院和久寺を建立したことに大きな歴史的意味があると考ええる。

和久寺廃寺は1980年代前半、圃場整備事業に先立ち3回にわたって発掘調査が実施された(大概1983、1984、1985)。発掘調査の結果、築地跡、塔跡、僧房跡と想定される掘立柱建物、工房跡などの遺構を検出したことは大きな貢献である。また塔跡が、想定される伽藍のやや西寄りに存在することから、遺構は明瞭ではないものの、東に金堂を配置する法隆寺式の伽藍を想定している(大概1985第4図)ことも意義が大きい。しかしながら、出土遺物についてはほとんどが未報告のまま今日に至っている。

発掘調査に先立つ1970年代後半、当時中学・高校生であった筆者が和久寺廃寺の瓦を多数表採し、平瓦には桶巻作りによるものと一枚作りによるものの両方が出土すること、軒丸瓦には山田

寺系単弁蓮華文と複弁蓮華文とが両方出土するが、後者は平城宮の影響を受けたものであることを明らかにし、その研究成果を1982年に自費出版した(佐々木1982)。『福知山市史』第1巻(1976)では、法隆寺出土瓦を引き合いに出して、また山田寺系の軒丸瓦が表採されることを強調し(山田寺系であることは確かである)、和久寺廃寺の年代を白鳳時代(7世紀)と古く見積もっているが、実際は和久寺廃寺の建立が8世紀まで続いていたことを筆者が明らかにしたのである。しかしながら、筆者が自費出版した本は福知山市教育委



第1図 和久寺廃寺の位置

員会に1982年夏に寄贈したにもかかわらず、1983年以降刊行の報告書(大槻1983、1984、1985)には筆者の研究成果がまったく反映されることはなかったのは極めて残念である。

発掘調査と報告書作成作業が行われた1980年代、筆者はアメリカ合衆国留学中であつたため発掘や整理作業に参加することはできなかった。1990年2月に帰国したが、1990年代は自身の学位請求論文の作成に忙殺され、和久寺廃寺出土資料のことは気にはなっていたものの、膨大な出土資料を大学院生の身分では時間的・金銭的にどうすることもできなかった。1999年に明治大学の専任教員となり研究費を申請できる身分になって以来、福知山市で当時の資料を数回にわたって実見・調査し、和久寺廃寺出土遺物を整理、資料化する機会をうかがっていた。すでに発掘調査報告書が出ている遺跡の出土資料の整理、再整理にはなかなか研究費がつかないのであるが、幸い2020年に「古代国家・帝国における中央・周縁関係に関する比較研究」を研究課題として学内研究費を獲得することができた。コロナ禍で研究を2021年に延期、奈良時代の畿内の外の地域ではどのように仏教文化が受容されたのかを探ることを目的として、研究費の範囲内で平瓦のみを整理することとした。軒丸瓦・軒平瓦や土器の分析については後日を期したいと切に思う。

2. 平瓦の分類

発掘調査を担当した大槻は、平瓦を凸面の叩き目に基づいてⅠ～Ⅵの6タイプに分類した(大槻1985 p.15)。今回の再整理では、そのほかのタイプ(型式Ⅶ, Ⅷ)を新たに確認したうえ、大槻の型式Ⅰ, Ⅱ, Ⅲを細分することとした(第2図)。以下、各型式を定義する。

型式Ⅰ：一辺6mm程度の菱形が浮き出るもので、一枚作りのもの。

型式Ⅰa：一辺6mm程度の菱形が浮き出るもので、桶巻き作りのもの。

カテゴリーⅠb：一辺6mm程度の菱形が浮き出るもので、一枚作りか桶巻き作りか判別できなかったもの。

型式Ⅱ：菱形がくぼむ叩き目を有するもの(桶巻き作り)。

型式Ⅱa：型式Ⅱに比べて大きめの菱形がくぼむ叩き目を有しているもの(桶巻き作り)。

型式Ⅱb：型式Ⅱに比べて、菱形のくぼみが深いもの(桶巻き作り)。

型式Ⅱ-Ⅲ：くぼむ叩き目が正方形と菱形の中間的な形のもの。

型式Ⅲ：正方形がくぼむ叩き目を有するもの。

型式Ⅲa：型式Ⅲに比べて格子が太いもの。

型式Ⅳ：一辺1cm程度の菱形が浮き出るもの(一枚作り)。

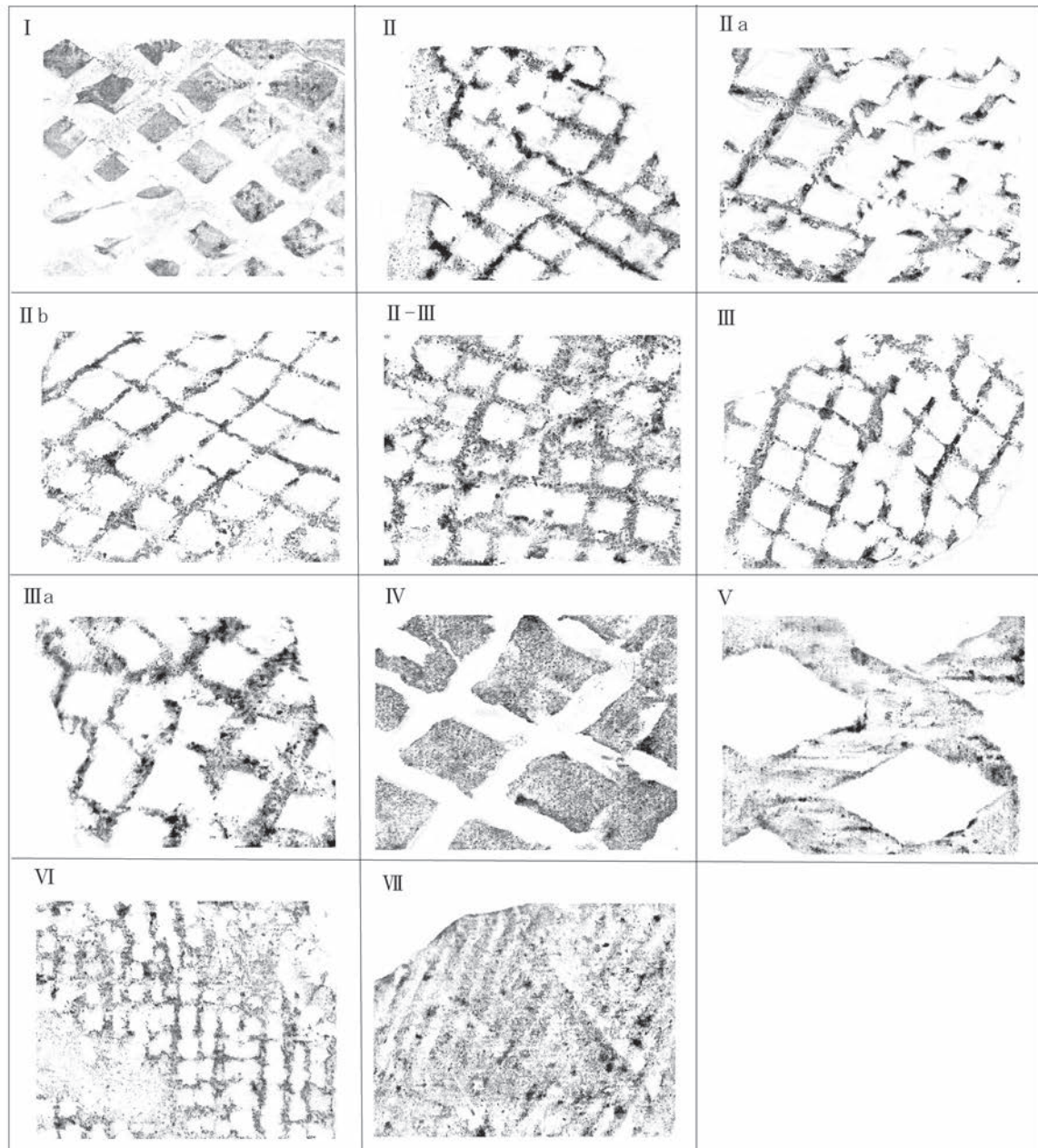
型式Ⅴ：非常に大きな菱形が非常に深く窪む叩き目を有するもの(桶巻き作り)。

型式Ⅵ：細かい正方形がくぼむ叩き目を有するもの。

型式Ⅶ(新型式)：縄目と思われる、線状の叩き目を有するもの。

型式Ⅷ(新型式)：叩き目が消されているもの。

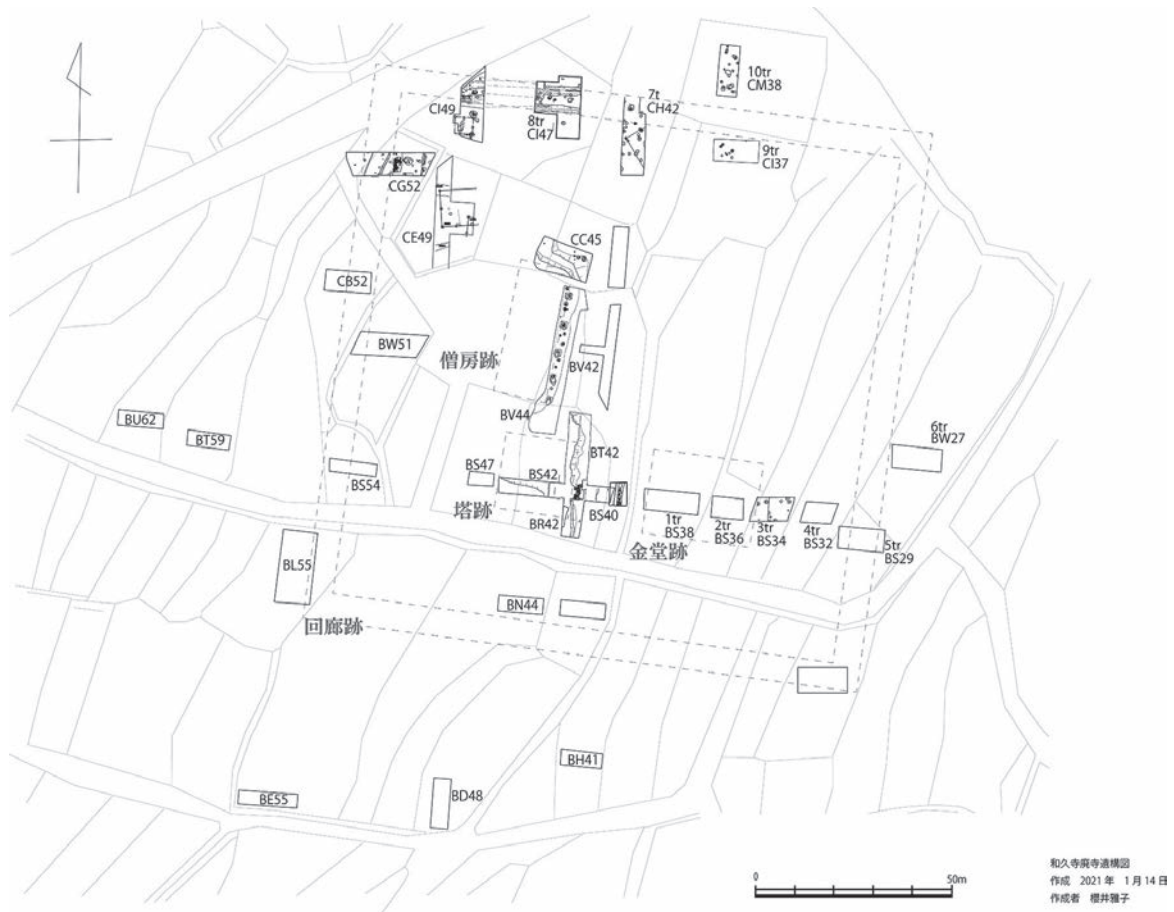
大槻が正しく観察するように(大槻1984 p.14)、「瓦自体の焼成・胎土・色調がかなり異なる」。これらの平瓦のなかで、複弁蓮華文軒丸瓦(大槻1984、1985がWM01とする)に伴う平瓦は、特に



第2図 叩き目に基づく平瓦の型式分類

和久寺廃寺で特徴的な叩き目を有する型式V、山田寺系単弁蓮華文軒丸瓦2型式のうちどちらかというと古い印象を与える、大槻分類のWM02に伴うのは型式II、III、IV、山田寺系単弁蓮華文軒丸瓦2型式のうちどちらかというと新しい印象を与える、大槻分類のWM03に伴うのは型式I・IVと、胎土、焼成に基づき区分する（大槻1985 p.15）。今回の分析では、この軒丸瓦と平瓦の相関関係を検証はできなかった。そもそも、3冊の報告書（大槻1983、1984、1985）には、どのトレンチからどの型式の軒丸瓦、軒平瓦が出土したかの記述がなく、ましてやどのトレンチからどの型式の平瓦、丸瓦が主体的に出土したかの記述も一切ない。

さて、型式IとIVは、褐色から灰褐色を呈するものが多く、比較的低温で焼成されたようである。これらは、一枚作りで製作され、低温での焼成は奈良時代の平窯で焼成されたことを示唆す



第3図 和久寺廃寺調査トレンチ配置図

る。また凹面の布目が消されていることも、この型式の特徴である。

型式Ⅰaは、青灰色を呈するものが多く、焼成も良いようで、さらに重要なことは、型式Ⅰと叩きは共通するのに、桶巻き作りであることである。型式Ⅰbは、製作技法が判明したものの一群とした。なお、凸面の拓本ではⅠ、Ⅰa、Ⅰbの区別はできないので、図はⅠで代表させた。

型式Ⅱは灰色を呈する、非常に焼成のよい瓦である。ただ、瓦の厚さにはヴァリエーションがあって、一部は厚さ3.5cmを超え、他の型式の平瓦に比べて分厚いものがある。この型式の平瓦はすべて桶巻き作りによるものである。ⅡaとⅡbも同様に桶巻き作りによるものである。

和久寺廃寺平瓦を特徴づける型式Ⅴは白色のものから青灰色のものまで、低温焼成のものから高温焼成のものまで多様である。これらは登り窯で焼かれたため、窯内のどこにおかれたかによって、温度も変わって現象が個々の瓦の焼成の違いに反映されたものと推測する。すべて桶巻き作りである。

型式Ⅷは塔の基壇裾のBR42のみで出土しているので、もしかしたら塔の一部の屋根に葺かれたものかもしれない。

型式ⅠとⅠaの区別は、2つないし3つの可能性を示唆する。ひとつは、和久寺廃寺では、桶巻き作りと一枚作りの両方の方法で同時に瓦の原型を製作し、登り窯と平窯の両方を同時に使いながら瓦を焼成した可能性である。この場合、同じ工房内で違った製作技術と違った構造の窯を

併用していたか、違った工房で同じ叩き工具を共有したか、2つの可能性を想定しうる。

さらにもう一つの可能性は、型式ⅠとⅠaの製作の時期差を想定したうえで、同じ叩き工具が同じ工房内で次世代の工人に継承された可能性である。しかしながら、もし、複弁蓮華文軒丸瓦(WM01)が桶巻き作りによる型式Ⅴに伴うという大槻の所見(1985 p.15)が妥当であれば、この型式の軒丸瓦は平城京遷都以降のスタイルであって、和久寺廃寺では8世紀でも桶巻き作り、登り窯焼成の平瓦が製作されていたことになり、型式ⅠとⅠaの製作の時期差を取って想定する必要はない。というわけで、この可能性は高くないと推測する。

3. 分析の目的と方法

今回の分析の目論見は、どの型式の平瓦が和久寺伽藍のどの建物で主に葺かれていたかを探ることであった。分析開始前は型式Ⅰが一枚作りで平窯焼成であるという、筆者の1970年代の表採資料に基づく前提があったので、型式Ⅰがどの建物に葺かれていたかを探りたかった。というのは、型式Ⅰは桶巻き作りで製作された他型式の平瓦よりも新しいとすると、伽藍内の建物の建造時期の違いにも迫れるかと想定したのである。

3回の発掘調査の結果出土した瓦は、コンテナ99箱(さらに土器だけのコンテナ2箱)に及ぶ。そのなかで、今回は平瓦のみを対象とした。完形あるいは完形に復元できた平瓦は数少ないので、すべての平瓦片の重量を測り、個々の型式の平瓦の出土トレンチ毎の重量比を算出し、どの建物にどの型式の平瓦が主として葺かれていたのか、探ろうとした。

個々の平瓦は、同一型式のなかでも厚さも異なるので、本来ならば個々の瓦片の面積を計測し、その面積比で議論すべきであることは認識している。ただ限られた予算の中で、不整形の破片の面積を計測する方法が思いつかず、重量比でそれに迫ろうとしたのである。

なお、大槻は丸瓦も、複弁蓮華文軒丸瓦(WM01)に伴う「やや堅質のもの」、山田寺系単弁蓮華文軒丸瓦(WM02)に伴う「赤みを帯びた軟質のもの」と、同じ型式の軒丸瓦に伴う「黒味がかかったやや軟質のもの」の3型式に分類している(大槻1985 p.18)。これもどの建物にどの型式の丸瓦が葺かれているかに迫れる重要な視点であるが、今回は時間と予算の制約により分析対象から外した。

4. 分析の結果

この節では、どの遺構にどのような型式の平瓦がどのくらいの率で出土したかをまず記述し、その後、遺構が検出されなかったトレンチでの平瓦出土の傾向を記述する。なお、1985年刊行の最終報告(大槻1985 図4)ではトレンチ名が記されていないため、1982・1983年の第1・2次発掘調査に補助員として参加され、最終報告に「和久寺周辺地域について」を寄稿なさった櫻井(旧姓友次)雅子氏よりご教示いただいた(第3図トレンチ配置図も櫻井雅子氏作成)。また3次にわたる発掘調査では33か所のトレンチが発掘されたが、瓦が出土しなかったトレンチには一切触れない。

付表1 塔跡出土の平瓦の重量(単位: g)

	BR42	BT42	BS42	BS43	BS47	合計
I	32,769	33,580	45,065	1,215	1,605	114,234
I a	33,185	13,845	31,750	465	2,300	81,545
I b	7,680	14,780	18,090	95	655	41,300
II	4,450	3,230	24,795	0	330	32,805
II a	1,495	1,195	6,470	0	0	9,160
II b	0	0	670	0	0	670
II - III	3,335	14,215	30,925	690	1,850	51,015
III	5,650	1,002	15,760	1,755	985	25,152
III a	0	65	1,570	0	10	1,645
IV	1,125	830	585	0	215	2,755
V	25,835	12,031	44,431	280	845	83,422
VI	8,860	8,010	27,165	2,210	1,385	47,630
VII	310	1,375	770	35	100	2,590
VIII	9,750	0	0	0	0	9,750
	134,444	104,158	248,046	6,745	10,280	503,673



■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5 ■ 6 ■ 7 ■ 8 ■ 9 ■ 10 ■ 11 ■ 12 ■ 13 ■ 14

第4図 塔跡の平瓦型式別重量比

1: I、2: I a、3: I b、4: II、5: II、6: II b、7: II - III、
8: III、9: III a、10: IV、11: V、12: VI、13: VII、14: VIII

付表2 金堂跡推定地出土の平瓦の重量(単位: g)

	BS34	BS36	BS38	合計
I	1,100	935	9,735	11,770
I a	930	660	9,538	11,128
I b	470	1,000	4,840	6,310
II	230	0	4,505	4,735
II a	0	45	755	800
II b	0	0	90	90
II - III	185	905	4,945	6,035
III	610	480	4,320	5,410
III a	0	0	80	80
IV	1,100	105	1,475	2,680
V	50	1,465	7,540	9,055
VI	625	445	3,985	5,055
VII	0	0	535	535
	5,300	6,040	52,343	63,683

1982年の第1次調査では塔の基壇の東端と東階段が南北方向のBT42, BR42トレンチで検出された。これらも含め、瓦は原位置の出土ではないが、想定される塔の基壇の範囲内のトレンチBS42, BS43, BS47で出土した平瓦もここにまとめる。個々の型式の平瓦の重量は次のとおりである(付表1、第4図)。なお、第3図中に記載のないBS43は、BS42を西に拡張した部分である。

全体としては、型式Iが23%、I aが16%、I bが8%、IIが7%、II aが2%、II bが10%、II - IIIが5%、IIIが1%、III aが1%未満、IVが1%、Vが17%、VIが9%、VIIが1%、叩き目が消されたものが2%を占める。原位置での出土ではないため解釈は難しいが、特定の型式の平瓦が卓越することはないようだ。

金堂跡と想定されるところに設定されたトレンチはBS34、BS36、BS38である。位置的にはBS32トレンチも金堂跡の範囲内の可能性も否定できないが、このトレンチでは瓦は出土しなかった。個々の型式の平瓦の重量は次のとおりである。

全体としては、型式Iが18%、I aが17%、I bが10%、IIが7%、II aが1%、II bが7%、II - IIIが8%、IIIが4%、III aが1%未満、IVが4%、Vが14%、VIが8%、VIIが1%を占め、全体的な傾向として、塔跡出土の平瓦の型式別組成比と近似する。

塔跡と金堂跡の中間に設定された

トレンチBS40では型式Ⅰaの平瓦のみ3,110g出土した。また塔跡の南約13mに設定されたトレンチBN44では合計2,945gの平瓦が出土し、その内訳は620g (21%) の型式Ⅰa、635g (22%) のⅠb、70g (2%) のⅡa、300g (10%) のⅡ-Ⅲ、620g (21%) のⅢ、175g (6%) のⅣ、285g (10%) のⅤ、240g (8%) のⅥが出土した。型式Ⅰ、Ⅱ、Ⅱb、Ⅲa、Ⅶは出土しなかった。全体の出土量が少ないので、傾向を評価するのは難しい。

次に僧房跡と想定される掘立柱建物とその付近から出土した平瓦の組成比を調べる。

全体としては、型式Ⅰが14%、Ⅰaが6%、Ⅰbが3%、Ⅱが9%、Ⅱaが6%、Ⅱbが1%未満、Ⅱ-Ⅲが15%、Ⅲが12%、Ⅲaが1%、Ⅴが12%、Ⅵが23%を占め、Ⅳ、Ⅶは出土しなかった。全体の出土量が30kgと、遺構が不明瞭な想定金堂跡の半分である。というのは、僧房跡の大半は鹿島神社の地下にあり、東端のみしか発掘調査ができなかったためである。つまり、塔跡・金堂跡のように東西に長いトレンチは設定できなかったのである。この少ない出土量に基づいて塔跡・金堂跡出土の平瓦組成比と比べるのは無謀かもしれないが、型式Ⅵが型式ⅠとⅠaの合計よりも多数を占めることが特徴である。なお、第3図に記載のないBW45は、BV42を西側に東西方向に拡張した部分の可能性が高い(櫻井雅子氏のご教示による)。

伽藍の北端を画す築地はトレンチCI47、CI49トレンチで検出されているの



■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5 ■ 6 ■ 7 ■ 8 ■ 9 ■ 10 ■ 11 ■ 12 ■ 13

第5図 金堂跡の平瓦型式別重量比

1 : Ⅰ、2 : Ⅰa、3 : Ⅰb、4 : Ⅱ、5 : Ⅱb、6 : Ⅱb、
7 : Ⅱ-Ⅲ 8 : Ⅲ、9 : Ⅲa、10 : Ⅳ、11 : Ⅴ、12 : Ⅵ、13 : Ⅶ

付表3 僧房跡推定地出土の平瓦の重量(単位: g)

	BV44	BW45	BV42	合計
Ⅰ	2,115	575	1,395	4,085
Ⅰa	585	470	805	1,860
Ⅰb	545	50	190	785
Ⅱ	745	865	955	2,565
Ⅱa	415	295	1,060	1,770
Ⅱb	70	0	0	70
Ⅱ-Ⅲ	2,090	425	1,815	4,330
Ⅲ	2,360	255	920	3,535
Ⅲa	0	0	335	335
Ⅳ	0	0	0	0
Ⅴ	1,460	1,150	990	3,600
Ⅵ	2,860	800	3,170	6,830
Ⅶ	0	0	0	0
	13,245	4,885	11,635	29,765



■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5 ■ 6 ■ 7 ■ 8 ■ 9 ■ 10 ■ 11 ■ 12 ■ 13

第6図 僧房跡の平瓦型式別重量比

1 : Ⅰ、2 : Ⅰa、3 : Ⅰb、4 : Ⅱ、5 : Ⅱb、6 : Ⅱb、
7 : Ⅱ-Ⅲ 8 : Ⅲ、9 : Ⅲa、10 : Ⅳ、11 : Ⅴ、12 : Ⅵ、13 : Ⅶ

付表 4 築地跡出土の平瓦の重量(単位 g)

	CI47	CI49	合計
I	2,850	4,725	7,575
I a	5,235	2,425	5,237
I b	3,180	2,950	6,130
II	895	1,035	1,930
II a	170	220	390
II b	440	0	440
II - III	4,965	3,645	8,610
III	1,345	1,500	2,845
III a	0	100	100
IV	95	85	180
V	9,050	2,890	11,940
VI	1,960	3,895	5,855
VII	0	665	665
	30,185	21,712	51,897

付表 5 そのほかのトレンチ出土の平瓦の重量(単位 g)

	CG52	CH42	CI37	CM38	合計
I	825	950	0	0	1,775
I a	390	3,400	0	375	4,165
I b	45	170	0	0	215
II	520	0	0	0	520
II a	0	720	230	0	950
II b	0	0	0	0	0
II - III	1,405	900	295	190	2,790
III	450	2,130	0	0	2,580
III a	0	0	0	0	0
IV	0	265	0	0	265
V	0	2,710	1,085	220	4,015
VI	170	2,505	0	0	2,675
VII	0	0	0	0	0
	3,805	13,750	1,610	785	19,950

で、この二つのトレンチ出土の平瓦をまとめて組成比を出す。また、トレンチCI49では築地のすぐ南で「工房跡」と推定される遺構が検出されている。方形の簡単な掘立柱建物のなかに長径1.5m、短径0.7mの土壇があって、土壇内には炭、灰、焼土が多く含まれ、轆の羽口も出土した(大槻1985 p.12及び第7図)。

両方のトレンチの組成比は概ね近似するので、トレンチCI49内、築地のすぐ南に位置する工房の存在が平瓦の型式別組成に特に違いをもたらしていないようである。ただ、注目すべきはトレンチCI47での型式Vの9.05kg (30%)である(トレンチCI49では型式Vは13%であり、他の場所とあまり変わらない)。

このトレンチCI47よりさらに東にCH42、CM38、CI37と、さらに西にCG52と、寺院建造物の遺構を伴わないが瓦が出土したトレンチが4か所あり、これらをまとめてデータを提示する。CG52は1984年に発掘されたトレンチで、遺構図も報告書に掲載されている(大槻1985、第8図)。本文には、検出された井戸や石列は和久寺衰退以降のものと記してあるが、同じ報告書の第4図、和久寺廃寺遺跡の3年分のトレンチ配置図には、伽藍西端を画す太い実線がCG52のところに描かれていることを付記しておく。

この表からも、伽藍北辺のCH42では20%、瓦の量が少ないCI37では67%、CM38では28%、この3トレンチ全体のなかでは25%と型式Vが目立つことがわかる。トレンチCI47での型式Vの大量出土と考え合わせると、北面築地では型式Vの瓦が多用されていたのかもしれない。

5. 結論

今回の再整理の結果、特定の型式の平瓦が特定の箇所に集中するということはなく、塔跡と推定金堂跡ではほぼすべての型式がまんべんなく出土していた。そのなかで、型式IVと型式VIIは少数派に属し、一枚作りの型式Iと、同じ叩き目を有して桶巻き作りの型式Iaは数量的にあまり変わらないこともわかった。型式I・Ia、カテゴリーIbを合わせると、和久寺の塔と金堂で

は菱形が凸面に浮き出る叩き目を有する瓦の出土量が全体の40%を超える。

僧房跡では瓦の出土量が多くないため、どの程度普遍化できるか少々心もとないが、ここでは型式Ⅰ、Ⅰaを合わせたよりも型式Ⅵの出土量の方が多かったことは事実である。また伽藍北辺では型式Ⅴの出土量が多いことも特筆すべきである。

塔跡、想定金堂跡から出土した平瓦の組成に基づいて解釈できることは、様々な型式の平瓦が同時に使われたようだという事である。つまり、平窯で焼成された一枚作りの型式Ⅰも、桶巻き作りで登り窯で焼成された他型式の平瓦も、すべて一度に使われた可能性が高い。やはりこれは、寺院建築は一大事業であって、瓦製作も多数の工房に同時に発注しなければならなかったであろう。焼成方法まで異なる現実、相当幅広く、数多くの工房に依存しなければならなかったことの反映と思われる。平瓦の凸面の叩き目は屋根に葺かれたときには目に触れないので、叩き目を統一することはなく、どのような叩き工具を使用するかは各瓦工房に一任したと思われる。

ただ工人組織を考えると、型式Ⅰと型式Ⅰaが同じ叩き工具が使われているのに、一枚作りと桶巻き作りが併用されており、また前者は平窯、後者は登り窯での焼成の可能性もあることは、解釈が非常に難しい。同じ工房内で違った製作技術と違った構造の窯を併用していたか、違った工房で同じ叩き工具を共有したか、他の寺院跡の事例などをしらべるなどして、今後の課題としたい。

最後に和久寺の創建年代は、現在のところ8世紀第2四半期かそれ以降と考えたい。複弁蓮華文軒丸瓦のスタイルに基づき、少なくとも平城京遷都以後である。一枚作りの平瓦に比べて桶巻き作りの平瓦が75%以上を占めるが、これは一枚作りが新たに導入されても、桶巻き作りは地方では奈良時代を通して採用され続けたからである。

謝辞

本稿作成には、櫻井雅子氏の絶大なご助力を賜った。第3図は櫻井氏作成、第2図は櫻井氏の拓本をレイアウトしたものである。資料実見に際しては、福知山市教育委員会生涯学習課元係長八瀬正雄氏、現係長松本学博氏、主査鷲田紀子氏のご高配をえた。第3図は明治大学大学院博士後期課程大熊久貴氏のお手を煩わせた。厚く御礼申し上げます。

(ささき・けんいち＝明治大学文学部教授)

引用文献

- 大槻眞純(編)1983『和久寺跡第1次発掘調査概報』(福知山市文化財調査報告書第5集) 福知山市教育委員会
 大槻眞純1984『和久寺跡第2次発掘調査概報』(福知山市文化財調査報告書第6集) 福知山市教育委員会
 大槻眞純1985『和久寺跡』(福知山市文化財調査報告書第8集) 福知山市教育委員会
 崎山正人1989『下山古墳群発掘調査概報』(福知山市文化財調査報告書第14集) 福知山市教育委員会
 崎山正人1993『下山古墳群Ⅱ』(福知山市文化財調査報告書第22集) 福知山市教育委員会
 崎山正人1994『下山古墳群Ⅲ』(福知山市文化財調査報告書第25集) 福知山市教育委員会

櫻井雅子1985「和久寺周辺地域について」大槻眞純(編)『和久寺跡』pp. 25-30. 福知山市教育委員会

佐々木憲一1982『和久寺』私家版

福知山市史編さん委員会(編)1976『福知山市史』第1巻 福知山市役所

日本海沿岸地域の琴形木製品の共通性

－正垣遺跡出土琴形木製品の突起を手がかりに－

長谷川 愛

1. はじめに

現在雅楽などで使用されている伝統楽器の琴は、元来は飛鳥時代に大陸よりもたらされた絃楽器がルーツとなっている。しかし、それより以前の弥生時代から「琴形木製品」と呼ばれる特殊な形状を持った木製品が出土している。現在では日本全国で約210点の出土が確認され、中には地域や年代ごとに形態的特徴を持つ事例もある。京都府内からも、琴形木製品の出土が複数事例確認されている。

筆者は、京都府内から出土した中でも正垣遺跡の琴形木製品の特徴的な形態に着目し、他地域との関連性や技術の変化などについての検討を試みる。

2. 琴形木製品の出土例

弥生時代から古墳時代にかけて登場した琴形木製品は、出土した場所や時代によって形状が多様である。本稿では、一枚板で作られて共鳴槽をもたない「板作りの琴」、複数の板から組み立てられた共鳴槽を持つ「槽作りの琴」、古代中国で使用された楽器「筑」と形状が類似している「筑形木製品」の三種類に大別する。

琴形木製品が出土した時代は最も古いもので弥生時代中期にあたり、奈良時代まで続くが、その途中で形状や法量が大きく変わっていった。弥生時代中期から後期にかけては長さが50cmほどの小型のものが多く、デザインも地域性を感じられるものだった。特に弥生時代後期では、本稿で述べる北陸地方の琴形木製品のように地域特有のデザインを取り入れた琴形木製品が日本各地でみられるようになる。静岡県静岡市の登呂遺跡からは弥生時代後期の琴形木製品が出土し、その形状は琴尾から集絃孔付近にかけて徐々に幅が狭くなり、一度段を作ったあと、琴頭部分にかけて鶏尾状に大きく開いたものである。これと類似した形状を持つ板作りの琴が同じ静岡市の小黒遺跡からも出土しているが、それ以外の遺跡では確認できないため、この形状は静岡市のあたりでのみで用いられてきたものだとされている(笠原2004)。

弥生時代後期から古墳時代中期にかけては、長さが100cmを超える大型の琴形木製品も現れるようになる。中には、島根県松江市石田遺跡から出土した長さ191.8cmの琴形木製品のように、一人では持ち運べないほどの大きさを持つものまでも作られた。また、筑形木製品が出土するようになったのもこの頃からである。棒状で、裏面に三角形や半円形を呈した稜を持つ筑形木製品は、東海地方を中心に近畿地方や関東地方でも出土している。古墳時代に出土した筑形木製品は、琴頭の端部が斜めに切り落とされた形状である。弥生時代後期の筑形木製品ではこの特徴がみら

れなかったため、古墳時代に入ってから形状に関して強い規制があったと笠原氏は推測している。
(同2004)

古墳時代中期から後期にかけては、琴形木製品の出土事例が減少し、それに取って代わるように弾琴埴輪などの土製品の出土数が増えていった。弾琴埴輪は関東地方を中心に確認され、そのほとんどが槽作りの琴をかたどったものであった。琴形木製品においては地域性や形状に関する強い規範からくる共通性はみられなかった。

3. 遺跡の概要

正垣遺跡は、京都府京丹後市大宮町奥大野に所在し、竹野川の支流常吉川の左岸にある台地の上に立地する。周辺には裏陰遺跡や上常吉遺跡といった集落遺跡のほか、丘陵部には新戸古墳をはじめとした古墳群が存在する。周辺の弥生時代後期の遺跡は、自然堤防上に立地する谷内遺跡のほかは、対岸の裏陰遺跡などのように丘陵裾の扇状地に立地するものが多く、正垣遺跡もそのような集落遺跡の一つである。

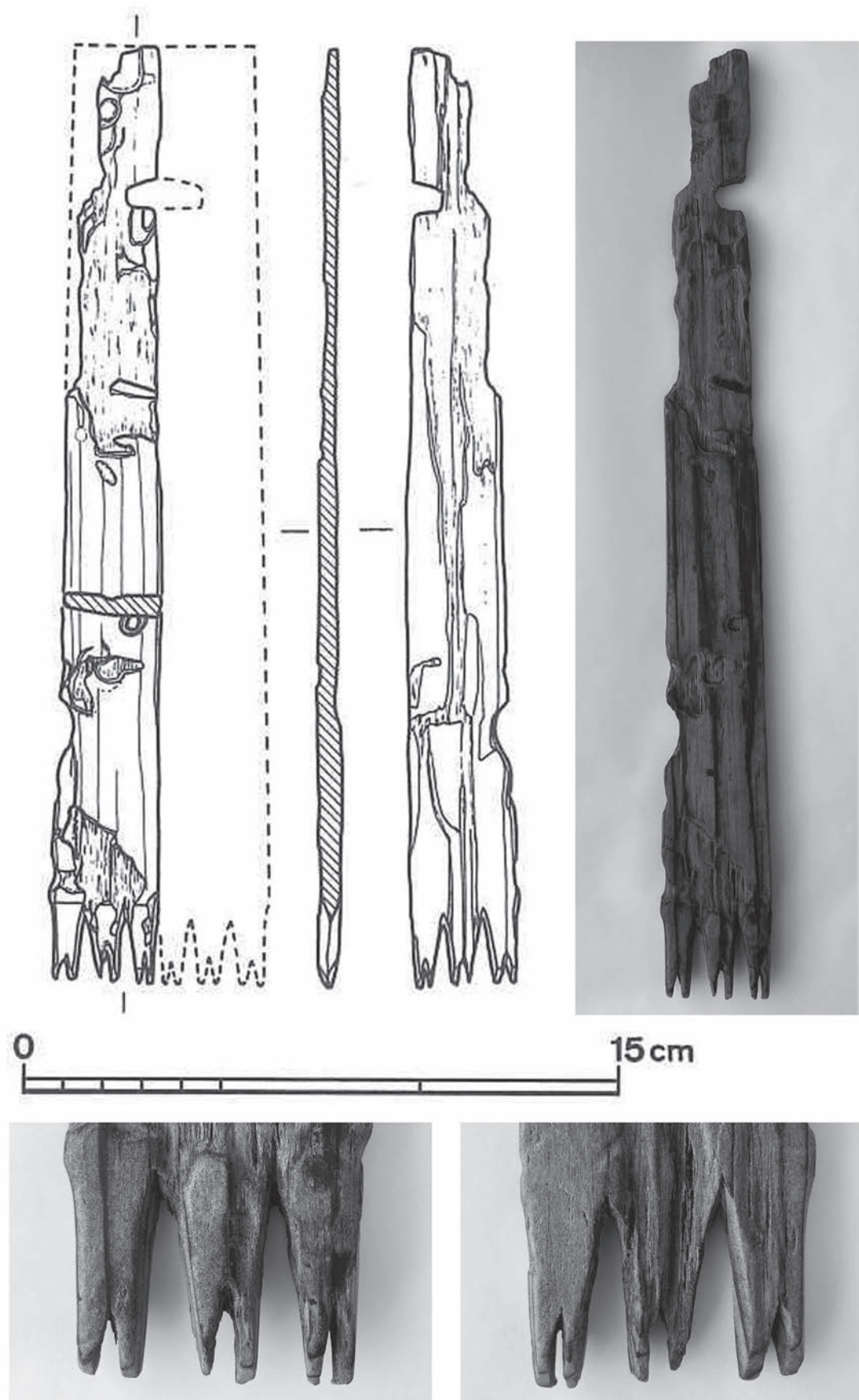
発掘調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターによって昭和60年10月～昭和61年7月にかけて行われ、竪穴建物や円墳、掘立柱建物跡といった、縄文時代早期～鎌倉時代前半にかけての遺構が検出された。中心となる時期は奈良時代～鎌倉時代初頭であり、総柱の倉庫と掘立柱建物が確認されている。周辺からは多量の供膳用土器、転用硯、石帯などが出土している。

琴形木製品は遺跡西南端にある弥生時代後期の流路跡(溝状遺構)から、舟形木製品、木製匙、ガラス製小玉などとともに、擬凹線文土器を主体とした土器群に混じって出土した。時期は概ね後期後葉に位置づけられる(竹原一彦1986、1987)。

4. 正垣遺跡の琴形木製品の突起と特徴

弥生時代後期の河川跡から出土した琴形木製品は、長さ46.4cm、幅5.6cm、厚さ1.0cmを測り、スギ製である(第1図)。琴尾には突起が3本ついている。木目に沿って縦に半分に割れた状態で、全体的に腐食が激しく欠損が多いが、元来は幅11cmほどで突起も5～6本あったとみられる。柄孔や木釘痕といった側板を取り付けた痕跡がないことから、共鳴槽を持たない「板作りの琴」であったと考えられる。

突起はまず先端に向けて鋭い二等辺三角形に成形した後、その先端に「V」字状の切り込みを入れて二股にした形状になっている。二股の間の切れ込みに絃をかけて強く張っていたためか、わずかに糸の痕跡が残っている。本稿ではこの先端が二股に分かれた二等辺三角形の形状を、ツバメの尾の形状に似ていることから「燕尾形」と呼ぶことにする。この形状の突起を持つ琴形木製品は近畿地方では正垣遺跡の1点のみである一方で、北陸地方では弥生時代後期～古墳時代にかけて複数点出土している。



第1図 正垣遺跡出土木製品(S=1/3)
実測図は報告書から転載、写真は筆者撮影



第2図 燕尾形突起がついた琴形木製品の出土地点

5. 北陸地方の琴形木製品

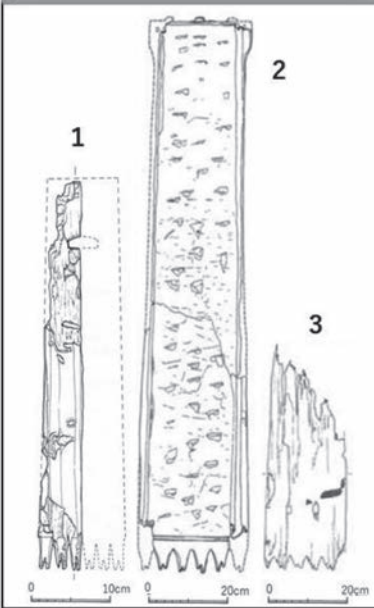
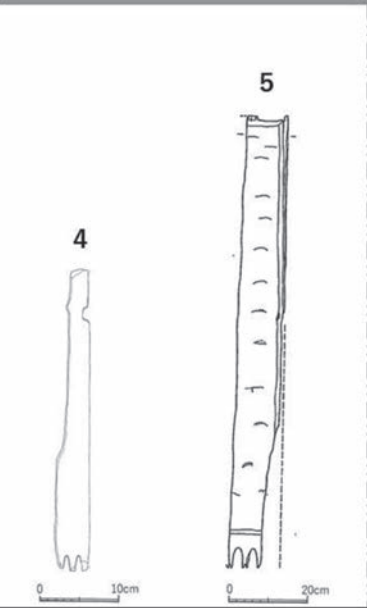
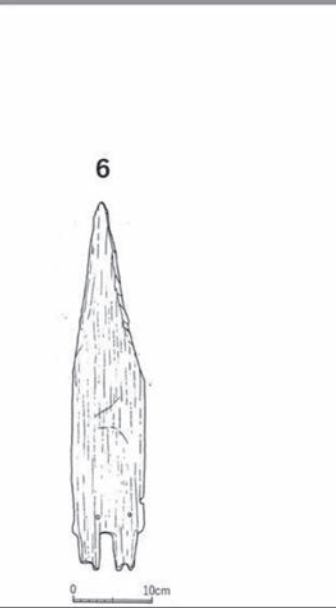
北陸地方からは石川県を中心に約20点の琴形木製品が出土している。時代は弥生中期から平安時代まで幅広く、大きさや形状も多様である。中でも弥生時代後期～古墳時代前期にかけての製品が多くを占めており、琴尾に燕尾形の突起を持っている事例は概ねこの時代のものである(第2図)。

石川県金沢市の西念・南新保遺跡からは、弥生時代後期末の琴形木製品が3点確認されているが、その内の1つに燕尾形の突起が見られる(金沢市教育委員会1992)。長さ139.4cm、幅28cmの大型の槽作りの琴(共鳴槽を持つタイプの琴形木製品)には、琴尾に長さ6cmの突起が4本残存している。両端の突起が欠損していることから、本来は6絃の琴であったと考えられる。また、同じ金沢市にある薬師堂遺跡からも、燕尾形の突起を持つ琴形木製品が1点出土している。

新潟県刈羽村の西谷遺跡には、長さ120.6cmの大型の槽作りの琴が1点出土している(田海1988)。縦に半分に割れているが、本来は西念・南新保遺跡のものと類似した形状の琴頭を持ち、推定幅19.6cmだったとされている。その琴尾には面取りされた燕尾形の突起が3本残存しているが、端部の欠損箇所や推定幅から、本来は7絃の琴だったとみられる。

本稿では説明を省略するが、福井県福井市の小稲津遺跡(福井県2002)や富山県高岡市の蔵野町東遺跡(富山県文化振興財団2013)からも燕尾形突起を持つ琴形木製品がそれぞれ1点出土している。これらの類例を見るに、正垣遺跡と北陸地方の遺跡の間で交流があったことは推測できる。

この燕尾形突起は東北地方や山陰地方などの周辺地域では確認されていないため、北陸地方独特の形状とされているが、ルーツは不明である。

 鋭利な二等辺三角形		 根元がU字状		 台形			
							
番号	所在地	遺跡名	時代	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	突起数 (本)
1	京都府京丹後市	正垣遺跡	弥生時代後期	46.4	(5.6)	1	残存3、推定6
2	石川県金沢市	西念・南新保遺跡	弥生時代後期末	139.4	28	1.9	残存4、推定6
3	石川県金沢市	薬師堂遺跡	弥生時代後期～終末	40.2	20.7	1.5	残存4
4	富山県高岡市	蔵野町東遺跡	弥生時代後期～古墳時代初頭	44.6	(5.1)	1	残存3
5	新潟県刈羽村	西谷遺跡	弥生時代後期～古墳時代前期	120.6	(19.6)	1.5	残存3
6	福井県福井市	小稲津	古墳時代	46.5	9.3	2.2	残存2

()は、残存値

第3図 燕尾形突起を持つ琴形木製品の出土例

6. 突起に見られる差異

正垣遺跡出土のものを含め、燕尾形の突起を持つ琴形木製品を比較したところ、突起の形状にわずかではあるが差異が見られた(第3図)。

正垣遺跡の琴形木製品は設計線のような細い線が真横に通り、それを基準に突起が成形されている。突起は長さ約3.3cmの鋭利な三角形の先端に深さ1cmほどの切り込みを入れた形状で、全ての角を面取られ、表裏両面は丁寧に整えられている。これと似た特徴は西念・南新保遺跡出土の琴形木製品にも見られ、長さ6cmほどの三角形に、1.5cmほどの深い切り込みを入れて形作っている。

一方で、西谷遺跡から出土した琴形木製品の場合、突起やその根元を、弧状に削り出され、突起の間が「U」字状になっている。突起はそれぞれ丁寧に面取りされた状態である。突起の二股は1cmにも満たないほどのごく浅いもので、正垣遺跡のように深い切り込みが見られるものはな

かった。蔵野町東遺跡の琴形も西谷遺跡よりは幅が狭いものの、根元が「U」字状になっている。

小稲津遺跡出土の琴形木製品は、他の遺跡同様に先端にかけて突起の幅が狭くなっていくが、正垣遺跡のように三角形ではなく、台形のような形状である。二股は西谷遺跡の琴形木製品のように浅めの彫りで形作られている。二股の間に糸を強く張った痕跡が見られる一方で、側面に巻き付けた痕跡は観察できなかったことから、二股の間に絃をかけて張っていたと考えられる。琴形は両端を含む大部分が欠損し、突起は2本しか残存していないが、本来は大型の槽作りの琴で突起も多かったとみられている。突起の間には2cmほどの隙間があることから、元々は約2cmの間隔で複数の突起が作られたのだろう。

このような差異が日本海沿岸地域の地域間交流と何かしらの関連性があるのだろうか。周辺遺跡から出土した琴形木製品も含めて今後の検討としておきたい。

7. おわりに ー丹後半島と北陸地方の地域間交流ー

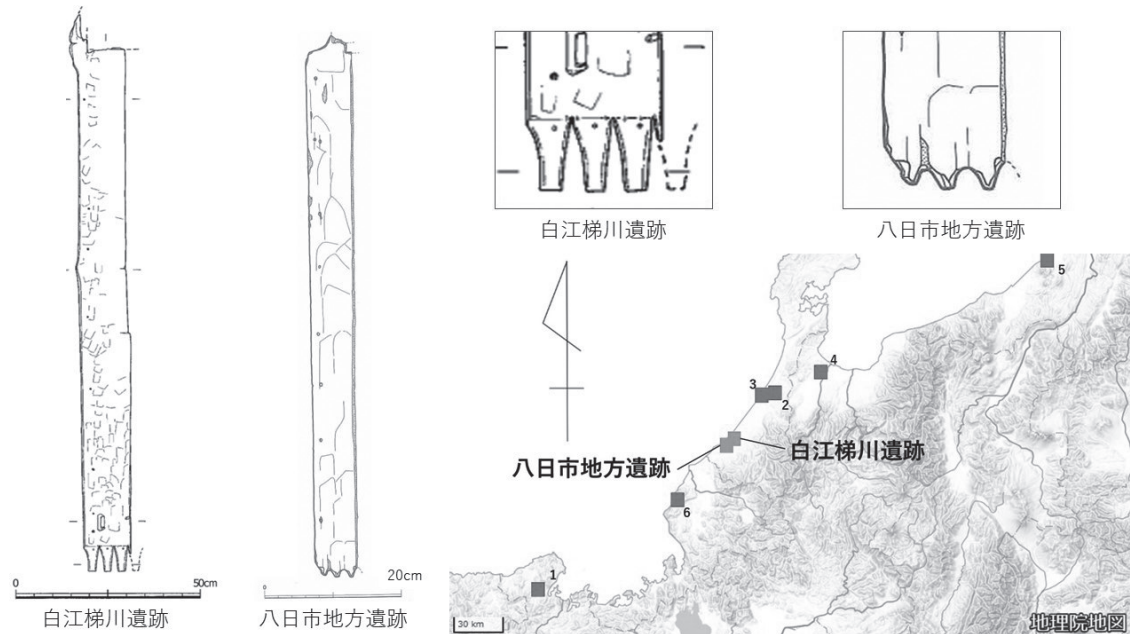
丹後半島と北陸地方との木製品を通じた地域間交流については既に先行研究が進んでいる。高野陽子氏と福山博章氏は、正垣遺跡を含む丹後半島の遺跡から出土した桶形容器から検討を試みている(高野・福山2017)。

まずは、正垣遺跡から出土した琴形木製品の特徴からも、丹後半島と北陸地方の地域間の深い交流を考察できることを今後の研究で確かめていけたらと考える。その際は突起だけではなく、集絃孔(突起にかけられた絃をまとめる孔)や琴頭の形状、使用木材、出土状況などといった多角的な観点からの考察が必要となってくるため、資料のさらなる観察と整理を行いながら検討していきたい。

また、集成した資料を比較したところ、同じ燕尾形の突起でも、正垣遺跡のように根元付近に基準線が彫られたものや、西谷遺跡のように根元が「U」字状に加工されたもの、さらには小稲津遺跡のように台形を呈しているものと、形状に差異が見られることがわかった。

さらに、本稿で取り上げた遺跡の周辺からは、燕尾形ではないものの、似た特徴の突起を持つ琴形木製品が確認されている。石川県小松市の八日市地方遺跡からは、弥生時代中期の琴形木製品が1点出土している(石川県小松市教育委員会2003)。突起の先端は切揃えられ、切込みは入っていないが、根元が西谷遺跡の琴形木製品のように「U」字状に成形されている。同じ小松市の白江梯川遺跡では弥生時代後期の琴形木製品が3点出土している(久田正弘ほか2008)。そのうちの1点に長さ154.6cmの槽作りの琴^(注2)があり、琴尾には3本の突起が残存している。こちらも先端が切り揃えられて切込みは入っていないが、先端から根元にかけて弧を描くように成形されている。「U」字状の成形のみを見てみれば、小松市から刈羽村までの地域間では弥生時代中期から後期にかけて技術的な交流があったことが推測できる。

北陸地方以外の遺跡からの燕尾形の突起を持った琴形木製品の出土は、正垣遺跡を除いて確認できなかった。しかし、先述のU字状の成形^(注3)については福岡県春日市の辻田遺跡から1点見つかった。辻田遺跡の琴形木製品は弥生時代後期あたりのものとされ、北陸地方と同時期である。



第4図 白江梯川遺跡と八日市地方遺跡出土の琴形木製品

本稿では北陸地方との関連性のみを述べてきたが、日本海沿岸地域全体における技術的な交流の可能性についても合わせて検討していく必要があると感じた。これから関連資料を精読しながら検証を試み、日本海沿岸地域全体における琴形木製品の形状変化と地域間交流の様相について明らかにしていきたい。
(はせがわ・まなみ＝当調査研究センター調査課調査員)

注1) 青森県八戸市の是川中居遺跡から出土した縄文時代晩期の篋形木製品や、三重県津市の納所遺跡から出土した弥生時代前期の用途不明品でも弦をはじいて演奏していたという説があるが、他の用途に使われた可能性も挙げられているため、執筆時点では対象から外した。

また、大阪府東大阪市の瓜生堂遺跡からは、弥生時代前期の層から4本の突起がついた木製品が出土し、笠原潔氏は琴の可能性が高いと言及しているが、これも確実とはいえない部分もあるため対象に含めていない。琴形木製品の特徴を残し、確実に琴形木製品と呼べる遺物が現れるようになったのは、弥生時代中期になってからである。

注2) 白江梯川遺跡から出土した琴形木製品だが、その突起の根元には正垣遺跡から出土した琴形木製品のように一本の細い基準線が刻まれていて、突起をつける際の設計線と推測されている。この設計線においては技術的な交流を表すものととらえることは難しいが、琴形木製品の制作方法の差異や共通点を検討する際のヒントにはなるだろう。

注3) 高知県高知市の北ノ丸遺跡からもU字状に成形された突起を持つ琴形木製品が出土しているが、時期が古墳時代後期で北陸地方よりもかなり遅く、場所も太平洋沿岸地域と離れているため、今回は検討の対象から外すことにした。

参考文献

- 荒山千恵2014『音の考古学－楽器の源流を探る』北海道大学出版会
石川県小松市教育委員会2003『八日市地方遺跡Ⅰ』（2分冊遺物報告編）

笠原 潔2004『埋もれた楽器－音楽考古学の現場から』春秋社

金沢市教育委員会1992『金沢市西念・南新保遺跡Ⅲ』

金沢市埋蔵文化財センター2011『石川県金沢市薬師堂遺跡』（金沢市文化財紀要264）

田海義正1988「刈羽村西谷遺跡出土の木製琴」『新潟考古学談話会会報』第1号 新潟考古学談話会

高野陽子・福山博章2017「日本海沿岸地域における弥生時代木製品にみる地域間交流－桶形容器を中心に－」

『京都府埋蔵文化財情報』第131号

竹原一彦1986「昭和60年度発掘調査略報25. 正垣遺跡」『京都府埋蔵文化財情報』第20号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

竹原一彦1987「府営ほ場整備関係遺跡（1）正垣遺跡」『京都府遺跡調査概報』第22冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

竹原一彦1987「京都府正垣遺跡出土の弥生時代木製琴」『考古学雑誌』72-4 日本考古学学会

（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2013『下黒田遺跡・下佐野遺跡・諏訪遺跡・蔵野町東遺跡・蔵野町遺跡・駒方南遺跡発掘調査報告』（富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告54）

久田正弘・中川律子・本田秀生・佐々木由香2008「白江梯川遺跡の琴とかごについて－資料提示と問題定義－」『石川県埋蔵文化財情報』第19号

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2002『福井県埋蔵文化財調査報告59：小稲津遺跡』

浅後谷南遺跡出土の木製把・武器形木製品

新美祥人夢

1. はじめに

近年、一般国道312号大宮峰山道路事業に伴う発掘調査が、(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センターにより丹後地域で行われており、集落遺跡に限らず、台状墓・古墳などの調査成果が蓄積されつつある。その現状に鑑み、筆者は丹後地域での出土遺物を中心にその観察と集成作業を行っている。本稿では、それらの作業において、再検討が必要と判断した浅後谷南遺跡出土の落とし込み式把について検討を加える。

2. 遺跡の概要

浅後谷南遺跡は京都府京丹後市網野町公庄に所在する。古墳時代前期の槽付木樋(導水施設)の存在で著名な遺跡である。また、弥生時代後期から古墳時代にわたって継続的に木器製作を行っていた可能性がある遺跡でもある(黒坪1998、石崎ほか2000)。

本遺跡は大きく以下の時期に亘って営まれる^(注1)(第1図)。

①第1段階：弥生時代中期

全体的に遺構は希薄であり、弥生時代中期の土器を含む溝(SD2018)が1条確認されるのみである。

②第2段階：弥生時代後期後葉～末

本段階は弥生時代中期の溝が完全に埋没したのちに形成された弥生時代後期からの溝(SD01)が確認された出土遺物は、板材や杭などである。

③第3段階：古墳時代初頭(浅後谷南2～3式、庄内式新相～布留式最古相)

溝(SD2017・SD2016(古)・SD2016(新))、土坑(SK2003)、土器溜まりN、竪穴建物(SH19)などが確認できる。前段階と比較すると遺構数は増加する。

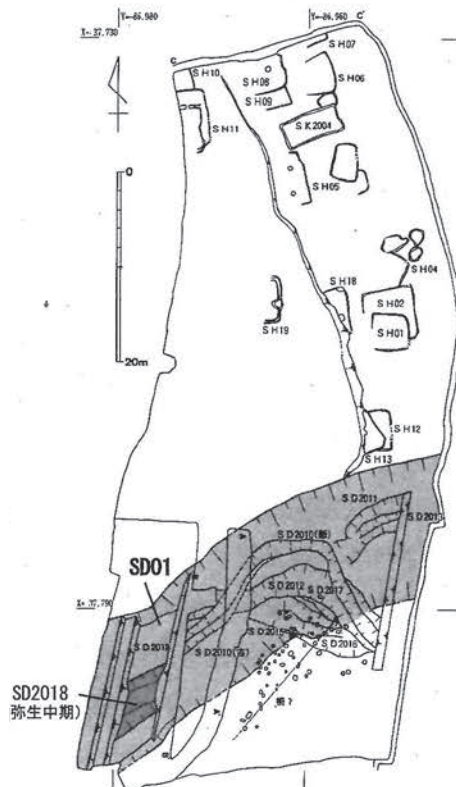
土坑と土器溜まりでは、廃絶時に土器を大量に投棄する土器祭祀が認められる。また、上記の溝ではいずれも溝に対して直交する板を設置することによって水流を制御した堰が設けられている。次段階の槽付木樋を用いるような導水祭祀に先行する祭祀遺構として注目される。

④第4段階：古墳時代前期中葉(布留式前期中相、布留2式古相)

槽付木樋が検出された溝(SD05・SD2012)の存続時期である。また、土坑(SK2004)などの遺構が確認できる。溝から出土した木製品としては、楕形木製品や武器形木製品などが挙げられる。

⑤第5段階：古墳時代中期中葉～後葉(TK208～TK23型式並行期)

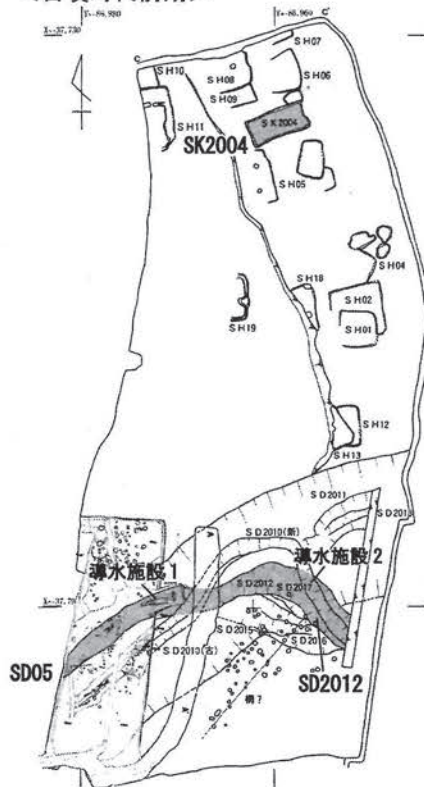
第2段階
＜弥生時代後期末＞



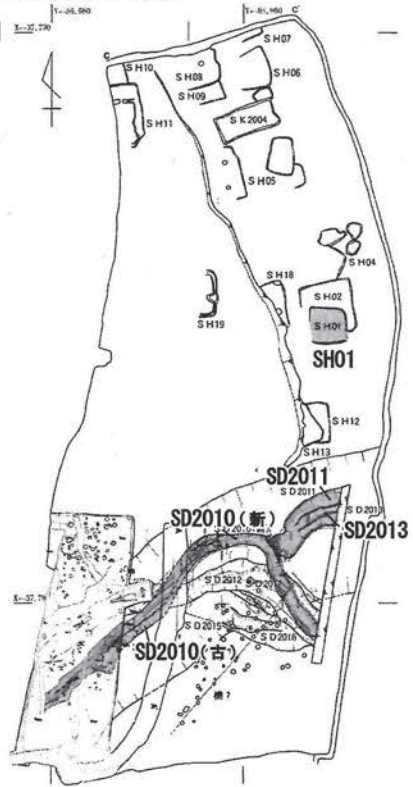
第3段階
＜古墳時代初頭＞



第4段階
＜古墳時代前期＞



第5段階
＜古墳時代中期＞



第1図 浅後谷南遺跡A地区各段階別主要遺構(出典：高野2014)

検出した遺構の多くは溝(S D2010(古)・S D2010(新)・S D2011, S D2013)で、ほかには滑石製刀子が出土した竪穴建物(S H01)などがある。S D2010で確認された施設には、前段階の様な槽付木樋はみられないが、2基の堰を設けることによって浄水を行う構造の施設が確認されており、水辺の祭祀は継続して行われていたようである。また、包含層内の出土遺物ではあるが、大型舟形槽などが含まれることから、槽を組み合わせた施設を設置していた可能性もある。流路の最終埋土内からは、農工具、容器、建築部材のほか、武器形木製品、舟形木製品などの祭祀的性格を有する遺物が出土しており、溝の埋没段階に何かしらの祭祀を行った可能性が示唆される。

以上、簡単にではあるが本遺跡を段階ごとに概観した。以下で報告する木製把と武器形木製品はともに第5段階にあたる古墳時代中期中葉～後葉の堆積層からの出土である。

3. 木製把の観察所見と考察

古墳時代中期～後期に帰属する流路の出土品の中に木製把の未成品が存在する。報告書では案の脚である可能性が指摘されているが、木製把であることを認識した上で、熟覧ののち実測を行った。

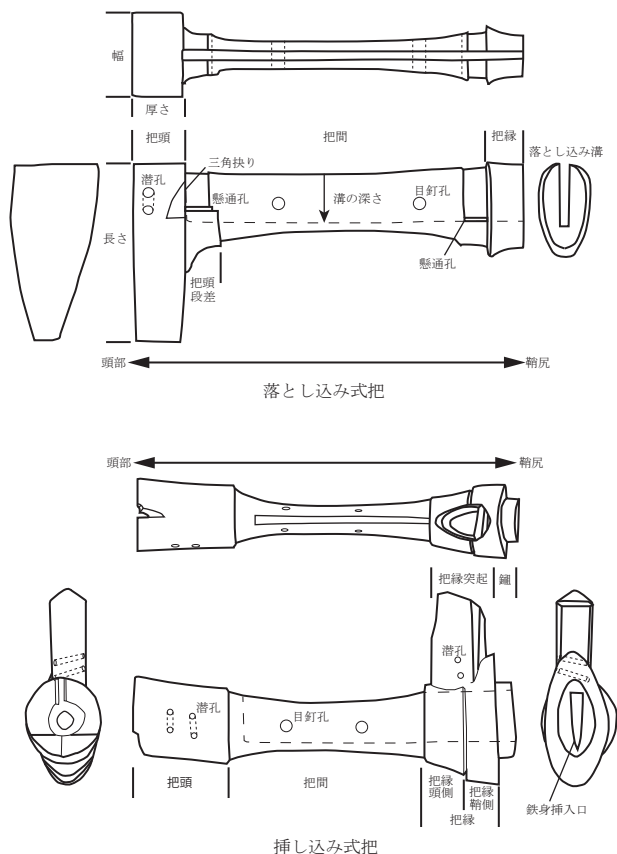
本節では、筆者が木製把を観察した所見と今までの資料の観察から得られた情報に基づき製作工程について言及する。なお、本稿での部分名称は第2図に準ずる。

1) 形態的特徴

まず、木製刀剣把の基本構造を確認する。落とし込み式把は一木で作られ、茎を把背面の溝に落とし込んで目釘孔で固定し、有機質製の固定具を把間に巻き付けて鉄身と固定する落とし込み技法が多く用いられる。一方、挿し込み式把は鉄身の茎と刃部の一部を把に挿し込み、目釘孔で鉄身と把を固定したのち、有機質製の固定具を把間に巻き付ける。挿し込み式は一木作りと別作りのものがあり、別作りのものには、鹿角装具と組み合わせるのものなどバリエーションに富む。

以上、大きく2つの方法で鉄身と把を結合する形態が知られている。

木製把の観察所見 浅後谷南遺跡から出土した木製把は頭部上面形態が楔形を呈することから



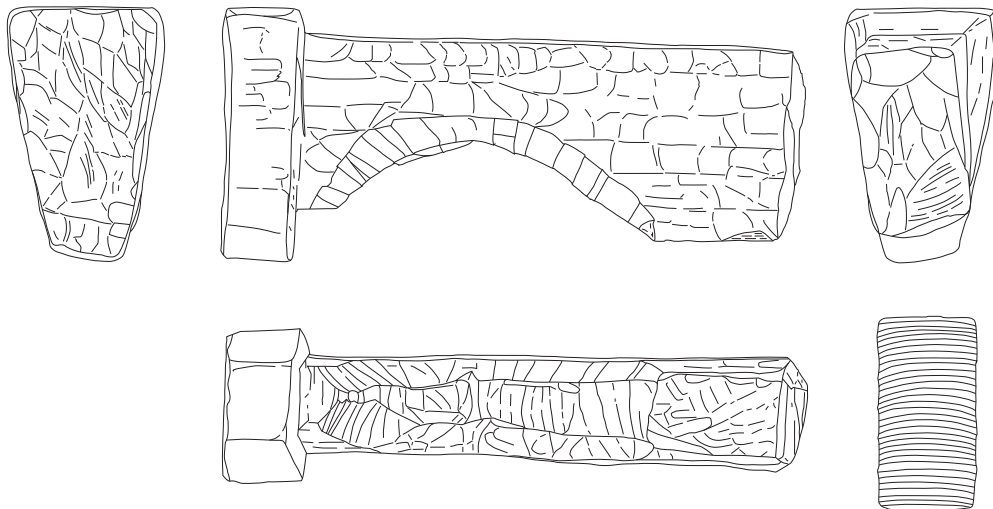
第2図 各部名称図(筆者作成)



写真1 把頭段差の加工痕



写真2 上面(把縁)



第3図 浅後谷南遺跡出土木製把(S=1/3)

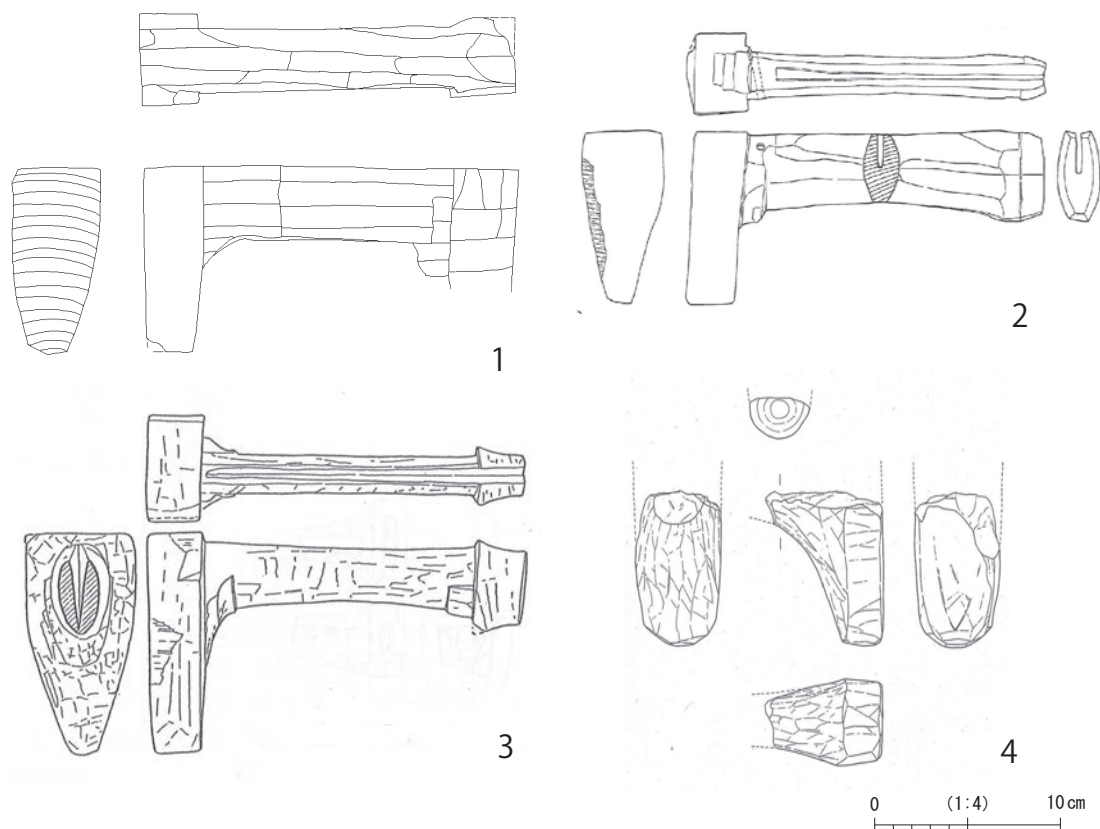
落とし込みの技法によって、鉄身を固定するものと判断できるが、①落とし込み溝に該当する背面の溝が彫り込まれていないこと、②表面に鉄製工具(鑿と刀子か)での加工痕が顕著に残ることなどから製作途中の未成品であることがわかる。把頭長9.6cm・把頭幅5.7cmを測る。把縁長が長大なことが特徴的な資料である。また、把頭に三角挟りを施さない。把縁の全長がほかの遺跡出土の木製把に比べて長いことから、把縁側をさらに削りこむことによって鞘口と合うように調整することが想定できる。なお、本製品は樹種同定を行っていないため、正確な樹種については明らかではないが、肉眼観察では広葉樹と判断した。みかん割材から作出した製品で、木取りは柂目である。

2) 木製把未成品の諸例

頭部上面形態が楔形を呈する落とし込み式把の未成品は、現在当該事例を含め、島根県キコロジ遺跡、奈良県名柄遺跡、石川県矢田遺跡、福井県河合寄安遺跡の5遺跡で6点以上出土している。以下、各遺跡の把について概要を記述する。

(1) 石川県七尾市矢田遺跡(第4図1)

七尾市に所在する弥生時代～中世の複合遺跡である(山内・新美2022)。七尾湾に隣接し、海上交通の拠点としての性格を有する。調査区を横断する流路の古墳時代中期の層から落とし込み式把の未成品が1点と挿し込み式の把未成品が1点以上出土した(新美2023)。落とし込み式把は落とし込み溝が彫り込まれるより前の段階の製品であり、全長20.1cmを測る。表面には鑿や刀子等



1 矢田遺跡(出典 新美2023)、2 河合寄安遺跡(出典 福井2011)
3 名柄遺跡(出典 御所市1995)、4 キコロジ遺跡(出典 岩本2021)

第4図 集落遺跡出土の木製把未成品の諸例(S=1/4)

の加工痕跡が明瞭に残る。なお、三角挟り、懸通孔ともに確認できない。製作工程としては第3段階に位置付けられるものである。肉眼観察の結果、広葉樹、木取りは柾目である。

(2) 福井県福井市河合寄安遺跡(第4図2)

福井市に所在する沖積平野に位置し、古墳時代前期～中期の集落遺跡である。古墳時代中期の漆町編年13群の土器(田嶋ほか1988・TK73～TK216 型式並行期)が出土する水場遺構から木製刀剣装具一式が出土した。それらには未成品を含む落とし込み式把、挿し込み式把、鞘、鞘尻などが確認された。落とし込み式把の内一つは全面に黒漆を塗り、赤色顔料で直弧文を模した文様を施文するものもある(写真3・白崎2003、福井市2011)。なお、川を挟んで対岸に位置する高柳遺跡では、大量の鉄滓に加え、鍛冶関連遺構が確認されているほか、剣鞘と思われる未製品が3点以上出土している。これらのことからこの地域一帯で武器生産が行われていた可能性がある。前述した製品のうち未成品として認識しうる落とし込み式把は、矢田遺跡の資料と同様に背面溝のみが彫り込まれた段階の製品で、懸通孔は未穿孔である。表面にはストロークの長い加工痕が明瞭に残る。樹種はイタヤカエデ、木取りは柾目である。

(3) 奈良県御所市名柄遺跡(第4図3)

奈良盆地の西南部、葛城山・金剛山斜面の傾斜変換線上に位置し、北東方向に奈良盆地を一望できる地形である。調査では外縁と内郭に石垣を巡らせる居館の一部が検出された。石垣の外縁

と内郭に濠が掘削されている。この濠から木製把とともに刀形木製品・剣鞘、紡織具、農工具などが出土するとともに碧玉のチップ、鉄滓や漆の入った土器などの出土から手工業生産も盛んに行われていたことがわかる。また、多数の加工木や加工チップなどの出土から、木器生産が行われていた可能性が指摘されている(木許1995、藤田1989)。本遺跡出土の把は表面に若干の加工痕が残るもののさらに削り込む箇所はなく、外形成形は終了している段階である。落とし込み溝の彫り込みが行われており、懸通孔部分の方形孔はまだ穿孔されていないものの、穿孔しようとした下書きのような痕跡が見て取れる。把頭長は12cmと長大である。なお、樹種は広葉樹、木取りは芯持ちの板目である。

(4) 島根県松江市キコロジ遺跡(第4図4)

松江市所在の弥生時代後期～古代にかけて営まれていた集落遺跡で、古墳時代後期以降になると遺物量が増加する。遺跡の西側には大橋川が流れ、海上交通の要所であった可能性も指摘されている。木製把は2点出土しており、ともに溝の最下層からの出土で、TK43～TK209型式並行期の土器が供伴する。木製把のほか、紡織具や農工具、容器類などが出土した(江川編2011)。楔形頭部を有する木製把は、把頭上面にV字状の線刻が施される。把頭側段差の一段目が形成されておらず、荒形整形のみが終了している段階と考えられる。木取りが他の遺跡の把には例がみられず、樹木の枝分かれ部を利用して製作されている。樹種はサカキである。各部法量が破損により不明であるが、遺存状況から把頭長は5世紀までの集落出土資料より大型であろうか。

3) 木製刀剣把の製作工程

本稿では、木製把本体の製作工程に焦点を定め、各遺跡から出土した資料をもとに考察する。なお、挿し込み式把の集落出土資料は、落とし込み式把と比較すると出土事例が少ないため、落とし込み式を参考にしつつ製作工程を考えたが、想定による部分が多い。

木器の製作工程は、まず特性に適う木を選択し、原木を切り出す伐採、その材を分割する段階を経て、製作することが先行研究でわかっている(樋上2018、山田2018、鶴来2023、飯塚2022)。以下、落とし込み式、次に挿し込み式を一木作りと別作りに分けて製作工程を示す。

① 落とし込み式把の製作工程

第1段階：伐採・原木調達

第2段階：製材

第3段階：荒型成形

第4段階：外形成形

第5段階：溝の彫り込み

第6段階：三角抉りを施す、潜孔穿孔

第7段階：懸通孔の穿孔、表面研磨か、文様線刻(浮彫)

第8段階：漆塗布→第2文様線刻(細線)→赤色顔料塗布

第9段階：目釘孔穿孔

以上、木材調達から製品完成までを含めると、最低でも9段階の工程を経る必要がある。しか



写真3 三角抉りと潜孔
(河合寄安遺跡・福井市文化財保護センター)



写真4 落とし込み式把懸緒穴内面に付着する漆
(布留遺跡・天理参考館)

し、白木の把に関してはその限りではなく、資料によって第8段階、無文のものは第7段階の文様線刻を省略している。

以下、各段階の説明を行う。

第1段階は材料を確保する段階で、いわゆる加工木や半割材として出土する資料が該当する。そのため出土遺物から把の特定をすることは難しい。第2段階は製材工程にあたる。上記の前提はこの第2段階までで、第3段階は、第2段階で製材した木材を製品の荒型に成形する。第4段階は第3段階の荒型をもっと削り込んでいくことによって外形の成形を行う段階である。第5段階は茎の落とし込み溝の彫り込みを行う。第6段階は護拳帯装着に伴う三角抉りを施す段階で、潜孔も同じく護拳帯に伴うことからこの段階で穿孔すると考えられる(写真3)。第7段階は鉄身との固定に用いる有機質を通すための懸通孔を穿孔する。第8段階は漆塗りの段階である。懸通孔内部に漆が付着する事例(写真4)から第7段階が第8段階の工程よりも先の工程になることが確認できる。また、岩本氏の指摘(岩本2011)にもあるように文様の浮彫表現と漆塗布後に細線表現を2段階に分けて行う事例が一定数認められることから、この段階に文様線刻第2段階を認定する。第9段階は目釘孔を穿孔する工程であるが、目釘孔内に漆が付着する事例がないことや目釘孔が穿孔されている漆塗りの未製品が存在しないこと、加えて鉄身がないと正確な穿孔が行えないことの3点から最終工程と考えられる。

以上をまとめると第5図の製作工程を復元できる。なお、製作工程推定工具は参考として挙げる。以前指摘したように矢田遺跡の資料は、表面に刀子か鑿で成形した痕跡が明瞭に見て取れる(新美2023)。浅後谷南遺跡出土資料の表面にも前述したように工具痕跡が残る。名柄遺跡の製品では加工痕が顕著に残るものの単位は上記2資料に比べ小さい。これらの製品から第3段階から工程が進むにつれて工具が小型化していることが推測できる。これは、挿し込み式もおそらく同様である。

②挿し込み式把の製作工程

挿し込み式の把は、上記の木器製作工程を前提すると、第1段階～第4段階までは落とし込み

製作工程模式図	落とし込み式	
	挿し込み式	別作り 一木作り
製作工程推定工具	別作り	第5 第6 第7 第8
	一木作り	第5 第6 第7
製作工程推定工具		斧 手斧 鑿(工程が進むほど小型化) 刀子(工程が進むほど小型化) ヤリガンナ

凡例

落とし込み式の模式図は筆者作成。挿し込み式別作りは細川 2007 の図 22 を参考。一木作りは細川 2007 図 15 を参考にして作成した。

製作工程推定工具は落とし込み式を基準に作成。落とし込み式と挿し込み式の各段階の工具が対応する。

第5図 木製刀剣把の製作工程復元図

式把と共通する。挿し込み式把は一木作りと別作りがあるため、以下ではそれぞれで製作工程を考えたい。また、挿し込み式は別作りと一木作りで第5段階から製作工程が異なる。

a. 挿し込み式別作り 別作りの場合は、把間・把頭・把縁の3つの部材から成り立ち、組み上げることによって把とする。木取りがそれぞれの部材で異なる事例があることから、部材ごとに製作工程第4段階までを行うことが想定される。

第1～4段階：落とし込み式把と共通

第5段階：合わせ部分の削り込みと成形

第6段階：表面研磨及び文様線刻

第7段階：漆塗布、赤色顔料塗布

第8段階：鉄身挿入口・潜孔・目釘孔穿孔

上記の8段階が想定できる。他の把と異なる点は、木製(あるいは一部鹿角製)の部材を組み合わせるため、合わせ部分の削り込みと成形が必要なことである。布留遺跡から出土している把間は、把頭側長を2cmに粗く削っている(写真5)。また把頭の合わせ部も2cm(写真6)と直接ではないが組み合う関係であるのが見て取れる。挿し込み式の別作りは、現状未成品が確認できないため、第5段階以降の工程は厳密には不明な点が多いが、第5段階で大まかな削り込みを終わらせた後に文様線刻→漆塗布という落とし込み式の製作工程を参考にすることで補完したい。落とし込み式と異なるのは潜孔の穿孔を最終段階に行うことである。これは、布留遺跡の資料に限っ



写真5 組み合わせ挿し込み式別作りの把の把間
※右端が柄頭の差し込み部
(布留遺跡・天理参考館)



写真6 組み合わせ挿し込み式別作りの把頭
(布留遺跡・天理参考館)

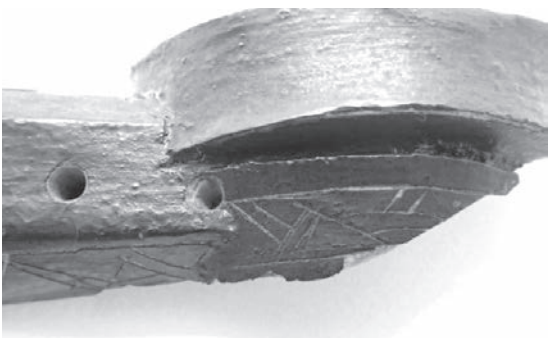


写真7 挿し込み式把の潜孔部分
(布留遺跡・天理参考館)

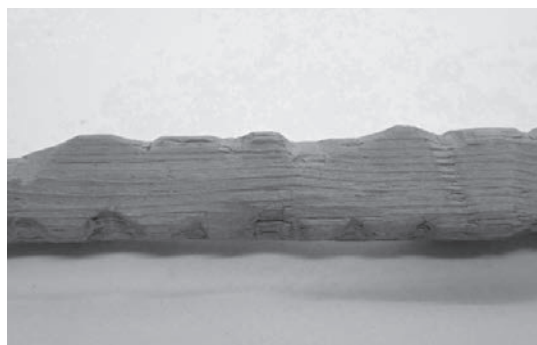
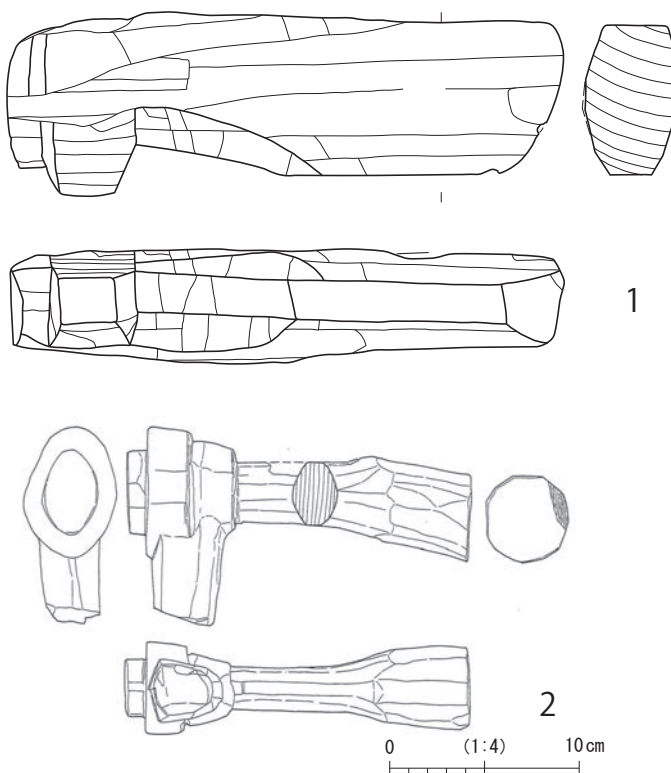


写真8 武器形木製品の刃部の摩耗具合
(浅後谷南遺跡)

てみれば、潜孔内部に漆が付着している例がないことから漆塗布後の最終工程と判断できる(写真7)。鉄身挿し込み口と目釘孔を穿孔するのは、挿し込む鉄身の法量に強く影響を受けるため、鉄身が揃ったタイミングで、つまりは落とし込み式把と同様に最終段階と想定できる。また、鉄身挿入口に関しても内部に漆の付着は認められないことから第8段階以降に行うと判断できる。南郷大東遺跡と尾崎羽生遺跡出土資料は外形整形が終わっているのにもかかわらず、潜孔が把縁突起の部分に認められない^(注3)。このことから護拳帯は装着しないのであろう。そのため、製品によっては第8段階の一部を省略する。



第6図 挿し込み式一体作り未成品の諸例(S=1/4)
1 矢田遺跡(新美2023)、2 河合寄安遺跡(福井市2011)

b. 挿し込み式一木作り 一木作りの形状は別作りと同じで一木から削り込んで製作される。一木作りの未成品は矢田遺跡と河合寄安遺跡で現状確認できる(第6図)。

第1～4段階：落とし込み式把と共通

第5段階：表面研磨及び文様線刻

第6段階：漆塗布、赤色顔料塗布

第7段階：鉄身挿入口・潜孔・目釘孔穿孔

基本的には別作りと同様である。一木作りのため、別作りの第5段階である合わせ部分の削り込みと成形を省略する。

4. 武器形木製品(木刀・木剣)の観察所見

浅後谷南遺跡では、計5点以上の武器形木製品(第7図)が古墳時代中期中葉～後葉の包含層からまとまった状態で出土した。いずれも一木作りで、1以外は、把装具の表現があることから木身組み合わせ式把あるいは木身部分である可能性は考えられない。把間についても遺存する最大のもので6cmと一柄単位には満たない。

以下、各製品の所見を述べる。なお、武器形木製品についても樹種同定を行っていないため、木製把と同様に樹種については肉眼観察の結果を記す。

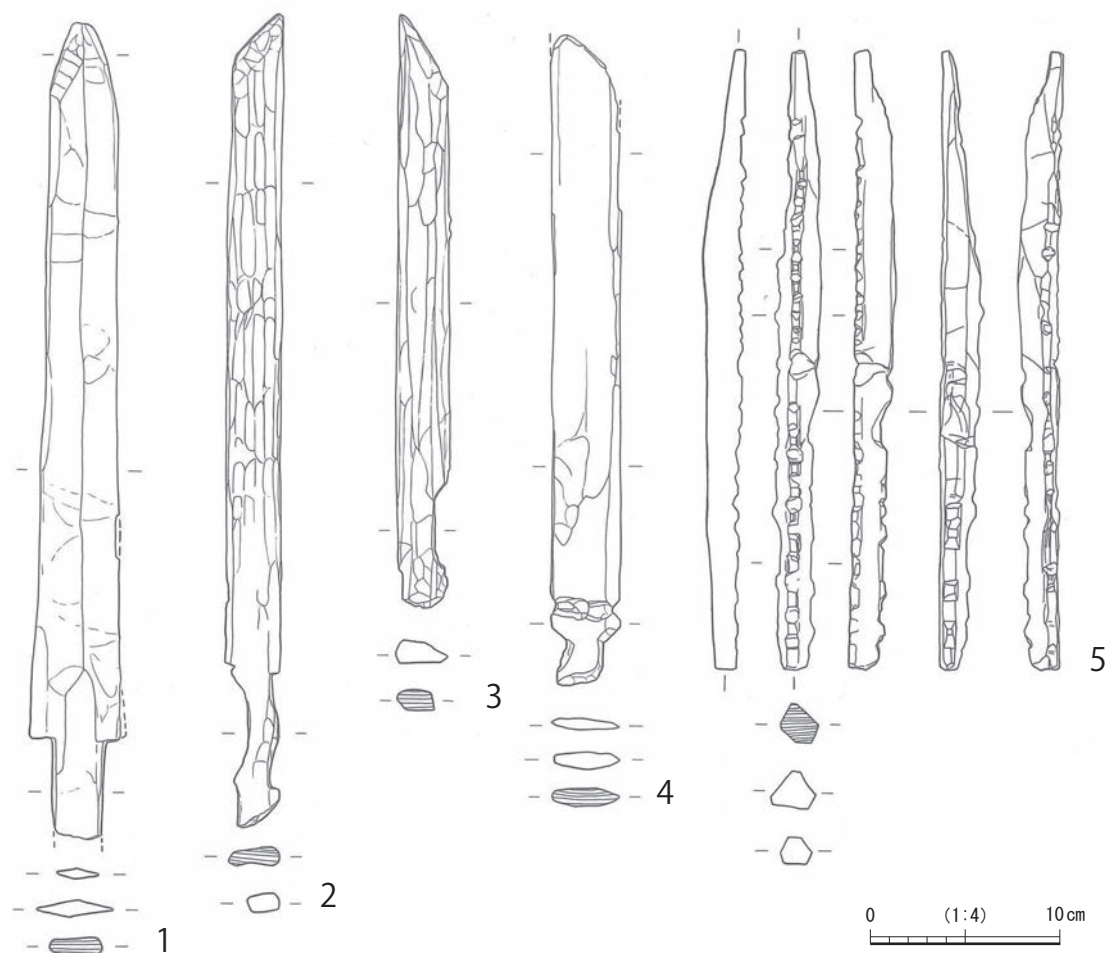
1は抜き身の剣身を模した木製品である。破損によって把頭部分の表現が不明であるが、把縁部分に把装具の表現がないことから、鉄身のみを表現した製品の可能性も考えられる。肉眼観察の結果、針葉樹と判断した。木取りは板目である。

2は抜き身の刀身を模した木製品で、把頭の表現を行う。把縁の表現は行わないものの把から刃部に向かって一段段差を設けることによって刃部との境を表現する。刃部から切先にかけて斜めに落とすことによって、刃の表現を行う。表面は鉄製工具で成形された痕跡が明瞭に残る。肉眼観察の結果、針葉樹と判断した。木取りは板目である。

3は抜き身の刀身を模した木製品で、把頭から切っ先まで遺存する。表面には鉄製工具で整形した痕跡が明瞭に残る。2と同様に刃部から切先にかけて斜めに落とすことによって、刃の表現を行う。把頭の表現はあるものの把縁の表現は認められない。把間から刃部の境は刃部側の側面を斜めに削り込むことによって行う。肉眼観察の結果、広葉樹と判断した。木取りは板目である。

4は抜き身の刀身を模した木製品である。把間の途中から把頭にかけて燃えており、遺存していない。把縁は、両側面からV字状に削り込むことによって作出する。また側面のみではなく、平面の刀身部分との境に線刻を施す。把の表現を行う刀形木製品である。肉眼観察の結果、針葉樹と判断した。木取りは板目である。

5は武器型木製品として報告されている資料であるが、①断面形状がおおむね三角形を呈すること、②把の表現が無いこと、③刃部に該当する箇所に鋸歯状(山形)の突起がいくつもあり、ギザギザしていることの3点から武器形木製品ではないと判断した。なお、断面形状がおおむね三角形を呈することから集落や古墳周濠などで出土する刀形木製品の刃部に該当する部分が山形を



第7図 浅後谷南遺跡出土武器形木製品(S=1/4、出典：石崎ほか2000)

呈する一群とも性格が異なるものと考えられる。また特筆すべき点は鋸歯状の三角形は何かで擦られたかのように摩耗している痕跡が見て取れることである(写真8)。肉眼観察の結果、針葉樹と判断した。現状、本資料のみでは断言できないが、^{ささら} 觿といった楽器の可能性も視野に入れて、今後の研究を行ってきたい。

5. おわりに

以上、本稿では浅後谷南遺跡出土の木製落とし込み式把と武器形木製品について観察を行った結果を記した。その上で、木製刀剣把自体の製作工程についても言及した。各遺跡出土資料の観察結果からも、おおむね以上で整理した工程に則って製作されるものと考えられる。

今後とも丹後地域の古墳時代史の解明に向け、引き続き資料の整理を行っていく所存である。個別具体的な資料で再評価が必要と判断したものについては、今後とも発信していきたい。

謝辞 本稿の執筆にあたり、木製品は魚津知克氏、前田仁輝氏、福山博章氏にご教示いただきました。遺跡については、黒坪一樹氏、高野陽子氏、筒井崇史氏にご教授いただきました。資料調査にあたりましては、御所市教育委員会、天理参考館、福井市文化財保護センターの方々にお世話になりました。文末に記してお礼申し上げます。

(にいみ・あとむ＝当調査研究センター調査課調査員)

注1 本稿での段階別の時期区分は高野2014で言及がなされている内容に従い、弥生時代～古墳時代中期後半までの時期を5段階と設定した。

注2 一部の資料では、把縁の突起を別に組み合わせる、最大4つの部材に分かれるものもある。

注3 尾崎羽生遺跡の資料は把頭まで残る完形品であるが、把縁突起と同様に把頭にも潜孔は認められない

参考文献

飯塚武司2022『木工の考古学』(株)雄山閣

石崎善久・黒坪一樹・福島孝行2000「浅後谷南遺跡」『京都府遺跡調査概報』第93冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

岩本 崇2011「キコロジ遺跡出土木製柄装具と刀剣装具の生産」『農村振興総合整備事業 宍道湖中海沿岸地区(長善寺ため池)に伴うキコロジ遺跡発掘調査報告書』(松江市文化財調査報告第138集) 松江市教育委員会・(財)松江市教育文化振興事業団

江川幸子(編)2011『農村振興総合整備事業 宍道湖中海沿岸地区(長善寺ため池)に伴うキコロジ遺跡発掘調査報告書』(松江市文化財調査報告第138集) 松江市教育委員会・(財)松江市教育文化振興事業団

置田雅昭1988「天理参考館所蔵の鉄製品―天理市〔旧丹波市町〕近傍古墳出土―」『天理参考館報』創刊号 天理大学付属天理参考館 pp.10-25

木許 守1995『奈良県御所市名柄遺跡第4次発掘調査報告』(御所市文化財調査報告書第19集) 御所市教育委員会

黒坪一樹1998「浅後谷南遺跡」『京都府遺跡調査概報』第83冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

御所市教育委員会1988『名柄遺跡発掘調査現地説明会資料』

白崎一夫・白嶋裕司2003「福井市河合寄安遺跡の調査」『鉄器研究の方向性を探る―刀剣研究をケーススタディとして―』鉄器文化研究会・大手前大学史学研究所 pp.179-182

高野陽子2014「古墳時代前期の導水施設―京都府浅後谷南遺跡の再評価―」『出現期土器研究』第2号 古墳出現土器検討会 pp.123-137

田嶋明人・山本直人・奥田 尚・河村好光1988『漆町遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

鶴来航介2023『木材がつなぐ弥生社会―木工技術論の再構築』(プリミエ・コレクション122) 京都大学学術出版会

新美祥人夢2023「石川県七尾市矢田遺跡出土の木製刀剣装具について」『石川県埋蔵文化財情報』第49号(公財)石川県埋蔵文化財センター pp.66-79

新美祥人夢2025「金沢市畝田・寺中遺跡出土の木製刀把」『石川県埋蔵文化財情報』第51号(公財)石川県埋蔵文化財センター

(財)浜松市文化協会1998『山ノ花遺跡 木器編』

樋上 昇2018「木製品の組成と社会変容」『モノと技術の古代史 木器編』(株)吉川弘文館 pp.81-121

福井市文化財保護センター2011『河合寄安遺跡発掘調査報告書Ⅰ』福井市教育委員会

藤田和尊1989「奈良県御所市名柄遺跡」『日本考古学年報』42 日本考古学協会 pp.505-508

細川晋太郎2007「古墳時代中期の鉄剣と鉄刀の構造―珠金塚古墳南榔出土刀剣の観察―」『古文化談叢』第58集 九州古文化研究会 pp.89-138

山内紀嗣(編)1995『布留遺跡三島(里山)地区発掘調査報告書』埋蔵文化財天理教調査団

山内花緒・新美祥人夢 2022「矢田遺跡(七尾市)」『石川県埋蔵文化財情報』第47号(公財)石川県埋蔵文化財センター pp.10-12

山田昌久2018「日本原始・古代の木工技術―伐採・製材技術と減少・増加加工技術―」『モノと技術の古代史 木器編』(株)吉川弘文館 pp.15-79

左坂古墳群とその周辺

－ 弥生時代中期後葉から奈良時代までの墳墓の動向－

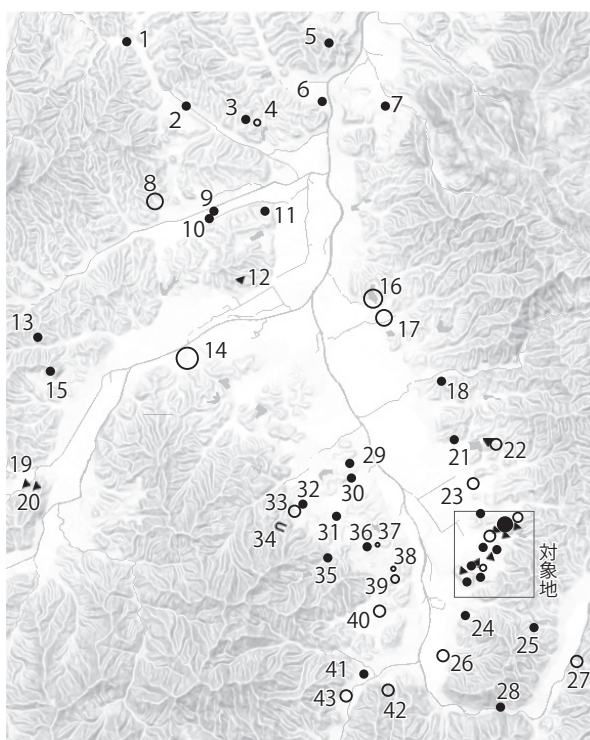
肥後 弘幸

1. はじめに

京丹後市大宮町所在の左坂古墳群は、弥生時代中期末に造墓活動が始まり、古墳時代後期まで丘陵上で木棺直葬の台状墓、方墳、小円墳が築かれ、飛鳥時代から奈良時代にかけて丘陵裾部で横穴墓が営まれる丹後地域最大の古墳群である。この古墳群の南には、帯城墳墓群、大田鼻横穴、有明古墳群、有明横穴、三坂神社裏古墳群、三坂神社墳墓群など多数の墳墓があり、1980年代から90年代にかけて丹後国営農地開発、丹後リゾート開発に伴い発掘調査が丘陵部とで実施された。本稿では、改めてこの地域に焦点をあてて、弥生時代中期後葉から奈良時代までどのような造墓活動が行われたかについて、概観してみることにする。^(注1)なお、それに先立ち、これらの墳墓が所在する中郡盆地(峰山盆地)の集落と墳墓の動向について発掘調査成果をもとに概観することとする。

2. 中郡盆地の発掘調査成果(第1図)

弥生時代中期後葉の台状墓3基がカジヤ遺跡(9)、方形貼石墓2基が小池古墳群B支群(30)に見られる。一辺6～7m規模の墳丘に複数の埋葬施設をもつ。居住域から離れた丘陵上に墳墓が営まれる初期の例であり、中期末には後述する左坂墳墓群(左坂古墳群D支群)でも造墓活動が始まる。以降、同一丘陵で途切れることなく古墳時代後期中頃まで造墓活動が続く。弥生時代の集落は、前期から続く拠点的な環濠集落である途中ヶ丘遺跡(14)しか知られていなかったが、近年の調査で、佐屋利遺跡(16)や老田遺跡など台地の縁辺部での集落遺跡の存在が明らかになってきた。母村と分村のような関係であろう。



- 1 赤坂今井墳墓、2 大耳尾古墳群、3 丹波丸山古墳群、4 鶴尾遺跡、5 大田南古墳群、6 湧田山1号墳、7 桃山古墳群、8 古殿遺跡、9 カジヤ古墳、10 カジヤ遺跡、11 八幡山古墳群、12 舟泉寺横穴、13 桃谷古墳、14 途中ヶ丘遺跡、15 苗代2号墳、16 佐屋利遺跡、17 新谷遺跡、18 松田古墳群B支群、19 宮谷横穴、20 下山横穴、21 今市墳墓群、22 カンジョガキ遺跡、23 大宮売神社境内遺跡、24 大谷古墳、25 比丘尼屋敷古墳、26 谷内遺跡、27 三重遺跡、28 西外1号墳、29 三本松1号墳、30 小池古墳群B支群、31 清漬古墳群、32 池田古墳群、33 アバタ遺跡、34 阿婆田窯跡、35 砥石場西古墳群、36 通り古墳群、37 古土井遺跡、38 エノボ遺跡・エノボ横穴、39 裾谷横穴、40 枯木谷遺跡、41 新戸1号墳、42 裏陰遺跡、43 正垣遺跡

第1図 中郡盆地内の主要な遺跡(国土地理院1/50,000)

後期初頭になると丘陵部での造墓活動がさらに盛んになる。平野部を見下ろす丘陵先端部では、左坂墳墓群に続いて、後述する三坂神社墳墓群、今市墳墓群(21)、大谷古墳下層墓(24)などが認められる。拠点集落である途中ヶ丘遺跡は、他の京都府北部の拠点集落同様後期前半が空白期である。後期前葉の集落はまだ見つかっていないが、後期中葉のアバタ遺跡(33)、後期後葉の古殿遺跡(8)、大宮壳神社境内遺跡(23)、谷内遺跡(26)、三重遺跡(27)、裏陰遺跡(42)、正垣遺跡(43)、後期末の古土井遺跡(37)など丘陵裾部に近い扇状地を中心に小集落が営まれている。後期後葉になると集落の増加に伴うかのように、松田墳墓群(松田古墳群B支群 18)、清漬古墳群(31)、赤坂今井墳墓(1)、帯城墳墓群(後述)など各地で造墓活動が認められる。ガラス釧や管玉、鉄剣などを副葬した比丘尼屋敷古墳(25)もこの時期であろう。

古墳時代になると大和王権の影響下のもと、土器の様相が山陰と近畿中央部の影響を受けて一変する。前期前葉まで、古殿遺跡や裏陰遺跡など一部の集落が継続する。松田古墳群B支群や左坂古墳群では引き続き造墓が続く中、古墳時代初頭に鏡を副葬する大田南古墳群(6)が営まれる。大田南2号墳は、丹後地域ではじめて個人だけのために営まれた墳墓で、伝統的な舟底状木棺が採用されており、画文帯環状乳神獣鏡と鉄剣などを副葬する。やや時期の新しい5号墳では、5つの埋葬施設が営まれており、中心埋葬の箱形石棺には、青龍三年銘方格規矩鏡と鉄刀が副葬されていた。2号墳とはほぼ同規模の楕円形墳で舟底状木棺を持つ丹波丸山6号墳(3)は、土器がないため決め手を欠くが続く古墳時代前期前葉の墳墓であろう。

このほか、古墳時代前期前半の墳墓は三坂神社裏古墳群(後述)や有明古墳群(後述)が知られる程度である。前期後葉には、竪穴式石室に銅鏡や石製腕飾類を副葬した長径73mを測るカジヤ古墳が出現する。同様の大形の楕円丘をもつ湧田山1号墳もこの時期だと推察できる。土器棺などから前期後葉から造墓活動がある苗代2号墳(15)は、伝統的に多数の埋葬施設をもっている。直径30mと20mの円墳を含む通り古墳群(は前期末に造られている。前期～中期前葉にかけての中小古墳には、副葬品が少なく供献土器がないためこの時期の中小古墳の動向はわからない。古墳時代中期以降の集落の様相は不明であるが、中期前葉の幾坂遺跡(後述)、中期後葉の谷内遺跡、後期前葉のアバタ遺跡のように小さな集落が丘陵の裾部や谷部、扇状地から見ついている。なお、大宮壳神社境内遺跡(大宮壳神社遺跡)は、古くから古墳時代中期後半から後期前半に属する鏡形石製品や勾玉および多量のミニチュア土器が採取されており、神社成立に関わる祭祀遺跡として知られている。^(注2)

中期前葉の首長墓として、一人の女性を埋葬した剣、鏡、玉を副葬した大谷古墳があげられる。全長50m級の前方後円墳2基を含む八幡神社古墳群は中期後葉と推定される。中期後葉になると、いわゆる初期群集墳が、小池古墳群と清漬古墳群で出現する。中期末には、直径20mの中型円墳を含む大耳尾古墳群(2)も出現し、以後、後期中葉まで直径10m前後の円墳から構成される木棺直葬系埋葬施設を持つ初期群集墳が各地で築かれる。当該期の初期群集墳には、ほかに桃山古墳群(7)、今市古墳群、左坂古墳群、有明古墳群、池田古墳群(32)などがあげられる。

後期後葉になると、横穴式石室を持つ古墳の築造が始まる。群集することなく1つの尾根を1

基で占有する傾向にあり、桃谷古墳(13)、西外1号墳(28)、三本松1号墳(29)、新戸1号墳(41)など高い天井を持つ石室を築き、金銅装の馬具を副葬している。横穴式石室からなる後期群集墳としては、砥石場西古墳群(35)が知られるのみで、7世紀初頭以降、横穴墓が目立つようになる。

中郡盆地周辺では、鱒留川左岸に舟泉寺横穴、宮谷横穴、下山横穴(各横穴は、「○×横穴墓群」の名称で埋蔵文化財包蔵地として登録されていることが多いが、本文では、「○×横穴」と表記する。)がそれぞれ密集して営まれ、竹野川上流域右岸にカンジョガキ遺跡から上流側にかけて里ヶ谷横穴、左坂横穴A支群、同B支群、大田鼻横穴、有明横穴が営まれている。その対岸には、裾谷横穴、エノボ横穴が存在する。多くの横穴が5基以上で密集して営まれてるが、カンジョガキ遺跡、裾谷横穴、エノボ横穴では竪穴住居等からなる飛鳥時代の居住域に隣接もしくは廃絶後に少数の横穴を営んでいる。

左坂古墳群のある谷部に位置する幾坂遺跡でも7世紀の集落が展開する。横穴墓の利用は8世紀中頃まで続き、火葬墓も営まれている。奈良時代になると、荷札木簡と九九木簡、墨書土器が出土し郡衙などの公的な役所と考えられる鶴尾遺跡(4)をはじめ墨書土器が出土した遺跡として枯木谷遺跡(40)、正垣遺跡があり、いずれも丘陵の裾部に位置する。この時期、3支群10基以上の窖窯からなる阿婆田窯跡(34)が営まれている。

3. 左坂古墳群とその周辺

対象とする地区は、丹後半島を貫流する竹野川上流域右岸の低丘陵上に位置する。昭和59年から本格化した丹後国営農地開発「三坂地区」に伴う発掘調査で、帯城墳墓群、大田鼻横穴、有明2・3号墳、有明1～3号横穴が調査された(第2図)。平成2年から本格化した丹後国営農地「周枳地区」に伴う発掘調査で、幾坂遺跡、左坂古墳群B～G支群(B支群を除くといずれも部分)、左坂横穴A・B支群、里ヶ谷横穴が調査された。平成4年には、北部マスターブレッジ整備事業に伴い三坂神社墳墓群、三坂神社裏古墳群、有明古墳群、有明4～8号横穴が調査された。同年、丹後大宮農業協同組合ライスセンター建設に伴い左坂古墳群G支群(左坂墳墓群)が調査された。平成8年には、農道建設に伴い左坂南3・4号墳が調査された。以上、約1km四方の範囲において、これほど多くの墳墓の調査例は少なく貴重な成果である。以下、各遺跡について概説する。

(1) 左坂古墳群

総数213基からなる丹後地域最大の古墳群である(第3図)。古墳群は、標高60～110mの東西1,000m・南北300mの丘陵上に分布し、便宜上A～Jの10支群に分けられる。この内、平野部に近いA支群とC～F支群の丘陵主尾根に位置する古墳とH・I支群を除く、約半数の119基が調査された。

最も平野部に近いA支群は、直径12～20mの円墳6基からなる。いずれも未調査である。

B支群は、A支群に続く尾根上にあり、尾根上に連続する円墳群と北に伸びる支尾根上に階段状の小さな方墳を築いている。33基全てが調査されたが、雛壇状の祭祀遺構を形成するものもあったようで、埋葬施設がないものが9基ある。また、17号墳のように、墳丘区画の明瞭でないも



第2図 対象とした遺跡群



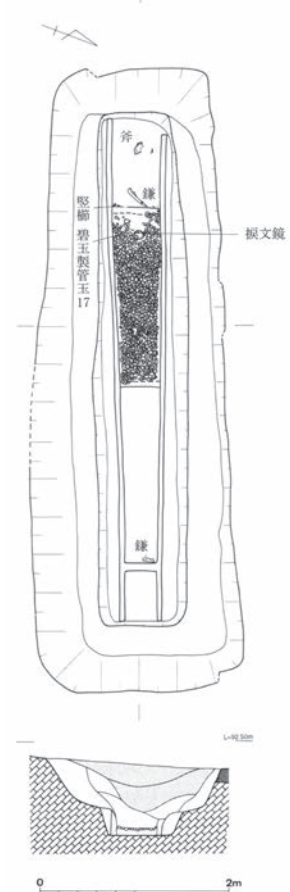
第3図 左坂古墳群分布状況

のも含まれる。盟主的な2号墳は、直径18mの円墳で4基の埋葬施設が検出された。第1主体部は石棺直葬墓で、棺内からは、壮年男性と推定される人骨一体が仰臥で検出され、左肩付近から鉄斧・鉄剣・鑿が、右大腿骨の横からやりがんなが、左大腿骨横から鉄剣が出土した。また、墓壙内中央部の埋土最上層から並べて置かれたと考えられる鉄鏃3点と銅鏃3点が出土している。墓壙上面からは器台が出土している。出土遺物等から4世紀から5世紀前半にかけて営まれた古墳群と考えられる。

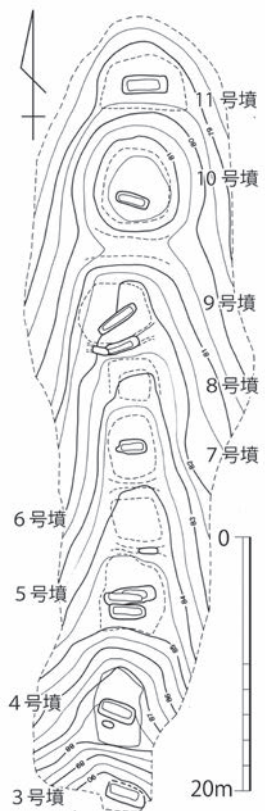
C支群は、主尾根頂部にある3基の1・2・4号墳を中心に27基から構成される。18基が調査された。4号墳は、直径26mを測る左坂古墳群最大の円墳(未調査)で、ここから北に下る支尾根上には、階段状に15基の10m前後の方墳・円墳が築かれている。墳丘盛土のあるものとなないものが混在するものの、いずれも木棺直葬の埋葬施設を1～2基営み、鉄鏃、鉄斧、刀子など少量の鉄製品を棺内に副葬するものがある。B支群に続く尾根上にある21号墳は地山整形による直径20mの円墳で、内部に2区画を持つ長大な組み合わせ木棺が検出された(第4図)。礫床を持つ西側の区画内からは布巻きの振文鏡と緑色凝灰岩製管玉19点が、棺外から有肩袋状鉄斧、直刃鎌、曲刃鎌、堅櫛4点が出土している。左坂古墳群で唯一銅鏡が副葬されている。C支群は出土遺物から、概ね5世紀初頭から後半にかけての築造時期が求められる。

C支群の東に位置する28基からなるD支群では、北に延びる支尾根上の10基(3～12号墳)が調査された(第5図)。階段状に尾根を整形して築かれた一辺6～12mの方墳もしくは円墳である。いずれも木棺を直葬するもので、棺内から勾玉、管玉、小玉からなる玉類、鉄刀、鉄鏃からなる鉄製武器類が出土しているものがある。また、棺上もしくは墳丘上から須恵器が出土している。概ね5世紀後半(陶邑古窯跡群TK208型式)から6世紀初頭(MT15型式)の時期に築かれたものと考えられる。

さらに東に位置するE支群は、一辺5～17mの方墳・円墳計26基で構成される。北に延びる支尾根上の階段状に地山を整形して築かれた12基(5～11号墳、21～25号墳)が調査された。5号墳から11号墳は、木棺を埋葬施設とするもので、5号墳が1基の埋葬施設をもち、6～11号墳は大小3～4基の埋葬施設をもつ。副葬品には、鉄刀、鉄鏃、曲刃鎌、緑色凝灰岩製管玉、ガラス小玉をもつものがあるが、他の支群に比べて副葬品が貧弱である。墳丘上から須恵器が出土しており、6世紀前半(MT15型式、TK10型式)に築造されたものと考えられる。21～25号墳は、急峻な尾根を階段状にカットして平坦面を作り出した小規模な古墳であ



第4図 C-21号墳主体部



第5図 D支群測量図

る。木棺からなる埋葬施設を1基もしくは2基築くもので、21号墳第1主体部から勾玉2点と管玉4点が出土している。22号墳の墳丘上から5世紀末(TK47型式)の須恵器が出土している。

F支群は、点在する37基から構成される。11～16号墳を調査したが、幾坂城により改変が著しく16号墳で玉類を副葬する埋葬施設の残欠を確認したにすぎない。調査中に5世紀末(TK47型式)の須恵器が出土している。

G支群は古墳群の南西部、B支群の南に位置し、最も竹野川に向かって開けた位置にあり、39の墳墓が築かれている。南向きの尾根と西向きの尾根をもつ東丘陵部と、小さな独立丘陵上をなす西丘陵では、弥生時代の墳墓群が営まれている。19墳墓(埋葬空間)が調査され148基の埋葬施設が検出された。尾根上の墳墓は、方形もしくは三日月状に埋葬空間としての平坦面を削り出して1基から19の埋葬施設を営んでいる。また、丘陵斜面においても、起伏を利用して小型の台状墓を築き1～5基の埋葬施設を営んでいる。

東丘陵西尾根の先端に位置する中期末に営まれた18号墓の大小6基の埋葬施設内には、小口板を側板で挟み込む形の組み合わせ木棺が据え置かれていた。いずれの埋葬施設でも、棺の蓋をしたのち、棺蓋ならびに裏込め上に割った土器をばらまき「墓壙内破碎土器供献」が行われている。18号墓以降、造墓活動は東丘陵西尾根を丘陵上に向かって展開するのと合わせて西丘陵でも開始される。後期初頭には、鉄鏃や玉類の副葬が開始される。後期前葉から中葉にかけて造墓活動は東丘陵南尾根で爆発的に展開する。副葬品の質・量ともにこの時期が最も充実し、1号墓下層第5主体、26号墓第2主体部では、鉄刀などが、24・1号墓第9主体部と26号墓第1主体部にはガラス勾玉が副葬されている。

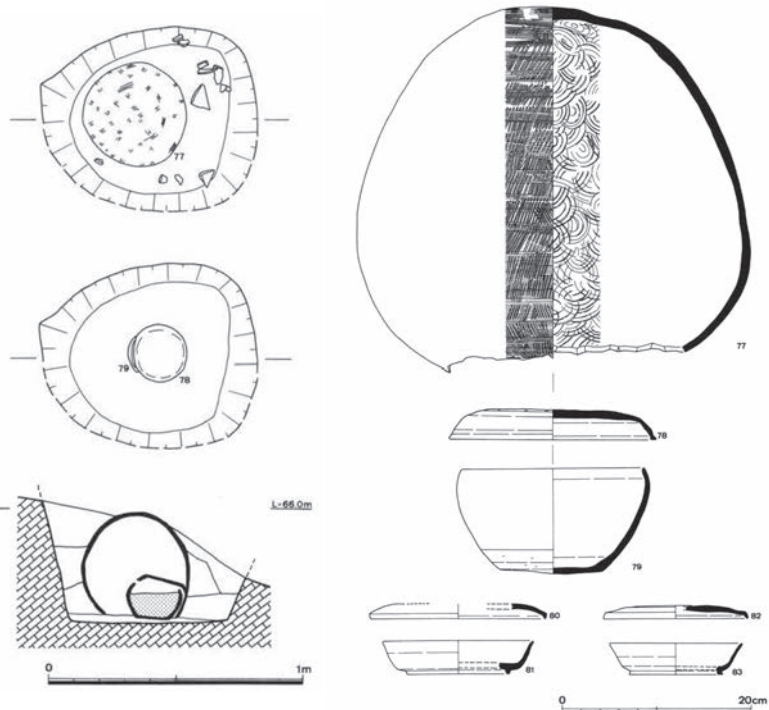
埋葬施設148の内訳は、小児棺を含む大小の木棺墓114基、幼児を埋葬した土壙墓28基、乳幼児を埋葬した土器棺墓2基、構造不明4基である。墓壙内破碎土器供献は89の埋葬施設で見られ、その実施率は時期を経て減少する。墓壙上の土器供献は前葉以降の埋葬施設で墓壙内破碎土器供献とともに行われている。木棺墓62基と土壙墓1基の計63基に副葬品がみられ、多くが成人棺であるが、小児棺で勾玉4、ガラス小玉343、やりがんな1を持つものもある。1号墳下層墓の中心的な埋葬施設では、鉄刀1、鉄鏃2、やりがんな1を、26号墓の中心的な埋葬施設では、素環頭鉄刀1、鉄鏃2を副葬している。墳墓群全体の副葬品の総数は、武器として、鉄刀2、鉄剣1、鉄鏃26、銅鏃1、鉄製工具として、やりがんな11、刀子4、装身具としてガラス勾玉7、ガラス管玉21、緑色凝灰岩製管玉31、ガラス小玉6,584である。

G支群最高地点にある1号墳は、弥生墳墓の上に築かれた鉄刀、鉄剣、刀子、鉄鏃などを副葬する6世紀前半(MT15型式)の盛土を持つ円墳である。1号墳からC支群に向かう尾根上にある2～11号墳は、地山整形による方墳である。方形というよりはむしろ長方形墳と称するべきものが多く、長辺5～13mを測る。埋葬施設は、木棺墓、土壙墓、石棺墓、土器棺墓から構成され2号墳・6号墳を除くといずれも複数ある。出土した土器等から造墓活動は前期初頭にB支群に近い12・13号墳から始まり、前期後半まで続くようである。副葬品は少なく、やりがんな、刀子、すき先、鉄斧、鉄鏃などが少量出土している埋葬施設が4基ある。2号墳と13号墳では、墓壙を

埋め戻した後に土器が供献されていた。5号墳の中心に位置する石棺内からは、3体の人骨とガラス小玉2点が出土している。

(2)左坂遺跡

左坂古墳群の西側に広がる集落遺跡と考えられる。里ヶ谷横穴の南側で行われた試掘調査で弥生時代中期の土器が出土している。なお、調査前は、土師器・須恵器の散布地となっていた。



第6図 左坂横穴B支群検出の火葬墓と出土土器

左坂古墳群の北側にある遺物散布地で、左坂古墳群D支群の東側の丘陵裾部の2地点で遺構が検出されている。A地点からは、5世紀と6世紀の竪穴住居8棟が、B地点からは7世紀前半から中葉の竪穴住居4棟が検出されている。

(4)里ヶ谷横穴

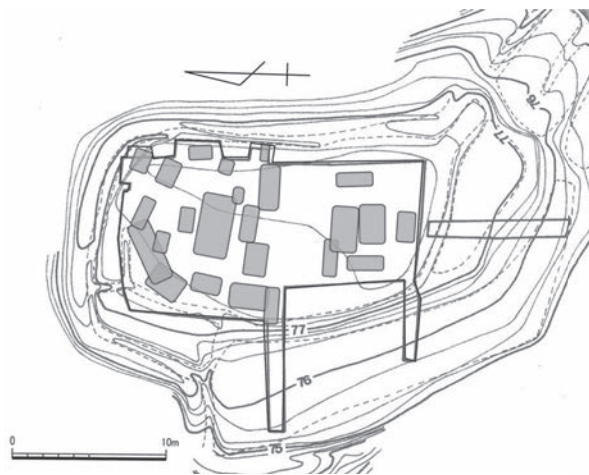
左坂古墳群B支群とG支群の間に所在する西に開く谷の奥部、南側斜面から東西70mの範囲から8基の横穴が見つかり、7基が調査されている。横穴墓としての密集度は高くない。7世紀初頭(T K209型式期新相)のS X01から造墓が始まり、8世紀中頃まで利用されている。金銅製耳環と鉄鏃、金銅製耳環と刀子をそれぞれ副葬する横穴が2基あるのみで、副葬品は豊かではない。

(5)左坂横穴A支群

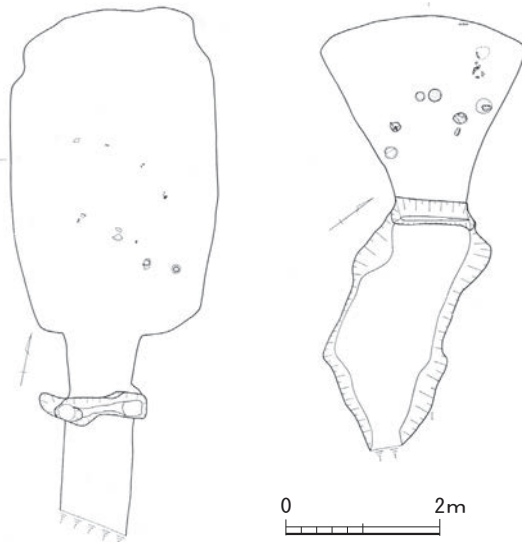
左坂古墳群G支群の南斜面に位置する6基からなる横穴である。7世紀中頃から後葉にかけてに造られた3～6号横穴が調査された。6号横穴では、8世紀中頃にも再利用されている。7世紀後葉に造られた5号横穴は、早い段階で天井の低い玄室が崩落土により密閉されたためか、人骨が非常に良好な状態で残されていた。被葬者は9体もしくは10体で埋葬後しばらくしてかたづけ行為があることが判明した。多くの須恵器、土師器が出土しているが、少量の鉄製の刀子や鏃及び耳環2点があるだけで副葬品は豊かではない。

(6)左坂横穴B支群

左坂古墳群G支群の東側斜面に位置する11基の横穴墓と1基の火葬墓から構成される。7世紀後半から造墓活動がはじまり、8世紀前半まで続く。多くの須恵器と土師器が出土しているが、それ以外は、少量の鉄製の刀子や鏃及び耳環があるだけで副葬品は豊かではない。8世紀には、横穴内に火葬骨も埋葬されており、須恵器の甕を外用器、須恵器の皿と鉢を蔵骨器とした火葬墓



第7図 帯城墳墓群B地点



第8図 大田鼻3号横穴と14号横穴の平面プラン

(第6図)で造墓活動を終了したようである。

(7)左坂南古墳群

左坂古墳群の南に位置する4基からなる古墳群で、3・4号墳が調査された。3号墳は、5世紀末に3基の埋葬施設を営み鉄鏃や曲刃鏃、刀子、ガラス小玉などを副葬していた。

(8)帯城墳墓群

左坂古墳群の南には、国営農地開発で完全に姿を消した東西に延びる細い丘陵があり、丘陵上に弥生時代中期、弥生時代後期、古墳時代中期～後期と様々な時期の墳墓が営まれていた。弥生時代中期後葉に墳墓が営まれるが、その様相は不明である。後期末には、丘陵先端部(A地点)と丘陵奥部(B地点)で、造墓活動が行われている。B地点には長辺25m・短辺15mの墳丘に大小23基の埋葬施設が営まれており、この内3基の埋葬施設には、鉄剣が副葬されていた(第7図)。A支群では、5世紀後半から6世紀前半に4基の円墳(1基は方墳か)が営まれている。

(9)大田鼻横穴

帯城墳墓群のある丘陵の南側斜面に7世紀初頭から8世紀前葉に営まれた総数30基から

なる丹後地域最大の横穴墓である。玄室の平面形が長方形からフラスコ形に代わる様相がよくわかる(第8図)。多くの横穴から、須恵器や土師器が出土したが、刀子や鏃及び耳環の出土量は少ない。しかし3基の横穴から刀が出土していることは特筆される。なお、8世紀前葉に営まれた28号横穴からは「厨物」と墨書された土師器の高杯と蓋が出土しており、被葬者に官人層が含まれていたことが指摘されている。

(10)里山遺跡

有明横穴の北側の谷部からは弥生土器、土師器・須恵器が散布し、有明横穴の北側の斜面からは、7世紀の竪穴建物や柱穴などが検出されている。

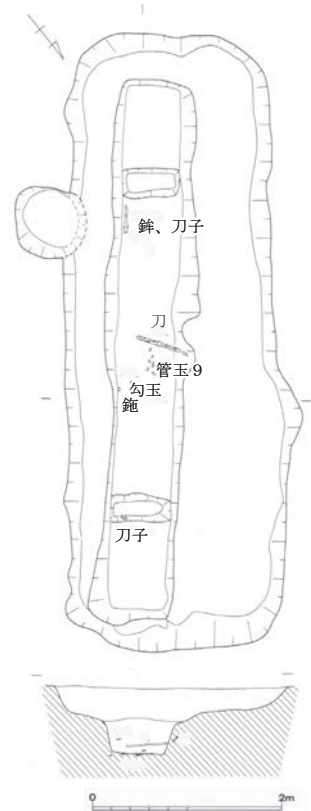
(11)有明横穴

北に延びる先端附近の丘陵東斜面に営まれた7世紀中頃から8世紀前葉に営まれた横穴である。2～8号横穴が調査された。6・7号を除く横穴から須恵器・土師器は出土している。鉄製品は、釘、刀子、鏃などが少量出土している。7世紀後葉の5号横穴出土須恵器の杯Bの身と蓋

に「奉」の線刻が施されていた。

(12)有明古墳群

北に延びる丘陵上に営まれた古墳群で、8号墳が前期前葉に、3号墳が前期後葉から中期前葉に、7号墳が中期前葉に、4～6号墳が後期中葉から後葉に営まれている。7号墳には、5mを超える長い組合せ木棺が設置されており、棺内及び棺外から刀、鉾、刀子、鉞、碧玉製の勾玉・管玉などが出土した(第9図)。8号墳からは、長さ5.7m・幅3.6m・深さ1.7mの墓壇(第9主体部)内に設置された割竹形木棺から鉄剣2振りと21点の定角式鉄鏃が出土している。第9主体部に一部重なるように7基の小児を含む土壇墓が、沿うように1基の成人を埋葬した土壇墓(第7主体部)が営まれていた。



第9図 有明7号墳主体部

(13)三坂神社裏古墳群

有明古墳群と同じ丘陵の上方に位置し、1～10号墳が調査された。少ない副葬品や土器から時期のわかる古墳は、前期初頭から中期前葉に帰属する。土器の出土していない有明7・8号墳も本来この古墳群に帰属するものと考えられる。9号墳から銅鏃が出土している。

(14)三坂神社墳墓群

南北方向に延びる急峻な尾根上に、後期初頭から前葉にかけて営まれた6基の台状墓である。最高位にある3号墓には、素環頭鉄刀を腰に差し、ガラスと水晶からなる頭飾りをつけ、黒漆塗りの儀仗を左手に持った首長が葬られていた。現状では、近畿北部の丘陵上の墳墓(台状墓)で、最も早く、鉄製武器・工具とガラスを主体とする装身具を副葬した墳墓である。

4. 造墓活動の状況

弥生時代中期 中期後葉に帯城墳墓群で造墓活動が始まる。丹後地域では、この時期丘陵の上で、造墓活動が活発化する傾向にある。近傍の小池古墳群では、方形貼石墓も築かれている。これらの墳墓の埋葬施設は1～2基程度と考えられる。

一方、中期末には、左坂古墳群G支群で、墓壇内破碎土器供献が行われる小児を含めた多埋葬の親族墓と呼べる区画の明瞭でない台状墓の造営が始まる。

弥生時代後期 後期初頭に三坂神社墳墓群で造墓活動が前期前葉まで続く。三坂神社墳墓群の造墓契機となった3号墓第10主体部が、鉄製武器・工具類とガラスや水晶玉からなる装身具を初めて副葬する。3号墓には、第10主体部囲むように大小14基の木棺墓と土器棺墓からなる埋葬施設が営まれている。先行して造墓活動の始まっていた、左坂古墳群G支群でも、鉄製武器・工具類と装身具の副葬が始まり、造墓活動は後期中葉まで続く。中葉には、素環頭鉄刀や剣などの大形武器を副葬する埋葬施設も現れる。なお、両墳墓群の間には、乳幼児に土壇墓もしくは木棺墓を用いるか、土器棺墓を採用するかとの違いが認められる。後期後葉の様子は不明だが、後期末

	1	2	3	4	5	6	7	8
	弥生時代			古墳時代			飛鳥時代	奈良時代
	中期 後葉	後期		前期	中期	後期		
左坂古墳群								
左坂遺跡								
幾坂遺跡								
里ヶ谷横穴								
左坂横穴A								
左坂横穴B								
左坂南古墳群								
帯城墳墓群								
大田鼻横穴								
三坂神社墳墓群								
里山遺跡								
有明古墳群								
三坂神社裏古墳群								
有明横穴								

第10図 各遺跡の消長

に帯城墳墓群で造墓活動が行われている。装身具を副葬することではなく、鉄剣に限られた埋葬施設で副葬されている。B支群では、一つの台状墓の上に、2つのグループ、大小計23基の埋葬施設が営まれていた。

古墳時代前期 左坂古墳群では、古墳時代前期初頭から前期前葉にかけて、長方形墳丘に中心主体と1・2基の小児埋葬をセットにするG支群10～13号墳が営まれる。その後、左坂古墳群では、B支群を中心に造墓活動が中期前葉まで行われる。盟主的な2号墳には、箱形石棺のほか計4基の埋葬施設が営まれる。また、前期後葉から中葉にかけては、G支群の10号墳の尾根先端側に位置する2～9号墳が営まれている。1辺5～13mを測る旧来の台状墓の系譜をひくような1墳丘多埋葬の接続する墳墓である。左坂墳墓群に対して、有明8号墳は、巨大な中心埋葬と大小多数の土坑から構成される単独墳である。鉄製大形武器を所有する。一方、三坂神社裏古墳群でも、前期前葉から中期前葉に左坂古墳群同様の小規模な接続した古墳が営まれる。

古墳時代中期 その前半は、墳墓に供献・副葬される土器が少ない時期であり時期を特定する墳墓が少ない。左坂古墳群では、5世紀にはB支群に加えてC支群でも造墓活動が始まり、5世紀後半まで連続的に墳墓が築かれている。^(注3)

5世紀後半になると左坂古墳群では、D支群でも造墓活動は広がる。加えて、帯城墳墓群でも造墓活動が始まる。

古墳時代後期 6世紀になると左坂古墳群内では、D支群に加えてE・F支群でも造墓活動が行われている。左坂古墳群以外では、帯城古墳群に加えて、左坂南古墳群、有明古墳群でも造墓活動が始まり、造墓活動が多地点で行われていることがわかる。この時期になると、須恵器の蓋杯、高杯などが枕や副葬品として木棺内に持ち込まれている。しかしながら、6世紀後半になると、古墳の造営は一挙に終息に向かう。6世紀後半には有明古墳群でしか古墳の築造が認められ

ていない。一方、この頃中郡盆地内にも本格的な横穴式石室^(注4)を導入した桃谷古墳や新戸1号墳、西外1号墳が築かれ、馬具などの多くの副葬品が石室内から出土している。

飛鳥時代 7世紀には里ヶ谷横穴、大田鼻横穴が営まれる。最初は、横穴式石室の平面形を模したような、長方形プランの玄室をもつが、時期をおかずに、独特のフラスコ形へと変化する。7世紀前葉に、左坂横穴A支群で造墓活動が始まり、中葉には左坂横穴B支群と有明横穴で造墓活動が始まる。このうち、里ヶ谷横穴、左坂横穴A支群、左坂横穴B支群は補完関係にあり、同一造墓集団が営んだ可能性が高い。20基の横穴が見つかった大田鼻横穴及び左坂横穴B支群、有明横穴ともに、8世紀前葉に造墓活動を終える。副葬品は、大田鼻4・17号横穴で直刀が、左坂A4号横穴で鉄剣が出土している以外は、幾つかの横穴から刀子、鎌、鏝、耳環などしか出土しておらず貧弱である。しかしながら多数副葬された須恵器・土師器の中には、「厨」「奉」などの墨書土器が含まれており、官人などが被葬者に含まれている可能性が高い。

5. まとめにかえて

第10図に遺跡の消長を25年刻みで示してみた。範囲内に、幾坂遺跡、左坂遺跡、里山遺跡が知られるものの長期にわたる集落は認められず、これらの墳墓を営んだ集落の中心は、大宮売神社遺跡を含めその周辺にあったと考えるのが現状ではふさわしいのではないだろうか。

弥生時代は、帯城墳墓群で造墓活動が始まり、左坂墳墓群へ移り、一時的に首長が独立して三坂神社墳墓群を成立させるがその後、左坂墳墓群^(注5)での造墓が続き、最終的に帯城墳墓群で終焉すると思われる。

古墳時代になると、左坂古墳群で造墓活動が再開されるとともに、三坂神社裏古墳群で別の集団による造墓活動が始まる。前者は、継続して後期中頃まで墓域を拡大しながら造墓活動を展開する。後者は、同一丘陵の有明古墳群と一体化して造墓活動を行い、後期中頃を過ぎる頃に帯城墳墓群と有明古墳群で造墓活動を終了する。その後、30年ほどはこの地域では古墳の造営が認められない。左坂古墳群の北西に残される横穴式石室の石材を積みなおしたものではないかと言われる石明神古墳がそれを埋める横穴式石室墳なのであろうか。

飛鳥時代になると、横穴墓の造営が始まり奈良時代まで続く。造られた場所は1か所ではなく、左坂古墳群の丘陵裾部(里ヶ谷横穴、左坂横穴)と、帯城墳墓群の丘陵裾部(大田鼻横穴)の2か所である。後者は、7世紀後葉には、有明横穴の造営も開始し、8世紀前葉には文字の読める官人層を埋葬したことが考えられる。

以上、南北1km・東西1kmの範囲で、現代同様、墓づくりの盛んだった弥生時代中期から奈良時代までの造墓活動を追いかけてみた。今後、これを手がかりに集落集団と造墓集団の解明につながるよう研究を続けていきたい。(ひご・ひろゆき＝当調査研究センター調査課課長補佐)

注1 この地域の調査成果を、北に位置する大宮売神社との関わりをまとめた論考に次のものがある。

伊野近富2001「大宮売神社周辺遺跡群少考」『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注2 この祭祀遺跡を取り上げた最近の論考に次のものがある。

向井祐介2016「大宮売神社遺跡出土遺物の調査」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第2号 京都府立大学文学部歴史学科、向井祐介2018「第3章 大宮売神社所蔵の境内出土遺物」『舞鶴・京丹後地域の文化遺産』（京都府立大学文化遺産叢書第14集）京都府立大学文学部歴史学科、菱田哲郎2018「第5章 古墳時代祭祀遺跡から神社へー大宮売神社境内遺跡の意義ー」『舞鶴・京丹後地域の文化遺産』（京都府立大学文化遺産叢書第14集）京都府立大学文学部歴史学科

注3 丹後地域に、与謝野町蛭子山古墳、京丹後市網野銚子山古墳、同神明山古墳、同黒部銚子山古墳など100mを超える大型前方後円墳が築かれる4世紀後半から5世紀前半は、中小古墳には貧弱な副葬品しかないことが指摘されている。

岩松 保ほか「4. 谷奥古墳群発掘調査報告書」『京都府遺跡調査報告集』第128冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注4 丹後地域の導入期の横穴式石室には次のものなどがある。京丹後市久美浜町崩谷3号墳、京丹後市網野町離山古墳（以上6世紀前葉・MT15型式型式）。京丹後市久美浜町陵神社12号墳、与謝野町入谷西A1号墳、宮津市・与謝野町霧ヶ鼻6・7号墳（6世紀中葉・TK10型式）

注5 筆者は、後期前葉の集落を大宮売神社遺跡に求め、その周囲に3墳墓が営まれたと考える。

肥後弘幸2013「後期前葉の3墳墓の集落を求めて」『弥生研究の群像』大和弥生文化の会

関連報告書

石崎善久1993「(2)里ヶ谷横穴群」『京都府遺跡調査概報』第55冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

石崎善久1994「(1)左坂古墳群・横穴群」「(2)左坂横穴群(B支群)」『京都府遺跡調査概報』第60冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

石崎善久1995「8. 左坂古墳群」『京都府遺跡調査概報』第65冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

今田昇一1997『左坂南古墳群発掘調査概報』（京都府大宮町文化財調査報告第9集）大宮町教育委員会

今田昇一1998「左坂古墳群H支群・幾坂遺跡・久住遺跡」『平成8年度町内遺跡試掘調査概報』（大宮町文化財調査報告第13集）大宮町教育委員会

今田昇一・肥後弘幸ほか1998『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』大宮町教育委員会

今田昇一・肥後弘幸ほか『左坂古墳（墳墓）群G支群』（京都府大宮町文化財調査報告第20集）大宮町教育委員会

岡田晃治・岩月有行・森 正「4 帯城墳墓群発掘調査概報Ⅰ」『埋蔵文化財発掘調査概報』1985 京都府教育委員会

岡田晃治・肥後弘幸ほか1987「〔Ⅰ〕帯城墳墓群Ⅱ」『埋蔵文化財発掘調査概報』1987 京都府教育委員会

岡田晃治・羽淵賢良ほか1987「〔Ⅱ〕大田鼻横穴群」『埋蔵文化財発掘調査概報』1987 京都府教育委員会

竹原一彦1996「(3)左坂墳墓群・左坂古墳群・左坂横穴群」『京都府遺跡調査概報』第72冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

橋本勝行1997『左坂古墳群F支群平成8年度発掘調査概報』（京都府大宮町文化財調査報告書第11集）大宮町教育委員会

橋本勝行1999「左坂古墳群E・F支群、幾坂遺跡B地点発掘調査概要」『大宮町文化財調査報告』第16集 大宮町教育委員会

引原茂治・石崎善久1999「(1)左坂古墳群」『京都府遺跡調査概報』第89冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

肥後弘幸1991「〔Ⅰ〕幾坂遺跡、〔Ⅱ〕左坂古墳群」『埋蔵文化財発掘調査概報』1991 京都府教育委員会

肥後弘幸1992「〔Ⅲ〕左坂遺跡・左坂横穴」『埋蔵文化財発掘調査概報』1992 京都府教育委員会

肥後弘幸1993「〔Ⅳ〕左坂横穴」『埋蔵文化財発掘調査概報』1993 京都府教育委員会

肥後弘幸1994「〔Ⅴ〕左坂墳墓群（左坂古墳群G支群）」『埋蔵文化財発掘調査概報』1994 京都府教育委員会

増田孝彦1987「(1)有明古墳群・横穴群」『京都府遺跡調査概報』第24冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

副葬された京都の土人形

加藤 雄太

1. はじめに

寺町旧域や伏見城跡の発掘調査では近世に寺院が位置した地点から近世墓が見つかった。京都は江戸と比較して近世墓の事例数は少なく、重要な調査成果である。そしてその墓坑の中からは様々な副葬品が見つかった。そして、その中に土人形、ミニチュア土製品が含まれていることが調査成果から明らかになっている。本論では、この副葬品としての土人形に着目する。

2. 検討遺跡と土人形の出土した墓

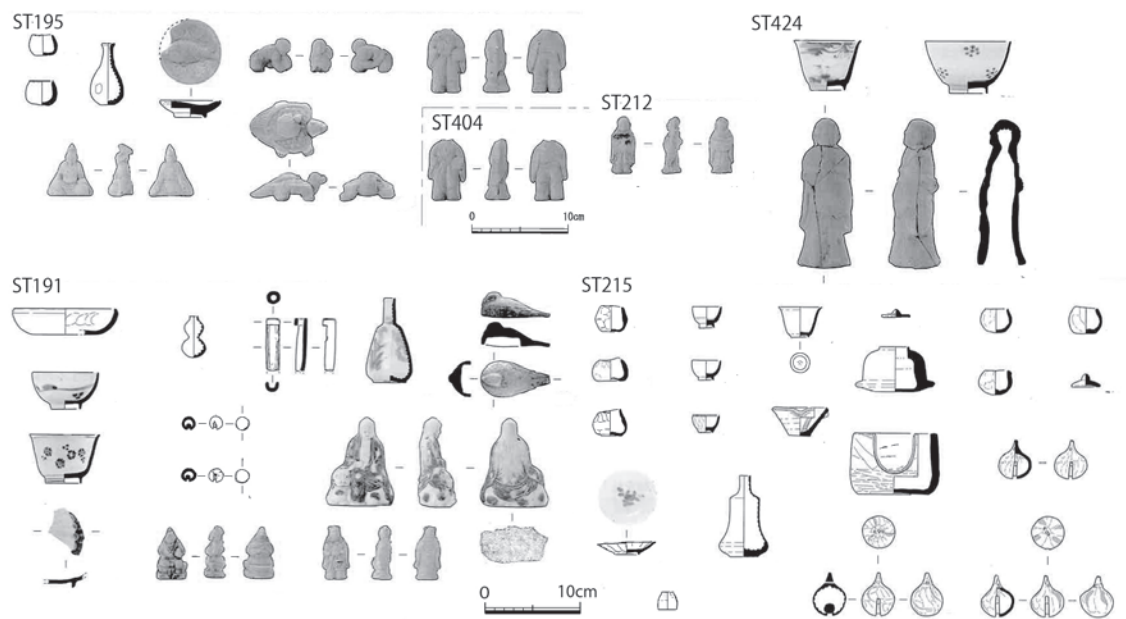
本論で主に扱う遺跡は、寺町旧域・法成寺跡(府埋セ2018)と伏見城跡(京埋研2007)である。寺町旧域は京都御所の東に位置し、天正18年(1590)に豊臣秀吉が京都に散在していた寺院を鴨川西岸に移転させて寺町を形成したことに由来する。この調査地には常念寺(浄土宗)が位置する。本論では宝永5(1708)年3月8日未明に発生した宝永の大火に罹災するまでの期間に営まれた墓域を対象とする。

寺町旧域の調査で土人形の副葬品が認められたのは5基である(付表1・第1図)。また多様なミニチュア土製品が供えられていた墓坑が1基確認されている。ST191は土葬墓で、古寛永通宝4枚、新寛永通宝3枚、天禧通寶1枚、開元通宝1枚、不明銭貨5枚、染付碗・皿、ミニチュア土製品、土人形が出土している。ST195は土葬墓で、古寛永通宝1枚、新寛永通宝1枚、不明銭貨4枚、土師器小壺、土人形、ミニチュア土製品が出土している。ST212は土葬墓で、土人形が出土している。ST215は土葬墓で、古寛永通宝が1枚、元祐通宝1枚、不明銭貨2枚、土師器小壺、土鈴、ミニチュア土製品、ガラス片、座金具が出土している。ST404は土葬墓で、土人形が出土

した。ST424は土葬墓で、染付碗、小杯、土人形が出土している。寺町旧域の資料は宝永の大火以降の段階の資料であり、土人形の時期区分としてもいずれもⅡ期段階である(加藤2022)。5基の墓坑はいずれも17世紀後半から18世紀初頭の年代に収まると考え

付表1 寺町旧域で土人形などの副葬を伴う墓

遺構番号	副葬品	時期
ST191	古寛永通宝4枚、新寛永通宝3枚、天禧通寶1枚、開元通宝1枚、不明銭貨5枚、染付碗・皿、ミニチュア土製品(ひょうたん)、土人形(恵比寿、唐子)、土鈴2、鳥形合子蓋、肥前色人形(文殊菩薩)	Ⅱ
ST195	古寛永通宝1枚、新寛永通宝1枚、不明銭貨4枚、土師器小壺(つぼつぼ)2、土人形(鯛皿、柿本人麻呂、相撲猿、親子亀、囃子方(太鼓))、ミニチュア土製品(長頸瓶)	Ⅱ
ST212	土人形(西行)	Ⅱ
ST215	古寛永通宝が1枚、元祐通宝1枚、不明銭貨2枚、土師器小壺6、土鈴3、ミニチュア土製品(碗4、皿1、すり鉢1、瓶2、蓋2、羽釜1、竈1)、ガラス片、座金具	Ⅱ
ST404	土人形(囃子方(太鼓))	Ⅱ
ST424	染付碗、小杯、土人形(西行)	Ⅱ



第1図 寺町旧域の土人形とミニチュア土製品
(京都府埋蔵文化財調査研究センター2018)



第2図 伏見人形の土製品(伏見城跡埋葬222出土)
(京都市埋蔵文化財研究所2007)

る。

伏見城跡は元禄元(1592)年に豊臣秀吉が指月山に城郭を構築したことにはじまる。指月の城は慶長の大地震(1596)にて倒壊するが、その後、指月山北側の木幡山に大規模な城郭を構築し、城下町が形成された。元和9(1623)年に政治的な役目を終えた伏見城は廃城となる。伏見城廃城後も伏見の町は大坂と京都を結ぶ交通の要所として栄え、伏見城跡の城下町西部にあたる調査地には真福寺という日蓮宗寺院が位置した。真福寺の造営がいつごろかは判然としないが、土壙から出土した一石五輪塔の墓碑銘に元和5(1619)年とある。この墓碑銘から元和の前後から造営が進められていたことがわかる。

伏見城跡の調査でミニチュア土製品などをふくめた土製品の副葬品が認められたのは、46基である。そのうち今回検討に加えたのは主に土人形が副葬された24基とし

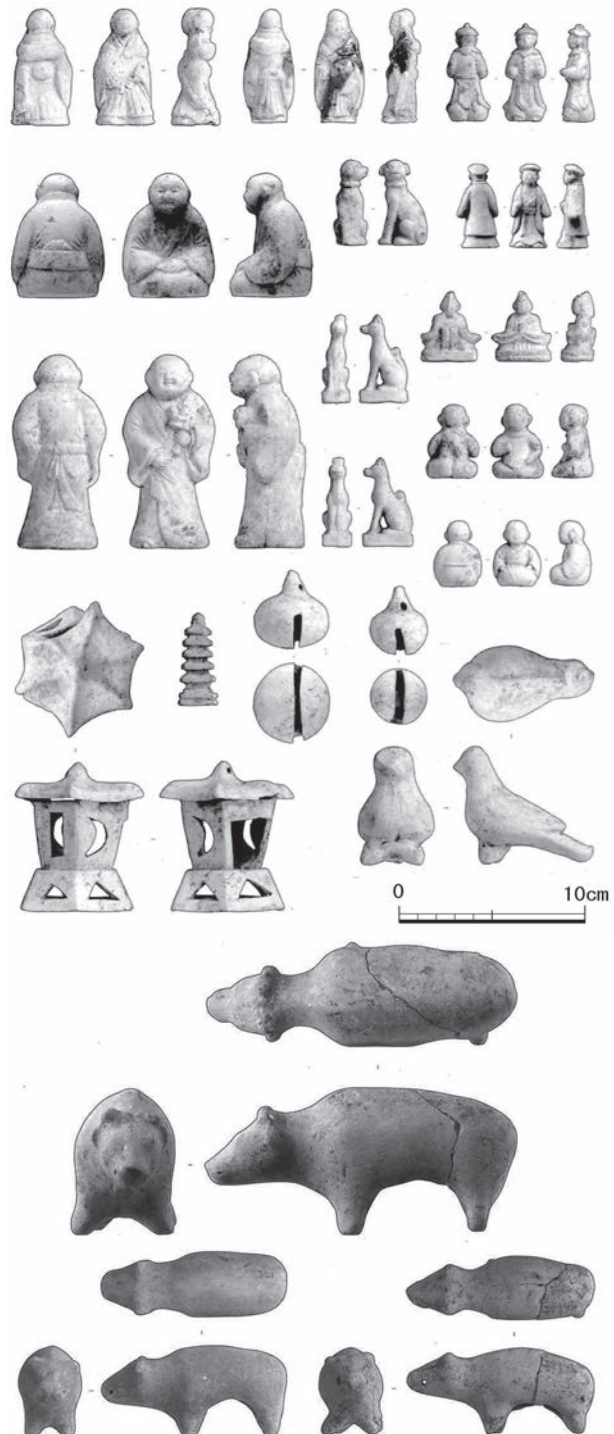
た。当調査では、2面に分けて墓域の調査がおこなわれているが、墓域の変遷を6期に分けて整理している。第1面で6・5期、第2面で4期から1期の墓地の調査が行われている。6期は幕末から昭和初期(19世紀中葉から20世紀前葉)、5期は江戸時代後期(19世紀前葉から中葉)、4期は江戸時代中期から後期(18世紀中葉から19世紀前葉)、3期は江戸時代中期(17世紀後葉から18世紀中葉)、2期は江戸時代前期から中期(17世紀中葉から後葉)、1期は江戸時代前期(17世紀前葉から中葉)である。埋葬施設は基本的に木棺の土葬墓である。この調査で出土したすべての資料を掲載することは叶わないが、3期から5期の一部の資料は表にして示した(付表2)。時期変遷に沿って土人形も変化しているが、1期と2期では土人形は出土していない。

今回検討対象とした資料の年代は判断ができるものに対しては拙稿の基準を表の端に記載した。また伏見城跡の資料は墓群ごとの時期が示されているので、そちらも掲載している。なお表の土人形のモチーフ名称に関しては主として報告書の記載に準拠している。

3. 副葬された土人形から見てくるもの

寺町旧域で検出された墓壙の総数は337基でそのうち土人形およびミニチュア土製品が確認できたのは1.7%の6基である。また伏見城跡では能芝勉が内訳を報告しており(能芝2008)、3期2.9%、4期4.6%、5期15.5%と土人形の副葬事例は、年代を下るにつれて増加する傾向にある。こうした傾向は一般的ではなかった土人形が普及し、副葬されるようになって行く過程を示していると考ええる。

伏見城跡の埋葬1153(第3図)は埋葬222(第2図)などと同様に土人形の数が多いが、ほかの墓では確認できない稲荷狐が1対出土している。稲荷狐の出土の多くは京都市内で邸内社のあった住居跡や稲荷社が位置した遺跡(同志社大学2019、京埋研2017)からが多く、



第3図 伏見人形の土製品2(伏見城跡埋葬1153出土)
(京都市埋蔵文化財研究所2007)

付表2 伏見城跡で土人形などの副葬を伴う墓

時期	遺構 番号	副 葬 品	性別年齢	段階
3期 17世紀 後葉～ 18世紀 中葉	埋葬 423	土人形（牛、鳥）、漆器皿、天蓋	成人男性	Ⅲ
	埋葬 2069	古寛永通宝5、寛永文銭、新寛永通宝、漆器椀、土人形（女性）、供養札	老年男性 壮年女性	Ⅳ
	埋葬 1632	土玉入りの土人形（猿面持ち）	成人	Ⅲ
4期 18世紀 中葉～ 19世紀 前葉	埋葬 1153	伊万里小碗、ミニチュア赤絵小碗2、白磁小碗、土人形（笠持ち2、唐人、頭巾人物、天神、童子座像、人物座像2、狛犬、狐2、獅子頭持、灯籠、五重塔、鳥、牛3）土鈴2、櫛	1歳児	Ⅳ
	埋葬 1123	寛永文銭1、新寛永通宝5、土人形（袴人物）	壮年女性	Ⅳ
	埋葬 1030	染付小碗2、土人形（袋担ぎ人物、犬）櫛	1歳児	Ⅳ
	埋葬 1635	土人形（頭巾人物座像、鳩笛、土玉入りの金魚、鳥）数珠、独楽	1歳児	Ⅴ
	埋葬 1558	土人形（家）	壮年女性	Ⅴ
	埋葬 1592	土玉入りの土人形（鳥）		
5期 19世紀 前葉～ 中葉	埋葬 248	泥面子（申・亥・せ・渦巻）	成人	Ⅴ
	埋葬 228	芥子面子	老年男性	Ⅳ
	埋葬 218	土師器花塩皿、鉢、土人形（母子立像土玉入り）、泥面子（玉）	3歳児	Ⅴ
	埋葬 222	土人形（犬2、船に乗る人物、袋抱え人物、袴座り童子、お内裏様、頭巾人物、鯛かかげ人物座像、猿回し、芥子面子2、鳥、お神輿、土玉が入っていた金魚、唐人、男性立像）		Ⅳ Ⅴ
	埋葬 237	古寛永通宝1、寛永文銭1、新寛永通宝1、不明寛永通宝2、祥符通宝1、京焼小碗、土人形（犬抱き、笠もち、男性立像、鳩笛、太鼓（土玉入り））	1歳児	Ⅴ
	埋葬 292	古寛永通宝1、新寛永通宝5、土人形（女性立像2、布袋、人物座像、袴童子）数珠、銅製金具	熟年男性	Ⅴ
	埋葬 223	布袋の土人形	熟年男性	Ⅴ
	埋葬 300	染付小碗、土人形（笠持ち、鈴持ち）煙管	熟年男女	Ⅳ
	埋葬 238	土人形（玉抱え、人物座像、袴童子、笠持ち）		Ⅴ
	埋葬 314	土人形（袴童子、頭巾人物座像、犬抱き2）	熟年男性	Ⅴ
	埋葬 243	古寛永通宝1、新寛永通宝4、不明1、染付皿、蕎麦猪口、土人形（女性立像）	壮年男性 成人	Ⅴ
	埋葬 467	古寛永通宝2、新寛永通宝3、土人形（亀）	小児	Ⅳ
	埋葬 232	土人形（騎馬人物像）	老年女性	Ⅴ
	埋葬 627	白磁紅皿、土師器鉢、ミニチュア竈セット、蓋付き片口、小鉢、小瓶	4歳児	Ⅴ
	埋葬 356	染付小碗・蓋、軟質施釉陶器の徳利、ミニチュア碗、土玉入りの土人形（鳥）	1歳児	Ⅳ

墓に副葬されている例もあまりないと考えられる。稻荷狐の本来的ではない用途で求められた資料なのかもしれない。

寺町旧域は事例が少ないながらも17世紀後半から18世紀初頭段階の豊富な副葬品を有しており、なかでも肥前の色絵磁器人形が共伴するなど経済的に豊かな被葬者像をうかがわせる。なお、同じ寺町旧域であっても寺町旧域・御土居跡の調査(京埋研2016)では17世紀を通して土人形が副葬されている事例は確認できないため、寺院によっても差があり、伏見城跡でも事例がないことから17世紀から18世紀初頭段階での土人形の副葬はあまり一般ではなかったと考えられる。

また、被葬者の年齢、性別で見たときに伏見城跡の3期段階(17世紀後葉～18世紀中葉)では成人のみに副葬されているが、18世紀後半以降になると未成年にも副葬されるようになる。もともと成人向けに手向けられていたものが未成年の墓にも広がるようになるのかもしれない。

4. 土人形のモチーフの変化について

個別のモチーフについて言及するのは別稿に譲ることとし、副葬品全体としてみたときにどのようなことが考えられるのか。

まず副葬品として出土した土人形は、土でできた人物や動物などを模した製品であり、一般に「人形」と称している資料である。この「人形」について木立は、偶像、明器、形代、にんぎょうの別があると指摘しており、人々の願いをくみ取り、癒す道具としての役割をもって偶像から明器、形代、にんぎょうと歴史的な変遷を経てきているという(木立2008)。そして、こうした歴史的な積み重ねがあるため、最後に出現した玩具としての「にんぎょう」には偶像・明器・形代の役割を果たすものが含まれていることを指摘している。本論にて取り扱う土人形は、木立の論に寄って立てば、明器としての役目を付与された玩具としての「にんぎょう」ということになるだろう。

また、東京大学の土人形資料を分析した小林は、東大編年の年代観に沿って人形の変遷を検討し、Ⅲ期(1650-1670)からⅣ期(1680-1700)に俗信に関わる神仏や動物を中心とする初期、Ⅴ期(1710-1740)からⅥ期(1750-1770)の風俗に題材を求める中期、Ⅶ期(1780-1790)以降の招福を題材とする後期の3つの段階を設定している(小林2012)。小林の設定した初期は、拙論の編年ではおおよそⅠ-Ⅱ期にあたり、中期はⅢ-Ⅳ期、後期はⅤ期にあたる。たしかに副葬品を概観すると、寺町旧域の資料は西行や恵比寿、鯛皿、相撲猿など俗信的で神仏に関わるものが多いように見える。そして伏見城跡では、バリエーションが増加し、様々な風俗物や招福物がモチーフとして選択されており、変化してきていることが看取される。

土人形が副葬されてきたというのは、歴史的な変遷を経て人形に与えられてきた偶像、明器、形代、にんぎょうの役割の別の中で、これまでに「にんぎょう」としての役割から、内在していた弔う明器としての役割が表出したに過ぎないのだろう。古い段階で獲得した役割が、受け継がれてきている土人形は、それでありながら近世の人形として信仰や風俗、招福を新たな側面として歴史を重ねていく中で具体化して提供してきた。その時代時代に、明器としての役割が与えられる土人形は、各時代のバリエーションに種類の幅を限られながらも、求められる役割を全うした。そのため、18世紀初頭の寺町旧域では信仰に関わる土人形が多く出土し、伏見城跡では18世紀後半の風俗や節句的なものからはじまり19世紀には招福物が加わりバリエーションが増加していく状況がみられる。近世の土人形は、その多くが明器として作られたのではなく、その時々受け入れられていた信仰や風俗や招福物の姿を形にしたもので、これを受け取った側が別に明器としての役割を見出したのだ。

また、17世紀後半から18世紀初頭段階で副葬例が少ないのは、そもそもの土人形の流通に偏り

がある可能性がある。この段階で信仰に関わるものが多いということは、信仰に関連する「もの」を求める層にしか需要を喚起できていないということも考えることができる。寺町旧域の豊富な副葬品は、土人形がその当時は比較的豊かな社会層で受け入れられていたもので、土人形がある程度の奢侈品であった可能性を考えさせてくれる。時代が変わり、社会全般が豊かになり、経済的にも文化的にも土人形が風俗や節句、招福を表現することなどで多くの層にアピールすることができるようになると一般に広く普及するようになり、その結果、副葬品として土人形が選択されるパターンが増えたのではないか。土人形は、その過去から「人形」が有していた偶像、明器、形代といった属性を内包しながら、身近な信仰的な側面に加えて、風俗、招福といった様々な属性を獲得していくにつれて、当時の人々の多様なメンタリティに寄り添い広く受け入れられていったのであろう。

5. まとめ

寺町旧域と伏見城跡の事例を通して、副葬された土人形の意義について雑駁ではあるものの、考えるところを記した。あくまで仮説や推論を重ねたものであり、今後出土事例が増加し、土人形について明らかにされていく要素が増えていけば、より複雑な土人形を取り巻く状況が明らかになっていくと考える。

(かとう・ゆうた＝当調査研究センター調査課主任)

参考文献

- 能芝 勉2008「京域 江戸時代の土製品」『関西近世考古学研究16 土人形が見た近世社会』関西近世考古学研究会
- (公財)京都市埋蔵文化財研究所2007『伏見城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-17
- (公財)京都市埋蔵文化財研究所2016『寺町旧域・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-16
- (公財)京都市埋蔵文化財研究所2017『平安京左京五条二坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-8
- (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2018『寺町旧域・法成寺跡』京都府遺跡調査報告集 第172冊
- 小林照子2012「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の年代的推移について」『東京大学構内遺跡調査研究年報8 2009・2010年度』東京大学埋蔵文化財調査室
- 木立雅朗2008「考古学から見た土人形の出現と展開」『土人形が見た近世社会』関西近世考古学研究16 関西近世考古学研究会
- 加藤雄太2022「近世京都の土人形の基礎的研究」『日本考古学』第54号 日本考古学協会
- 同志社大学歴史資料館2019『常盤井殿町遺跡・公家町遺跡・相国寺旧境内発掘調査報告書2018』(同志社大学歴史資料館調査研究報告第15集)

1. カンジョガキ遺跡第5次(C地区)

所在地 京丹後市大宮町周枳小字トノゴ市

調査期間 令和6年4月24日～令和6年7月12日

調査面積 1,040㎡

はじめに 中郡盆地南東部、竹野川右岸の丘陵部及び谷部に位置する。一般国道312号大宮峰山道路事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて調査を実施した。対象となったのは、北東側丘陵裾部(C地区)である。過去4次にわたる調査で、縄文時代の流路、弥生時代中期から平安時代後期の遺物を包含する自然流路、古墳時代中期の削平された古墳、古墳時代後期末から飛鳥時代の竪穴建物・掘立柱建物・溝、7世紀初頭から8世紀前半の5基の横穴墓を確認している。横穴墓からは、焼骨が出土しており、丹後地域で火葬の風習が早くから取り入れられたことが判明した。



調査概要 調査地は、階段状の畑の開墾と圃場整備に伴う農業用水路の設置による削平を受けていた。検出した遺構は、竪穴建物、掘立柱建物、溝などである。竪穴建物は、3分の1から4分の1程度の残存状況であるが、平面方形で一辺5～6m前後の規模をもち、いずれも周壁溝を有する。掘立柱建物とした柱穴は、斜面を加工して設けられていることや、周壁溝が認められないことから掘立柱建物としたが、竪穴建物の柱穴である可能性も残る。溝は丘陵斜面に設けられており、弧状で北西端が削平されていたが、幅0.4～1m、長さ15m、深さ0.25～0.45mを検出した。溝内からは、土師器の杯・壺・甕、竈片などを中心に多くの遺物が出土した。斜面に位置する住居の高位側に設けられた排水溝の可能性もあるが、性格等は不明である。

まとめ C地区では、A・B地区の調査で見つかった横穴墓の築造時期に相当する土器が多数出土しており、集落と墓の関係を知るうえで重要な調査となった。また、A・B地区では包含層中より鉄滓やフイゴ羽口が出土しており、今回の調査では金床石も出土したことから、周辺に鍛冶工房が存在していた可能性が高まった。遺跡の立地する狭長な谷部は、中郡盆地周辺に数多く存在し、一定の可耕地を提供しているが、標高差が大きく竹野川の水を利用した水田耕作が難しい。こうした地理条件では谷部を流れる小河川の水利が重要な役目を果たすため、水利調整できる谷部を生産の場とし、丘陵裾部を居住域にしたものと思われる。(増田孝彦)

2. 東風ヶ奥遺跡第2次

所在地 京丹後市大宮町河辺小字東風ヶ奥

調査期間 令和6年10月1日～令和6年11月15日

調査面積 330㎡

はじめに 東風ヶ奥遺跡は竹野川の支流である大谷川によって形成された河岸段丘上に位置する。これまでに墓地造成に伴う調査が京丹後市教育委員会によって行われており、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が確認されている。今回の調査は、一般国道312号大宮峰山道路事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて調査を実施した。

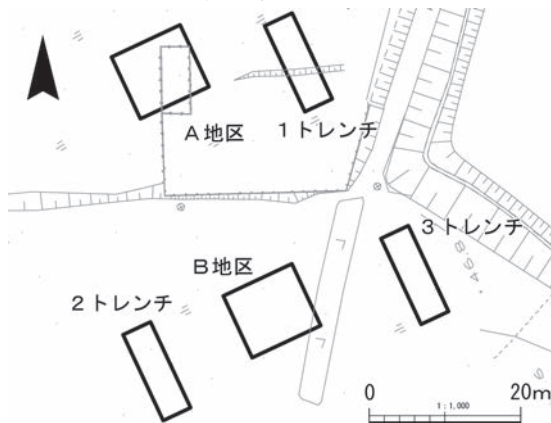
調査概要 調査地は大谷川左岸の河岸段丘上に位置する。調査は橋脚予定地に本調査区を2地点(A・B地区)と調整池予定地に小規模調査区を3地点(1～3トレンチ)を設定した。

①A地区 大谷川の浸食によって形成された斜面地に近現代の暗渠や、それに伴う土坑列を確認したが、顕著な遺構は確認できなかった。二次包含層から古墳時代後期の須恵器と土師器、古代・中世の土師器が出土した。

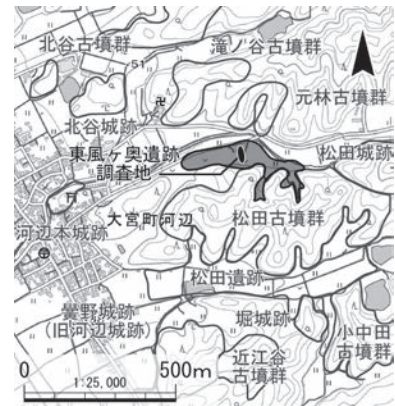
②B地区 丘陵側から流入した粗い砂層の上層に土壌化した細かい砂層が堆積していた。上層からは黒色土器が出土し、下層からは遺存率の高い古墳時代中期の土師器高杯・丸底壺・甕が出土したが、安定的な遺構面は確認できず、顕著な遺構は検出できなかった。

③1トレンチ A地区と同様の堆積状況で、顕著な遺構は確認できなかった。

④2トレンチ B地区と同様の堆積状況で、二次包含層から古墳時代後期の須恵器等が出土したが、顕著な遺構は確認できなかった。



第2図 調査区配置図



第1図 調査地位置図
(国土地理院1/25,000)

⑤3トレンチ B地区と同様の堆積状況で、下層からはほぼ完形の古墳時代中期の土師器甕が出土した。不安定な砂層上に土坑を数基検出した。

まとめ 明確な遺構は検出できなかったが、包含層出土遺物から、周辺に古墳時代や中世の遺構が存在する可能性が判明した。丹後地域では丘陵裾部斜面地を段状に加工して居住域とする例もあり、こうした遺構が周辺に存在することが予想される。
(名村威彦)

こちゅうだ 3. 小中田遺跡第2次

所在地 京丹後市大宮町河辺地先
調査期間 令和6年5月7日～令和6年11月25日
調査面積 3,900㎡

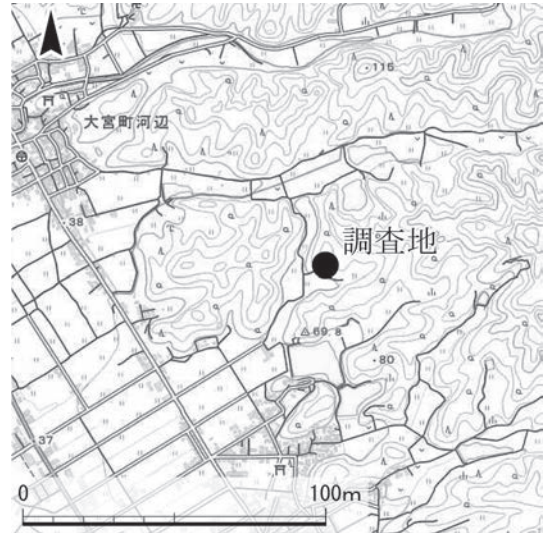
はじめに 小中田遺跡は竹野川の中流域の右岸に位置する縄文時代から近現代にかけての複合遺跡である。本調査区の南側(B地区)は昨年度一部発掘調査が実施されており、後述する竪穴建物や自然形成された落ち込み、流路などが検出された。

今回の調査は、一般国道312号大宮峰山道路事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施したものである。

調査概要 前年度調査したB地区と新たにその北側の調査区(C地区)を調査対象とした。調査区全体は南側に向かって緩やかに傾斜する谷地形にあり、東側及び西側も調査区中央に向かって緩やかに傾斜する。また、調査区全体は近世の水田耕作などの土地開発に伴って段々畑状に掘削されており、北側の遺構の遺存状態は良好ではなかったが、調査の結果、太平洋戦争中の飛行機の格納庫、近世の水田跡、中世墓、古代の建物跡・柱穴・土坑・流路、縄文時代の流路を確認した。B地区で確認した古墳時代末～飛鳥時代の土器と木製品が出土した遺構は、湧水によって土砂滑りを起こしてできた自然の落ち込みと判断した。

竪穴建物は谷の南西側斜面で3基確認した。そのうち2基は重複しており、建て替えられた痕跡が確認できた。重複している建物の床からL字形かまど(青野型かまど)の一部が見つかった。また、建物は全体の3分の1ほどが後世の掘削によって失われている。床面と周壁溝内から土器が出土した。

谷部の北側には湧水点があり、湧き水は飛鳥時代には谷の中央部に形成された流路(幅約0.7～1m・検出長15m)を流れていたようである。流路からは桃の種をはじめ、燃えさしなどの木製品、飛鳥時代の完形の椀や甕、移動式カマドが出土した。



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 峰山)



写真1 調査地全景



写真2 竈をもつ堅穴建物



写真3 飛鳥時代の流路での桃の種出土状況



写真4 自然の落ち込みでの土器出土状況

谷部北部には縄文時代後晩期の土器が少量出土した土坑がある。その土坑から延びる形で南側の斜面に向かって、ある段階で雨水による流路が形成されたと考えられる。その流路の底からも縄文土器が出土した。

調査区南東側では、古墳時代後期～平安時代の遺物が含まれる自然の落ち込みを確認した。落ち込みは、谷によって形成された緩やかな斜面の土砂が地下水によってずり落ちることによって形成されていた。飛鳥時代の段階で窪みに土器や木製品が捨てられ、さらに土砂がたまる。その上に平安時代の土器や木製品が廃棄され、その後に埋没した状況がみてとれた。

中世では戦国時代の木棺墓が2基見つかっている。1基は、棺の底板が遺存しており、底板の上から古銭が出土した。

上記したように調査区全体は近世の水田開発によって、全体的に段々畑状に削られている。谷部の東側では、水田を区画する人為的な溝や小穴が検出され、その中からは中世の土器が中心に出土する。

まとめ 今回の調査では、谷部で縄文時代と飛鳥時代の遺構と遺物、平安時代の遺物、調査区全域で水田形成時に伴う近世の遺物を確認した。調査区中央の谷の南西斜面で複数の建物群を、谷部で流路を確認し

た。谷は長い時間をかけて雨水が流れ込む激しい流れと、湧水のための緩やかな流れを繰り返すことによって、自然堆積層を形成している。

飛鳥時代以降に土地利用が始まる本遺跡は、丹後地域における集落の立地や水の扱いを考える上で、土地利用と人々の営みが垣間見える遺跡である。

(新美祥人夢)

4. 松田古墳群(松田墳墓群)第2次

所在地 京丹後市大宮町河辺地先

調査期間 令和6年5月1日～令和6年11月14日

調査面積 890㎡

はじめに 松田古墳群(松田墳墓群)は、丹後半島最長の河川である竹野川の支流であり、大宮町河辺を西に流れる大谷川左岸の丘陵上に位置する。今回の発掘調査は、一般国道312号大宮峰山道路事業に伴い、国土交通省福知山河川国道事務所からの依頼を受けて実施した。

調査概要 松田古墳群(松田墳墓群)は、弥生時代から古墳時代にかけて造られた墳墓や古墳が59基確認されており、墳墓や古墳のまとまりによってA～Eの5つの支群に分けられている。今回は、昨年度に表土除去を済ませていたB支群13・14・20・21号墓に加えてB支群9～12号墳の発掘調査を実施した。各遺構の詳細は本誌詳報に記載している。

調査の結果、尾根下方13・14・20・21号墓が弥生時代末期の墳墓、尾根上方の9～12号墳が古墳時代初頭の方墳であることが判明した。13・14号墓間の斜面裾や13・21号墓間に墓域を区画する溝が掘られる。頂部平坦面の墓壙の数は昨年度調査を実施した15・16号墓ほどは密集せず2～6基である。14・21号墓の墓壙は先行する墓壙と一部を重ねて営まれているが、13・20号墓では主軸をそろえるが墓壙を互いに重複することなく営んでいた。いずれの墳墓も木棺形態は舟底状木棺が主体を占める。

9～12号墳は墳丘を削り出して平坦面を造る古墳時代初頭の方墳である。9号墳南側には丘陵尾根を切断する溝が掘られ、溝の底部から古墳時代初頭の器台が出土した。

12号墳は墳丘の南北に掘られた尾根に直交する溝によって墓域が区画され、墳頂平坦面に設けた墓壙から鉄剣、鏝、刀子が出土した。

まとめ 今回の調査で松田古墳群(松田墳墓群)が弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて継続的に造られたことが明らかとなった。一つの平坦面に複数の埋葬施設が造られる弥生時代の台状墓から、一つの古墳に単一の埋葬施設を造る古墳時代の方墳へと変化していく様子が見られ、弥生時代から古墳時代の葬送儀礼の変化を解明する上で貴重な知見を得た。

(菅 博絵)



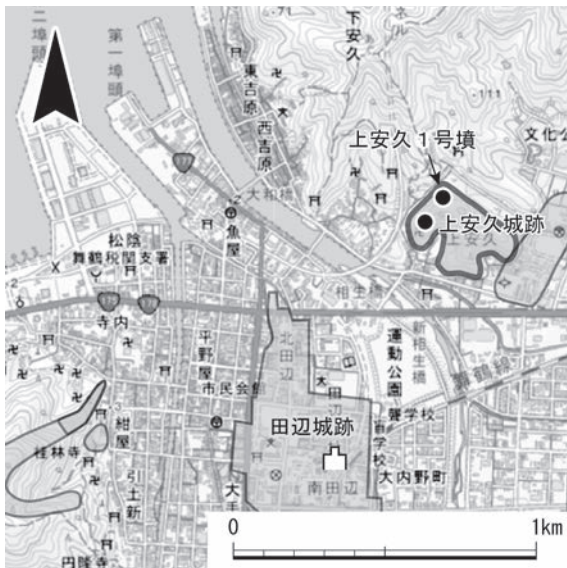
調査地位置図(国土地理院 1/25,000)

5. 上安久城跡第4次・上安久古墳群第2次

所在地 舞鶴市字上安久

調査期間 令和6年8月6日～令和6年12月17日

調査面積 1,100㎡



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 西舞鶴)

はじめに 上安久城跡・上安久古墳群は、西舞鶴の伊佐津川右岸の河口付近の独立丘陵上に所在する。丘陵の西側に上安久古墳群が分布するほか、付近には「陣取」の小字名が残り、中世に安久氏が築造したと伝える上安久城跡が遺跡地図に登録されていた。既往の調査では、丘陵北西斜面で平安時代末から鎌倉時代初頭頃の石組遺構等を、南西側に所在した独立丘陵上で曲輪の可能性のある平坦面5か所を確認している。今回は令和5年度の小規模調査を拡張した本調査と、上安久1号墳を中心とする新規の小規模調査を行った。

調査概要 調査箇所は丘陵尾根上から裾付近に点在する。尾根上では表土直下で地山の岩盤を検出した。斜面と裾付近では表土と地山の間に少量の流土が堆積していたが、1号墳以外には明確な遺構は認められなかった。

1号墳は、丘陵北西部の最高所付近に位置しており、南側に広がる伊佐津川流域を一望できると考える。墳頂部で、埋葬施設の可能性のある東西方向に長軸をとる土色変化を確認した。また、墳丘での部分的な調査の結果、岩盤と墳丘盛土あるいは流土の境界を検出した。段築・葺石・埴輪は確認できない。表土及び流土から古墳時代中期前半～中頃の複数の須恵器片のほか土師器片・陶器片・近代瓦片が極少量出土した。須恵器片は墳頂部・斜面・裾付近の広範囲から出土しており、細片であることから墳頂部での祭祀行為に伴い人為的に破碎された可能性がある。次年度に全面調査を行う予定である。

まとめ 令和5・6年度調査によって、丘陵上には1号墳と3号墳の2基の古墳以外に明確な遺構は認められないことが判明した。1号墳については、伊佐津川流域では切山古墳(前期後半頃・組合せ式石棺)に後続する有力古墳となる可能性があり、次年度の調査によって、当該地域の古墳の動態を考える上で重要な成果が得られるものと期待される。(荒木瀬奈)

6. 稚児野遺跡第6次

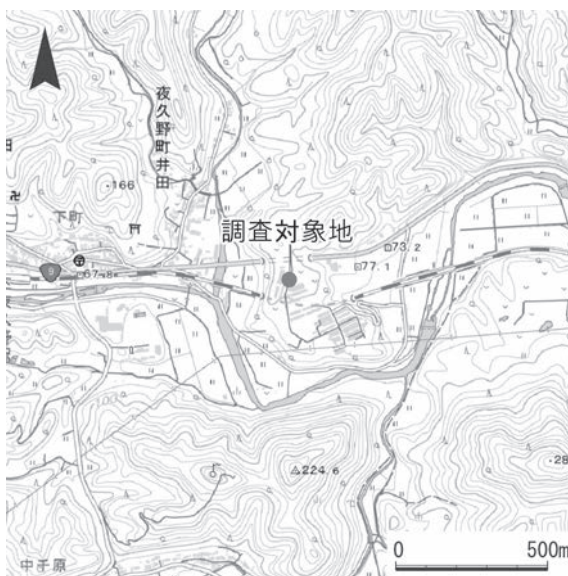
所在地 福知山市夜久野町井田地先

調査期間 令和6年5月8日～令和6年8月29日

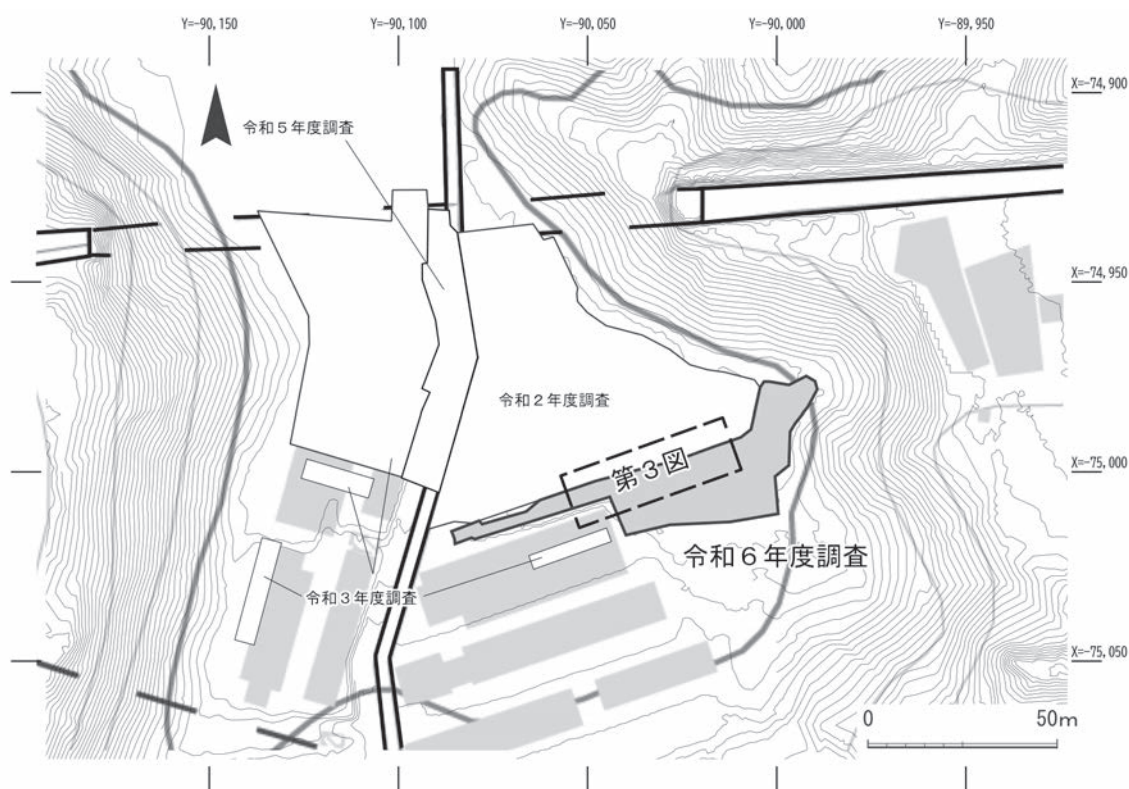
調査面積 1,300㎡

はじめに 稚児野遺跡は後期旧石器時代から平安時代の散布地で知られる。夜久野高原より東流する牧川が畑川との合流点を見下ろす、舌状に突き出した標高約100mの台地に位置する。令和2年度に、石器群が広く分布することを確認した第3次調査の南側が調査対象地となる。今回の調査は、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した。なお、同事業による発掘調査は5回目である。

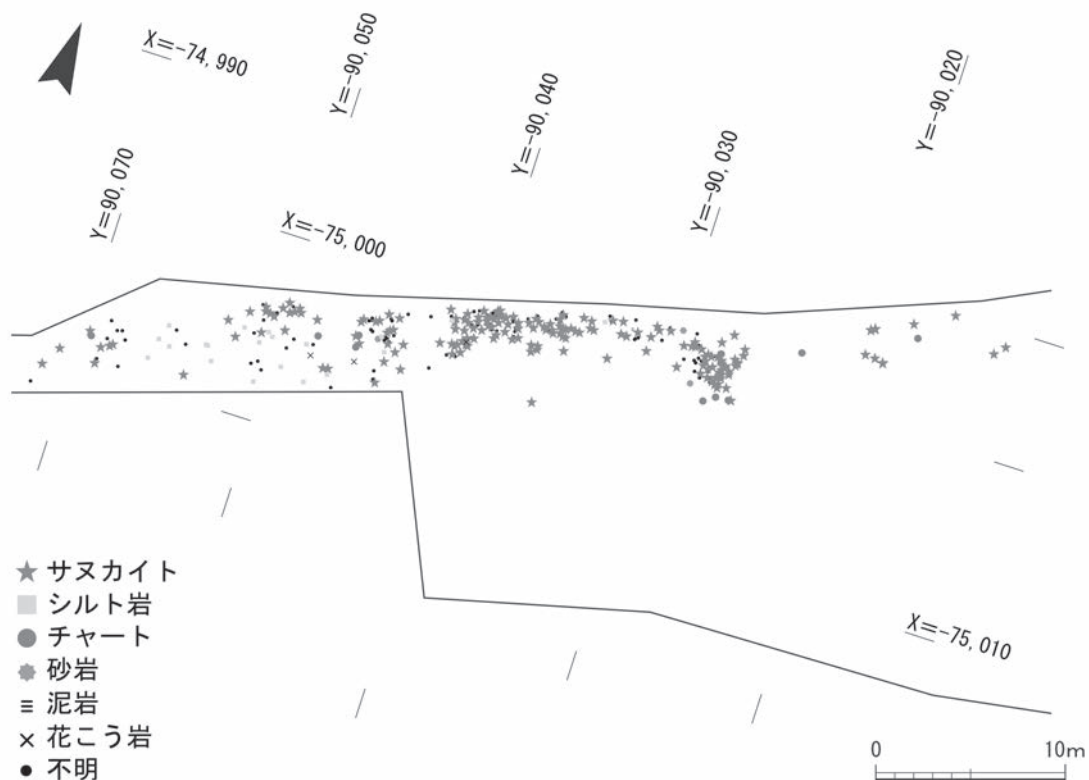
調査概要 調査は、重機で近現代の盛り土や耕作土(クロボク土)を除去したのち、人力による精査を実施した。その結果、調査区北半部か



第1図 調査位置図(国土地理院 1/25,000)



第2図 調査区配置図



第3図 石器出土状況図

ら後期旧石器時代前半期に属する、サヌカイト、シルト岩、チャートなどがもちいられた石器が379点出土した。層位は、耕作土および盛り土、にぶい黄褐色土(始良T n 火山灰を含む)、黄褐色極細砂である。石器は、黄褐色極細砂の上面からよく出土し、既往調査の出土状況と共通することを確認した。石器出土層準より上位の堆積物は、第2次調査がおこなわれた平坦面から南に向かうにしたがって、地形が緩やかに傾斜するため、比較的薄いことを確認した。なお、石器の集中するブロックは、第3次調査の石器集中部と連続するように調査地の北側に3つ分布する。

まとめ 今回の調査では、出土点数は少ないながらも、3つの石器集中部を確認することができた。石器集中部の間には空閑地が認められることから、石器製作あるいは廃棄の場を意識していたことを指摘できる。これらの集中部は北側にまとめ、第3次調査で検出した石器集中部の南限にあたることから、本調査により、稚児野遺跡における後期旧石器前半期の石器群の全容を解明する重要な成果を得ることができた。第3次調査の石器集中部と今年度に検出した石器集中部の関係性については、現在進めている整理作業による石器の接合による検証などから検討を行っている。

(面 将道)

7. 宮ノ口遺跡第6次

所在地 南丹市園部町上木崎町地内

調査期間 令和6年11月13日～令和6年11月22日

調査面積 60㎡

はじめに 今回の調査は、南丹市が実施する試掘確認調査の支援業務として受託したものである。宮ノ口遺跡は南丹市園部町上木崎町に位置する遺跡で、北に山地が広がり、南には園部川が流れる。周囲には、今林遺跡といった弥生時代の遺跡や古墳時代から奈良時代にかけての園部窯跡群壺ノ谷支群などが所在している。宮ノ口遺跡はこれまで計5回の発掘調査が実施され、周知の埋蔵文化財包蔵地内の北東部では弥生時代の溝などが検出されている。また、南西部では奈良時代の須恵器・土師器を伴う総柱建物を検出されており、奈良時代には役所や寺院に関連する倉庫群をもつ遺跡として評価されている。

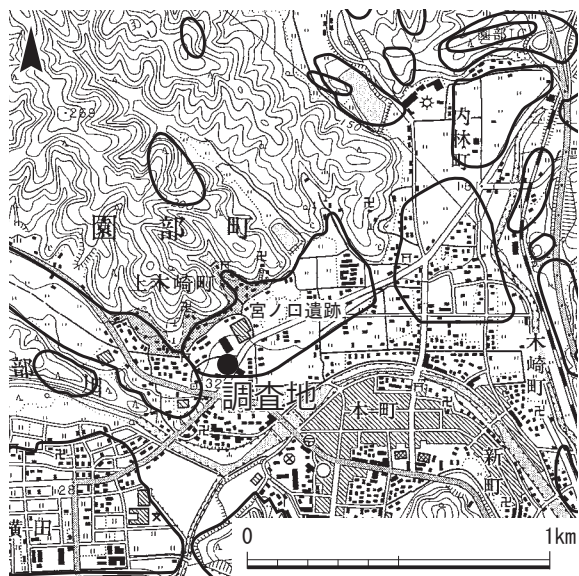
調査概要 奈良時代にかけての建物跡の検出された第1次調査区より南側60m付近に計3か所のトレンチを設定した。

1～3トレンチでは、表土直下で約0.7～1.0mの範囲は現代の造成によって盛られた層があり、これらを除去後、中世から近世にかけての遺物包含層、古代から中世にかけての遺物を含む遺物包含層が0.2mほど堆積していることを確認した。さらに下層からは遺物を含まない地山面を検出した。地山面の精査を実施したところ、南西方向に延びる自然流路を検出したが、流路内から遺物を確認できなかった。調査区も狭く、全容の把握が困難なため、時期等は不明である。

まとめ 今回の調査では、地山面で遺構を確認できなかったが、出土遺物については、奈良時代から中世にかけての土器類が各トレンチから出土した。また、今回の検出した地山面は標高約130mを測り、第1・2次調査の遺構検出面と比べて約2m低くなっていることから第1・2次調査区周辺が微高地状に高まった地形を呈し、遺構が展開していたことが想定でき、今回の調査区に遺物が流れ込み、遺物包含層を形成したものと考えられる。

遺構の広がりを考えるうえで重要な成果を得たといえよう。

(北山大熙)



調査位置図(国土地理院 1/25,000 園部)

8. 余部遺跡第21次

所在地 亀岡市余部町塞又・久下佐伯

調査期間 令和6年5月7日～令和6年12月6日

調査面積 1,890㎡



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 亀岡)

はじめに 余部遺跡は、亀岡盆地を南北に流れる大堰川右岸にあり、大堰川と支流の曾我谷川が形成する河岸段丘上に位置する。縄文時代晩期の石器が出土したことをはじめとして、弥生時代中期の集落や古墳時代中期～後期の集落、さらには古代～中世にかけての溝や柱穴が検出されており、縄文時代晩期から中世に至るまで断続的ではあるが集落があったことが明らかとなっている。

調査は、国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」にかかわる発掘調査として、近畿農政局の依頼を受け実施した。

調査概要 今回の調査地は2地点で調査を実施した。面的調査である調査1区(1)は、平成30年度・令和元年の第14・16次調査地と令和5年度の調査地の近隣地である。小規模調査である調査2区(2)は、亀岡市立吉川小学校グラウンドの東側に当たる。

調査1区では、遺物包含層と調査区の中央に南西から北東に流れる流路跡を検出した。遺物包含層内から、須恵器甕や杯、土師器皿、瓦器椀、陶磁器などの土器類の小片のほかに、古代の丸瓦片が少量出土した。流路の最大幅は約1.5m、深さは検出面から最深で約0.2mである。流路内からは弥生土器壺、土師器皿、須恵器杯・甕などが同一層から著しく磨滅した状態で出土した。

また、流路の南端部は途切れた状態であり、後世に削平を受けて消失したと考えられる。このほかにピットや土坑を検出したが、遺物が含まれておらず、集落に関連するような遺構ではないと判断した。

調査2区は、対象地内に小規模調査トレンチを6か所を設定して調査した。床土直下で安定地盤を確認して、近現代の耕作溝などを検出したが、それ以外顕著な遺構は確認できなかった。

(村田和弘)

9. 法貴古墳群第3次

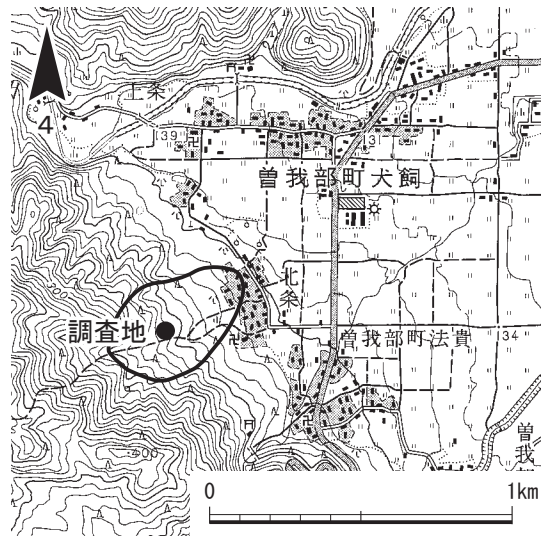
所在地 亀岡市曾我部町法貴

調査期間 令和6年5月8日～令和6年12月15日

調査面積 1,250㎡

はじめに 法貴古墳群は亀岡市曾我部町犬飼・法貴に所在し、亀岡盆地南西の霊仙ヶ岳の裾部に立地している。令和4年度に調査に着手し、継続して実施している。A地区の調査は昨年度完了し、今年度はB地区の調査を実施した。調査は国道423号(法貴バイパス)防災・安全交付金事業に伴い、京都府南丹土木事務所の依頼を受けて実施した。

調査の概要 法貴古墳群24～30・33・34・61・63号墳の調査を実施した。すべて、墳丘および横穴式石室の解体をおこなった。特記すべき古墳として、24・25・26・29号墳を報告する。24号墳は一辺10m程度の方墳である。墳丘は2段築盛の可



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 法貴)

能性がある。墳丘の崩落が著しいが、右側壁側墳丘下段には石垣状に石材が3段積み、外護列石が構築される。墳丘上段には外護列石は認められないが、拳大よりやや大きな石材を積み重ねた墳丘内列石を確認した。25号墳は最高所に位置する古墳である。左側壁側墳丘には外護列石が構築される。墳丘上部は後世の攪乱によって残存していないが、24号墳同様2段築盛の方墳であった可能性がある。石室内の閉塞部周辺から、須恵器杯・平瓶など副葬品がまとまって出土し、玄室部では礫床を検出した。また古墳前面部には平坦面を検出した。これは急峻な斜面に構築された古墳であるため、全面に平坦部を造成したものと考えられる。26号墳の調査では、墳丘解体時に土師器甕がまとまって墳丘内から出土した。甕周辺には土坑状のくぼみが確認できることから、墳丘築造にかかわる祭祀行為に伴うと判断される。29号墳は、調査前は全壊状態と推定していたが、地山と考えていた赤褐色土を除去した結果、石室が残存していた。石室内からは、須恵器甕・提瓶、鉄鏃などが出土した。玄室部では礫床と棺台と考えられる石材を検出した。

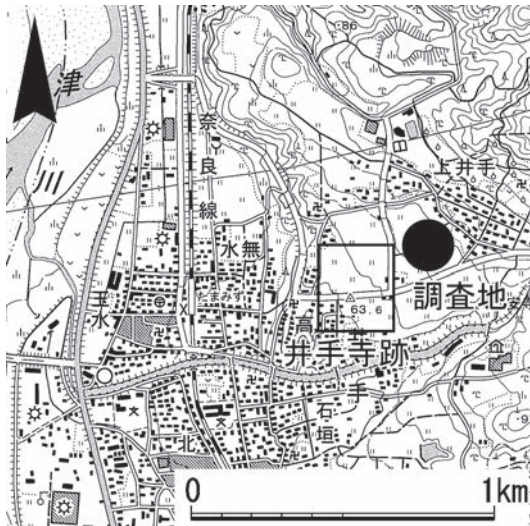
まとめ 今回の調査では、古墳の完全解体をすべての古墳で実施した。結果、古墳築造以前に造成をしていることや、地山に含まれる自然石を除去しないこと、墳丘内祭祀の実施などいくつかの古墳築造に関わる所見を得ることができた。また、24・25号墳は方墳であることやほかの古墳とは異なり、外護列石が構築されていることなどから、周辺とは異なる被葬者像を想起させる成果も得た。次年度には20・27号墳の解体を含めた調査を実施予定である。(竹村亮仁)

10. 栢ノ木遺跡第18次

所在地 綴喜郡井手町井手地先

調査期間 令和6年5月14日～令和6年10月4日

調査面積 1,150㎡



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 田辺)

はじめに 今回の調査は、国道24号城陽井手木津川バイパス事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施した。栢ノ木遺跡は、木津川右岸の段丘上に立地している。遺跡の範囲内には、奈良時代から平安時代にかけての古代寺院である井手寺跡が位置しており、今回の調査地は井手寺跡の北東側にあたる。

調査の概要 令和5年度の小規模調査の成果を踏まえ、調査対象地の北側から調査を実施しており、今回の調査は遺跡範囲のほぼ中央に位置する。今回の調査区は、現在の農道両側で実施し、調査区の中央部から南部にかけて、掘立柱建物9棟(建物1～9)と土坑などを検出した。

掘立柱建物のうち、規模が判明したのは建物3と建物9のみであり、そのほかの建物は調査区外に続いており、規模は不明である。

建物3は桁行3間、梁行3間の東西棟で南面に庇を持つ。建物9は桁行3間、梁行2間の南北棟の総柱建物である。

掘立柱建物のうち、建物1・2と建物8・7は重複関係にあるため、建替えが認められる。いずれの建物も、柱掘形は小規模な円形である。柱穴からは、土師器皿、瓦器椀、白磁椀などが出土したため、平安時代後期から鎌倉時代の建物群であると考えられる。

調査区の下層からは、掘立柱建物1棟と礫の集積が確認され、礫集石の周辺からは軒平瓦・銅椀・円面硯・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土し、井手寺跡と共通の遺物が認められる。

まとめ 今回の調査では、平安時代後期から鎌倉時代の建物群と土坑、下層では奈良時代から平安時代の礫集積と遺物を確認した。下層出土遺物は井手寺跡と関係することが特筆される。次年度以降、下層遺構の調査を継続するとともに調査対象地の南側へ調査を進める予定である。

(福山博章)

長岡京跡の発掘調査情報の交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的に、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。令和6年8月から令和7年1月までの例会では、宮域1件、左京域4件、右京域14件、



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊复原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

京域外4件の合計23件の調査報告があった。その中で、調査の終了したものを中心に略述する。なお、報告はなかったものの、期間中に現地説明会で成果が公表された1件も略述する。

宮域 宮545次調査(向日市寺戸町)は、工事計画との関係で一時調査を中断していたが、10月から再開した。新たに調査を始めた地区でも後世による改変が著しい。

左京 左京693次調査(京都市淀水垂町・淀水垂大下津町遺跡)は、桂川の大規模改修に伴う4年目の調査で、出水期の終わった10月に調査を再開している。**左京第694次調査**(向日市森本町)では、北京極大路の南北両側溝と東二坊坊間小路西測溝を推定位置で確認した。なお、北京極大路の北30mと60mの2地点に設置した小調査区でも東二坊坊間小路西測溝を確認できている。**左京696次調査**(向日市上植野町)では、古墳時代前期の埴輪片が出土したが、周辺には前期古墳の存在は知られていない。

右京 右京第1295次調査(長岡京市勝竜寺、中世勝龍寺城跡・神足遺跡)の調査では、地表下3m・標高11mの地点で戦国時代から近世にかけての溝、土坑、柱列を確認した。**右京第1296次調査**(長岡京市天神二丁目、天神山遺跡・天神山古墳群)の調査で、古墳時代の溝1条を確認した。**右京第1298次調査**(長岡京市今里、今里遺跡・乙訓寺)の調査では、中世寺院の存在を確認するための調査であったが、近世の井戸と溝を検出するにとどまった。**右京第1299次調査**(長岡京市井ノ内、井ノ内遺跡)は、支援学校の改築に伴う調査で、長岡京期と古墳時代の遺構を検出中である。**右京第1300次調査**(長岡京市開田、開田古墳群)の調査では、西国街道沿いの近世町屋遺構と幼児を埋葬した屋敷墓を検出した。**右京第1303次調査**(京都市右京区石見町、石見城跡)では、石見城跡の調査が実施され、遺存状態の良い土塁や堀が公開された。**右京第1304次調査**(長岡京市開田、開田城内遺跡)の調査では、南へ流れる流路が検出され、流路跡内の下層から用途不明の断面歯車状を呈する大形木製品が、上層から墨書人面土器や斎串などの祭祀関係遺物が出土した。**右京第1305次調査**(長岡京市井ノ内、井ノ内遺跡)では、西四坊坊間東小路の西測溝が検出された。**右京第1306次調査**(長岡京市馬場、馬場遺跡)の調査では、朱雀大路の西測溝、築地の東雨落ち溝と築地西側の雨落ち溝を検出した。宅地側(西側)の雨落ち溝は、幅広で、多量の布目瓦が出土した。朱雀大路の測溝と築地の一体的な構造が確認されたのは2例目である。昭和61年3月に実施された左京147次調査で発見された朱雀大路東側溝と今回検出した西測溝の芯心間の距離は約66mとなる。このほか、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての竪穴建物5棟と溝を検出し、庄内期を中心とする馬場遺跡の集落の様相が一部明らかになった。**右京第1307次調査**(長岡京市井ノ内、井ノ内遺跡、井ノ内稲荷塚古墳)の調査が、昨年度に続き国史跡井ノ内稲荷塚古墳の後円部東側で実施されている。

京外 溝路遺跡第2次(京都市南区久世殿城町)の調査では、北京極大路と東二坊坊間小路の交差点の北1町分の位置で、小路幅の東西道路を検出し、その道路に直交して北に延びる東二坊坊間小路東側溝と宅地内の掘立柱建物が見つかり、長岡京が北京極大路より北側に広がっている可能性があらためて指摘された。(肥後弘幸)

現地公開

(令和6年8月～令和7年1月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財の発掘調査成果を広く府民の方々に報告し、地域の歴史への関心を深めていただくため、当調査研究センターが実施している京都府内の発掘調査の成果について、現地説明会などの現地公開を行っている。

現地説明会・調査報告会

この間、付表で示すとおり6遺跡で現地説明会を、1遺跡で調査報告会を実施した。

令和2年度から調査が続く福知山市稚児野遺跡では、最終年度の調査を迎えた。調査区は令和2年度調査区の南側にあたり、ナイフ形石器や刃部磨製石斧が出土した。炎天下の中、多くの人々が35,000年前という想像しにくい時代に思いを馳せていた。

今年度は、大宮峰山道路建設に伴う発掘調査による現地説明会が相次いだ。中郡盆地の東側谷奥部に位置する京丹後市老田遺跡の調査では、縄文時代の流路、弥生時代中期の土器を使った取水遺構と縦板組の井戸および戦国時代に遡る寺院関連遺構が検出された。

一昨年度調査を終えた中郡盆地の北側比高100mの位置にある幾坂40号墳から遺存状況の良い木製盾が出土していた。現地が狭小であるため現地公開はできなかったが、今回木製盾の切り取り保存作業の終了に伴い、地元公民館を利用して調査報告会を実施した。切り取った盾をヘリコプターで下ろすニュースが報道されたこともあり、地元の関心を集めることになった。

昨年度から続く松田古墳群B支群の調査では、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての11基の墳墓の調査を行った。多数の埋葬施設が調査され銅鏃、鉄刀、やりがんな及び多数の弥生土器が出土し注目を浴びた。遠方も含めて91名の方が、険しい丘陵に登り熱心に担当者の説明に耳を傾けた。

中郡盆地の東方、奥まった谷部で行われた京丹後市小中田遺跡の調査では、飛鳥時代の人びとが湧水点の近くで暮らしていた



福知山市稚児野遺跡現地説明会実施状況



京丹後市松田古墳群現地説明会実施状況

付表 現地説明会・調査報告会実施状況

遺跡名	所在地	主な成果	開催日時	参加人数
稚児野遺跡	福知山市夜久野町井田	令和2年度調査のブロック群の南端を検出。3万6,000年前のナイフ形石器や調理に利用したと考えられる礫群が出土。	2024. 8. 3	62名
老田遺跡	京丹後市大宮町周枳	弥生時代中期の木組みの井戸、集水施設、戦国期の寺院関連の遺構を検出。	2024. 9. 7	50名
幾坂40号墳	京丹後市大宮町周枳	平野部との比高100mを測る丘陵上に位置する古墳時代中期の古墳。中心埋葬から鉄製武器、装身具、木製盾など豊富な副葬品が出土。調査報告会としてアグリセンター大宮で実施。	2024. 9. 7	83名
松田古墳群	京丹後市大宮町河辺	弥生時代後期後半から古墳時代初頭に営まれた11基の墳墓、59基の埋葬施設を調査。多数の供献土器と銅鏃、鉄刀などの副葬品が出土。	2024. 11. 10	91名
小中田遺跡	京丹後市大宮町河辺	丘陵地の谷奥部で飛鳥時代の集落跡を検出。くぼ地から平安時代の緑釉陶器などが出土。	2024. 11. 16	39名
千代川遺跡	亀岡市千代川町北ノ庄	丘陵裾部から流れる谷水を受けた自然流路内に設置された古墳時代前半期の木樋を検出。古墳時代の祭祀に用いられた導水施設の一部と考えられる。	2024. 12. 1	93名
女布遺跡	舞鶴市女布	平安時代末期の掘立柱建物かからなる集落遺跡。昨年度調査で白磁碗と皿を副葬した土壌を検出した地区から、副葬品と考えられる和鏡が出土。府教育委員会の調査区と合同説明会を実施。	2024. 12. 7	120名



京丹後市小中田遺跡現地説明会実施状況



亀岡市千代川遺跡現地説明会実施状況

様子が復原された。平安時代にも再開発されたようで、緑釉陶器や須恵器などがくぼ地から出土した。

亀岡市内では、大規模な国営の農地開発に伴う発掘調査が続いている。千代川遺跡の調査では、集落の奥部から自然流路を利用した導水施設が見つかった。古墳時代の祭祀遺構として注目される遺跡で、平日には古墳時代研究者の見学が相次いだ。

舞鶴市女布遺跡での調査も3年目を迎えた。府が行う農業基盤整備事業のため、調査は、京都府教育委員会、舞鶴市、当調査研究センターで分担して行っている。昨年度平安時代末期の土壌墓から白磁の碗と皿が出土したが、今年度は、当調査研究センターの調査で墓に副葬されたであろう和鏡が出土し、府教育委員会の調査では、鎌倉時代の青磁碗を副葬した木棺墓が検出された。合同で現地説明会を行い120名の参加者を得ることができた。

普及啓発事業

(令和6年8月～令和7年1月)

当調査研究センターでは、文化財活用の一環として埋蔵文化財の発掘調査成果や最新の研究成果を分かりやすく紹介し、府民の方々に文化財に対する理解をいっそう深めていただくため、埋蔵文化財セミナーや発掘調査速報展をはじめ、小学生を対象とした体験教室、出前授業、「関西考古学の日」関連事業などの普及啓発活動を行っている。

なお、埋蔵文化財セミナー、展覧会、体験教室、普及啓発冊子「もっと知りたい京都の遺跡」の作成にあたっては、京都府教育委員会からの委託事業として実施している。

(1)埋蔵文化財セミナー

埋蔵文化財セミナーは、京都府教育委員会と共催で年3回実施している。

第155回埋蔵文化財セミナー 向日市文化資料館での『発掘された京都の歴史2024』展会期中の8月4日(日)14時から、永守重信市民会館研修室で『京都府内の発掘成果速報』と題して近年の府内の重要な発掘調査成果4件の報告を行った。一人30分の発表とした。まず最初に福知山市文化振興課の鷲田紀子主任が木棺の小口に粘土を用いた6世紀中頃の川上南古墳群の成果を発表し、次いで当調査研究センターの小泉副主査が川上南古墳群と同時期の木棺墓が見つかった芝山古墳群の調査成果を報告した。次いで、当調査研究センターの松谷調査員が京丹後市カンジョガキ遺跡で見つかった7・8世紀の横穴墓について報告した。最後に京都府教育委員会文化財保護課の桐井副主査が、初めて本格的な調査が行われた史跡丹後国分寺跡の調査成果について報告した。当日は猛暑で参加者は61名と少なく、終了時には一転雷雨となった。

第156回埋蔵文化財セミナー 「京都府内の旧石器時代・縄文時代の様相」と題して



第155回埋蔵文化財セミナー会場風景



第155回埋蔵文化財セミナー鷲田氏報告風景



第156回埋蔵文化財セミナー会場入り口



第156回埋蔵文化財セミナー会場風景



第156回埋蔵文化財セミナー水ノ江教授講演状況



第156回埋蔵文化財セミナー遺物見学状況



向日市文化資料館での発掘された
京都の歴史2024展示観覧状況

舞鶴市赤れんがパークで実施した。令和7年度は当調査研究センター設立45周年にあたり、記念展覧会を旧石器時代から古墳時代のくらしをテーマに行うことを計画している。それまでの間の埋蔵文化財セミナーは、それに向けてテーマ設定をすることとした。その第1弾が旧石器・縄文時代である。府北部での旧石器・縄文時代の発掘調査成果が近年続いていたので、会場を当調査研究センターの調査で発見された国内最大級の縄文丸木舟が展示されている赤れんがパークのイベントスペースにした。府外からの参加者も多く、参加者は72名であった。報告1は、当調査研究センター面将道主任による「京都府北部の旧石器時代」で、近年調査した京丹後市上野遺跡と福知山市稚児野遺跡の調査成果を中心に報告した。報告2では、開催地の舞鶴市の松本達也舞鶴市文化振興課歴史まちづくり担当課長により、舞鶴市内の数多い縄文時代遺跡について報告があった。報告3では、当調査研究センターの菅博絵主任が京丹後市平遺跡の発掘調査成果について、遺跡の立地を中心に報告した。最後に同志社大学文学部水ノ江和同教授から、全国の縄文遺跡の状況、世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」、京都の縄文遺跡について講演いただいた。なお、会場では、稚児野遺跡と平遺跡の遺物を展示した。

(2)展覧会等

発掘された京都の歴史2024 当調査研究センターでは、毎年前年度の府内の発掘調査成果を一堂に報告する展覧会を、向日市文化資料館、ふるさとミュージアム山城(京都府立山城郷土資料館)、ふるさとミュージアム

丹後(京都府立丹後郷土資料館)で巡回して実施していた。今年度は、丹後郷土資料館がリニューアルに向けて休館中のため亀岡市文化資料館の協力を得て展示を行った。展示は速報展示と企画展示から構成される。速報展は、当調査研究センターが調査した12遺跡と府内各機関が調査した10遺跡の計22遺跡から構成した。展示品は、刃部磨製石斧、縄文土器、弥生土器、太型蛤刃石斧、埴輪、土師器、須恵器、ガラス小玉、瓦、白磁、瓦器、短刀、青磁、焼き締め陶器、陶磁器と多岐にわたり、展示点数は160点である。大山崎町久保川遺跡から出土した灰釉鳥鈕蓋や佐屋利遺跡出土の楽焼などが注目された。企画展は、亀岡文化資料館で展示を行うことから「亀岡を掘る」と題して当調査研究センターが行った調査から、縄文時代から中世までの名品を中心に展示を行った。京都縦貫道建設、大堰川右岸で実施された国営農地亀岡地区に伴う大規模な発掘調査で出土した縄文土器、弥生土器、埴輪、須恵器、瓦、緑釉陶器、白磁などを展示した。特に時塚古墳から出土した盾持ち人埴輪は見学者の目を引いた。なお、亀岡文化資料館では、資料館が行う企画展「亀岡掘ってみた～亀岡の遺跡の謎～」と同時開催であった。会期は、向日市文化資料館が8月3日(土)から8月25日(日)までの20日間(来館者1,459人)、ふるさとミュージアム山城が9月4日(水)から16日(月)までの12日間(来館者204人)、亀岡市文化資料館が9月28日(土)から10月27日(日)までの26日間(来館者730人)である。総入館者数は2,393人である。向日市文化資料館では子供向きの展示品をデザイン化したプラバンづくりが人気で、多くの子供たち(446人)が来場したことはうれしい限りである。



ふるさとミュージアム山城での展示状況



亀岡文化資料館での展示状況

歴彩館パネル展示 京都府立京都学・歴彩館京都ラウンジで、京都府立京都学・歴彩館との共催事業として「発掘された京都の歴史2024」パネル展を開催した。巡回展示中の「発掘された京都の歴史2024」展の内容をパネル展示するもので、4年目を迎えた。当調査研究センターが20枚のデジタルデータを作成し、歴彩館で印刷・掲示していただく企画である。合わせて、京都縦貫道路建設に伴う篠窯業生産遺跡群の発掘調査で出土した緑釉



歴彩館パネル展示状況

発掘された京都の歴史2024 展示目録

展示品	点数	出土地	調査機関	展示品	点数	出土地	調査機関		
速報展示 発掘された京都の歴史2024				17. 千代川遺跡					
1. 稚児野遺跡				井戸出土土師器(小皿3、皿2)	5	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター		
刃部磨製石斧(令和5年度出土)	1	福知山市	京都府埋蔵文化財調査研究センター	井戸出土瓦器椀	3				
刃部磨製石斧(令和3年度出土)	1			土壇墓出土土師器(小皿4、皿)	5				
2. 佐屋利遺跡・千代川遺跡				短刀(土壇墓出土)	1				
有舌尖頭器(サヌカイト製)	2	京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター	18. 丹後国分寺跡					
有舌尖頭器(チャート製)	1	亀岡市		奈良・平安時代須恵器片(杯B小片、杯蓋小片、墨書「甲」のある壺底部)	3	宮津市	京都府教育委員会		
3. 平遺跡				中世土師器(小皿2、椀)	3				
石鏝	5	京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター	青磁椀破片	3				
縄文土器深鉢(後期・晩期)	5			複弁蓮華文軒丸瓦	4				
4. 中久世遺跡				唐草文軒平瓦	1				
石鏝(打製・磨製)	2	京都市	京都市埋蔵文化財研究所	金剛杵先端部	1				
石斧(太型蛤刃石斧、小型石斧)	2			19. 佐屋利遺跡					
弥生土器(中期 壺、甕)	2			黒楽茶碗片	1	京丹後市	京都府教育委員会		
弥生土器(後期 壺2、甕、台付鉢)	4			灰釉陶器皿	1				
5. ソブ谷西墳墓群				瓦質土器片(すり鉢、香炉)	2				
供献された弥生土器(水差し、甕、鉢、高杯)	4	与謝野町	京都府埋蔵文化財調査研究センター	焼き締め陶器片(越前焼すり鉢、丹波焼甕、備前焼甕)	3				
棺に転用された弥生土器甕	1			青磁椀破片	2				
6. 押田14号墳				20. 田辺城跡					
円筒埴輪(底部、たが部片、口縁部片)	3	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター	パネル展示		舞鶴市	舞鶴市		
朝顔形円筒埴輪片	1			21. 北野遺跡					
蓋形埴輪片	2			墨書のある土師器皿	2	京都市	京都市埋蔵文化財研究所		
線刻のある埴輪片	1			22. 橋本陣屋跡					
7. 久津川車塚古墳				陶器(蓋3、皿1)	4	八幡市	八幡市教育委員会		
パネル展示		城陽市	城陽市教育委員会	磁器(椀3、蓋3)	6				
8. 川上南古墳群				合 計	160				
須恵器(杯身、杯蓋、壺、無蓋高杯、提瓶)	5	福知山市	福知山市教育委員会	企画展示 亀岡を掘る					
ガラス小玉	1式			縄文時代					
9. 芝山古墳群				蔵垣内遺跡押し型文土器	9	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター		
土師器壺	1	城陽市	京都府埋蔵文化財調査研究センター	時塚遺跡北白川C式土器	1				
須恵器(杯身、杯蓋、壺、短頸壺、短頸壺蓋、提瓶、有蓋高杯、有蓋高杯蓋)	8			車塚遺跡緑帯文土器	1				
10. 芝古墳				弥生時代					
土師器高杯	1	京都市	京都市	時塚遺跡方形周溝墓出土弥生土器(広口壺、短頸壺、甕2、鉢、高杯、円形意付土器)	7	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター		
須恵器(壺、無蓋高杯、有蓋高杯2、有蓋高杯蓋2、横瓶)	7			古墳時代					
裝飾壺小像(猪、犬、人、小壺)	4			池尻遺跡出土子持ち勾玉	1	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター		
11. 法貴古墳群				時塚遺跡出土盾持ち人埴輪	1				
土師器杯	1	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター	保津車塚古墳出土木製埴輪	1				
須恵器(杯身2、杯蓋2、平瓶)	5			国分29号墳出土須恵器(蓋杯、直口壺、短頸壺、特殊偏壺、提瓶2、横瓶、無蓋高杯)	9				
12. カンジョガキ遺跡				国分29号墳出土水晶製切子玉	1				
須恵器(杯A4、杯B、杯B蓋、台付長頸壺)	7	京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター	国分古墳群出土金銅製耳環一式	1				
13. 久保川遺跡				国分45号墳出土銀装大刀	1				
灰釉陶器鳥紐蓋	1	大山崎町	大山崎町教育委員会	奈良時代					
須恵器(杯B、杯B蓋、小壺)	3			佐伯遺跡出土軒丸瓦、軒平瓦	2	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター		
墨書土器(「大宅」2、「麻呂」)	3			三日市遺跡出土軒丸瓦、軒平瓦	2				
灰釉陶器椀	1			平安時代					
14. 長岡京跡右京・開田遺跡				篠窯業生産遺跡群出土緑釉陶器(椀2、皿3)	5	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター		
土師器(椀、甕)	2	長岡京市	長岡京市埋蔵文化財センター	篠窯業生産遺跡群出土須恵器(椀、鉢2、耳皿、蓋2、円面硯、壺、二耳壺、平瓶)	10				
須恵器(杯A2、杯A蓋)	3			中世					
複弁蓮華文軒丸瓦(乙訓寺創建瓦同范、長岡宮式)	2			大飼遺跡出土土師器小皿	5			亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
15. 井ノ内遺跡				大飼遺跡出土瓦器椀	3				
土師器(小皿、皿)	12	長岡京市	京都府埋蔵文化財調査研究センター	大飼遺跡出土青白磁小壺、同蓋	2				
瓦器椀	1			大飼遺跡出土白磁椀	1				
16. 女布遺跡				合 計	63				
白磁椀	1	舞鶴市	京都府埋蔵文化財調査研究センター	総 合 計	223				
白磁皿	4								



歴彩館京都学ラウンジミニ講座講義風景



府庁2号館ロビー展示状況



夏休み体験講座実施状況



第3向陽小学校出前授業実施状況

陶器4点と須恵器6点を展示・解説した。会期は令和6年10月1日から10月31日までで、603名の方が来場した。会期中、歴彩館主催の「京都学ラウンジミニ講座 パネル展「発掘された京都の歴史2024」を通してみた古代史」に2回講師を派遣した。

府庁2号館ロビー展示 京都府庁の職員及び来訪者向けの展示スペースで、埋蔵文化財保護の啓発と当調査研究センターの活動報告を兼ねたミニ展示を毎年実施している。今年度は、12月17日(火)から12月26日(木)までの間、「亀岡の古墳時代」と題して池尻遺跡出土子持ち勾玉、保津車塚古墳出土木製埴輪(石見型盾樹物)、時塚古墳出土盾持ち人埴輪、国分29号墳出土須恵器・装身具、国分45号墳出土銀装大刀を展示した。

(3) 体験学習・出前授業等

夏休み考古学体験講座 勾玉をつくろう 令和6年8月7日(水)・8日(木)・9日(金)の3日間の午前・午後、計6回にわたり、当調査研究センター研修室で、乙訓教育局管内の小学5・6年生を対象として体験講座を実施した。1講座20人として募集したところ、18校計89名の参加があった。児童たちは、1時間30分ほどの作業時間の中、センター職員の指導のもと、楽しく勾玉を作成した。

京のまなび教室 8月1日(水)に長岡京市長法寺小学校からの依頼を受けて、5・6年生を対象とした勾玉教室を実施した。参加人数は15人である。

出前講座「勾玉をつくろう」 9月20日(土)に向日市立第3向陽小学校の依頼を受けて、小学校4年生2クラス計46名を対象



関西考古学の日・秋の考古学講座実施状況



もっと知りたい京都の歴史 第15号

とした勾玉教室を行った。1クラスずつ2限を利用して、教員の方2名にお手伝いをいただいて実施した。

各地文化祭出張展示 亀岡市曾我部町と京丹後市大宮町河辺地区で発掘調査を実施している地区の文化祭で出張展示を行った。

第31回大中まつり 参加を予定していたが、雨天中止となった。

関西考古学の日関連講座 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックが行う普及啓発事業「関西考古学の日」の事業として、『秋の考古学講座』を10月19日(土)と11月16日(土)の2回開催した。第1講座が菅博絵主任による「方格規矩鏡に表された世界観」(参加者21名)、第2講座が山本梓主任による「拝田14号墳の調査成果から考えた亀岡の古墳時代」(参加者20名)である。

(3) 普及啓発誌「もっと知りたい京都の遺跡」の刊行

令和6年度1冊目(第15号)として、江戸時代に大流行したくらわんか碗をとりあげた「江戸時代の大ベストセラー波佐見焼—くらわんか—」を刊行した。

(4) その他

当調査研究センターの情報発信は、ホームページとSNS(Social Network Service)のフェイスブック、X、Instagramで行っている。
(肥後弘幸)

センターの動向

(令和6年8月～令和7年1月)

- 8 1 京のまなび教室等特別講師派遣事業「勾玉をつくってみよう」(於：長岡京市立長法寺小学校) 講師 筒井・鍋田課長補佐、細川係長 参加者15名
- 3 「発掘された京都の歴史2024」展開始(於：向日市文化資料館 ～25日)
稚児野遺跡(福知山市)現地説明会 参加者62名
- 4 第155回埋蔵文化財セミナー「京都府内の発掘調査成果速報」(於：永守重信記念会館) 参加者71名
- 7～9 夏休み考古学体験講座「勾玉をつくろう！」(於：当調査研究センター) 参加者89名
- 21 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
- 22 役員協議会(於：当調査研究センター・向日市文化資料館)
- 25 令和7年4月採用職員採用選考1次試験(於：永守重信市民会館)
「発掘された京都の歴史2024」展終了(於：向日市文化資料館) 入館者1,459人
- 31 向日市立勝山中学校職場体験活動受け入れ(～30日)
- 9 4 巡回展「発掘された京都の歴史2024」開始(於：ふるさとミュージアム山城 ～16日)
- 7 老田遺跡(京丹後市)現地説明会 参加者50名
幾坂40号墳(京丹後市)調査報告会(於：京丹後市アグリセンター大宮) 参加者83名
「発掘された京都の歴史2024」展示解説(於：ふるさとミュージアム山城)講師：筒井課長補佐
- 15 令和7年4月採用職員採用選考2次試験(於：当調査研究センター)
- 17 京都府立大学考古学研究室松田古墳群(京丹後市)現地見学
- 18 巡回展「発掘された京都の歴史2024」展終了(於：ふるさとミュージアム山城) 入館者204名
- 20 出前授業「勾玉づくり」(於：向日市立第3向陽小学校) 講師：肥後課長補佐、武本主任 参加者46名
- 25 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
- 28 巡回展「発掘された京都の歴史2024」展開始(於：亀岡市文化資料館 ～10月27日)
- 10 1 「発掘された京都の歴史2024」パネル展開始(於：京都府立京都学・歴彩館 ～31日)
- 3 歴彩館ミニ講座「横穴式石室考」(於：京都府立京都学・歴彩館)講師：小池課長
- 4 栢ノ木遺跡(井手町)現地調査終了(5月14日～)
- 5 巡回展「発掘された京都の歴史2024」展示解説(於：亀岡市文化資料館)講師：肥後課長補佐
- 12 京都橘大学文学部歴史遺産学科校外授業(於：亀岡市千代川遺跡)講師：辻調査員
亀岡市文化資料館企画展講演会「亀岡市里遺跡の謎に迫る」(於：亀岡市文化資料館)講師：小池課長
- 17 国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所主催京都府立清新高等学校生徒現地見学会(於：松田古墳群)
- 19 関西考古学の日2024 秋の考古学講座「方格規矩鏡に表された世界観」(於：当調査研究センター)
講師：菅主任 参加者21人
- 23 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
京都を学ぶセミナー丹後編「丹後の弥生王墓と遠隔地地域間交流」(於：京都府立京都学・歴彩館)
講師：高野参事

- 27 巡回展「発掘された京都の歴史2024」展終了(於：亀岡市文化資料館) 入館者730名
- 31 「発掘された京都の歴史2024」パネル展終了(10月1日～) 入場者603名
- 11 10 松田古墳群(京丹後市)現地説明会 参加者91名
- 14 松田古墳群(京丹後市)現地調査終了(5月1日～)
- 16 関西考古学の日2024秋の文化財講座「拝田14号墳の調査成果から考えた亀岡の古墳時代」於：当調査研究センター 講師：山本主任 参加者20名
- 小中田遺跡(京丹後市)現地説明会 参加者39名
- 17 亀岡市曾我部町文化祭出張展示(於：曾我部町自治会館)竹村主任派遣
- 23 墓の平古墳群(井手町)関係者説明会 参加者20名
- 歴史講演会「古墳出現期の山城南部の地域勢力と東海」(於：名古屋市しだみ古墳群ミュージアム) 講師：高野参事
- 25 小中田遺跡(京丹後市)現地調査終了(4月25日～)
- 27 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
- 30 第156回埋蔵文化財セミナー「京都府内の旧石器・縄文時代の様相」(於：舞鶴市赤れんがパーク) 参加者72名
- 12 1 京丹後市大宮町河辺地区文化祭出張展示(於：河辺区民センター)高野参事、黒坪副主査派遣
- 千代川遺跡(亀岡市)現地説明会 参加者93名
- 7 文化財講演会「京都市法成寺を掘る」(於：ふるさとミュージアム山城)講師：松井調査員
- 女布遺跡(舞鶴市)現地説明会 参加者120名
- 15 京丹波町民大学歴史講座「丹波の山城について」(於：京丹波町役場)講師：引原副主査
- 17 京都府庁2号館ロビー展示「亀岡の古墳時代」(~26日)
- 19 恭仁宮跡調査専門家会議(於：京都府庁)筒井課長補佐派遣
- 23 第51回理事会(於：京都市)
- 丹後国分寺跡調査専門家会議(於：京都府庁)森島係長派遣
- 26 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
- 1 22 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)

編集後記

短い秋が過ぎ、長い冬を経て、ようやく暖かい春の日を迎えました。

ここに『京都府埋蔵文化財情報』第148号が完成しましたので、お届けします。本号は、調査詳報2本、寄稿1本、研究ノート4本と充実した内容になっておりますので、ご一読いただきますようお願いいたします。

今後ともみなさまのご指導・ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

(編集担当 肥後弘幸)

京都府埋蔵文化財情報 第148号

令和7年3月21日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<https://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷





KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER